松尾周子遺稿

わたしの小さなたより

第三集

社会福祉法人 みぎわ会

松尾周子

2003年元旦　玄関にて

2003年5月17日　みぎわ園改築竣工式

2004年10月13日　卒寿お祝い会

わたしの小さなたより

はじめに

この度、「わたしの小さなたより」第三集を上梓することが出来ましたことは、私たち関係者にとりましても喜ばしい限りです。

この文集はご存知のとおり、みぎわ会創始者故松尾周子先生が毎月一回、一度の欠落もなく「みぎわ会だより」の巻頭言として書き続けられたもので、まとめて一冊の本としたものです。九〇歳まで現役医師を続けられ、老人福祉施設「みぎわ園」を理想の「終のすみか」と位置づけ、日々努力された先生の心の軌跡でもあります。医師としての活動だけにとどまらず他方文章を書き、花や茶道、書字に至るまで多彩な才能を振るわれた文人でもありました。

今は亡き先生もこの文章の完成をきっと喜んでおられることでしょう。

この一冊を天上の先生に捧げます。

二〇〇八年五月

社会福祉法人みぎわ会
理事長　丸野　貞彦

みぎわ会だより

第131号 2002. 1. 1発行　＜新年号＞

壽

本年もよろしくお願い申し上げます

二〇〇二年元旦

理事長
松尾周子
外一同

みぎわ会
だより
第132号 2002. 2. 1発行

ショウ ザ フラッグ（SHOW THE FLAG）

寒中お見舞い申し上げます

あと三日で立春の今日でございますが、肌を刺す寒さです。

皆様にはお変わりなく、新春をお迎えの上、引き続きよき日々をお過ごしでいらっしゃいますか。お伺い申し上げます。

私たちが夢を託して迎えました新しい世紀も第二年の訪れとなりましたが、今のところ、政・財・学・官・商・各界それぞれに、明るい訪れは聞こえてまいりません。つい気が重くなるニュースが相次ぐ毎日です。

けれど、木蓮林の黒い土からは水仙が伸び、霜にもめげず、可憐な花を開きました。毎日毎夕、出退勤の途上で沁々と眺め励まされ、またこの村のどこかに咲き出しているらしい梅の香りがほのかに漂い、「春近し」を感じ慰められもいたします。

さて、私共の工事は、第一期分が予定通り完了しました。今月半ばから引越がはじまりますと、同時的に第二期工事が着手され進められてまいります。第三期終了まで十五ヶ月近い期間、想像以上にきびしく、対応のむずかしい時となることでしょう。希望を持ってこの訓練に耐え、力を内藏してゆきたいと願っています。転室などにつき、利用者皆様のご協力をお願いいたします。

新しい玄関ポーチの屋根正面には、みぎわ会のシンボルマークをつけること、この屋根を支える二

本の円柱には、国旗と園旗を掲げる旗筒をとりつけることを決めました。

四季それぞれの風にこの小さな旗がハタハタとはためく様を想像しますと、何か胸のときめきが湧き上がってまいります。旗は、「ここはみぎわ園です。いこいの汀・・・オアシスの岸辺・・・です」と宣言しているのです。

正しく私たちの「ショウ　ザ　フラッグ」です。

昨秋来のアフガン戦争の中で、この言葉を教えられましたが、考えてみますと「旗を上げよ」「旗色を鮮明にせよ」「これぞ錦の御旗なるぞ」等々、日本語にも沢山の立派な「ショウ　ザ　フラッグ」がありました。

創立以来、「いこいの汀」を旗印として進んでまいりました私たちです。改築された新しい建物も、このフラッグをブランドとして進まねばと祈りつつ、思いめぐらす毎日です。

皆様、どうぞ私たちをお見まもりください。若し旗色が冴えないとお感じの折りには、「あなたの旗は、ほんまもんですか」とお声を掛けて下さいませ。是非なる御指導をお願い申し上げます。

皆様のご健勝をお祈りいたします。

美しい春を待ちつつ。

みぎわ会
だより
第133号 2002. 3. 1発行

春愁

「暖かな春の日で三月に入りましたが、今晩からは又、冷たい寒気が南下してきます・・・」三月一日夕刻の気象予報士の言葉でした。

誰もが待つ春は、こうした人間には予想も出来ない、支配も調整も出来ない、寒暖・晴雨の波の中で、ひそかに、しかし、確実に運ばれてくるのですね。

皆様には暖かくのどかな春が訪れていることと存じます。どうぞご健康で楽しくお過ごしでございますようにと祈ります。

二月はあわただしく過ぎてゆきました。僅か三日のちがいですけれど、ひどく短かく感じます。殊に私たちみぎわ園には、忙しく心も体も走りまわるような一ヶ月でございました。前月お知らせ致しましたように、第一期工事が終わりました。すぐ第二期工事へと進んでいます。

まず調理部から移転がはじまりました。施設という生活の場では一番大切な「介護」と共に二本柱である「給食」・・・食べる・・・生命の根源でもあり、毎日の生活の中で一番楽しい分野を受け持つ調理という仕事場です。新しい調理室には職員の要望に応じ、何種もの新しい器機・設備を取り入れ、一層働き易く、能率よく、美味しい「お食事」が作り出されるよう「レイアウト」されました。

九日、県、建築関係及び衛生部門・・・保健所の検査をパスしました。十一日より調理が再開しています。一日から十日までは外食に依る外ありませんでしたので、入所の皆様も職員も待ち兼ねてい

ました「うちのおいしいごはん」が出来はじめました。移転のための準備十日間も大変でしたけれど、「新しい調理室で使うのだから、お鍋でもお玉でも、何もかもピッカピカにして運んでね。夫々の置き場所の手順を考えてまごつかないように、十一日からはサッとお仕事ができるようにするのよ」私は十回位もくり返して部員に指示しました。「『あれどこにあるの？　これどこへしまうの？』なんて言うことはできないのよ」と、きびしいお母さんを演出いたしました。配膳車への積込み、引き膳の流れ、すべて現場の意見を採用した設計・レイアウトになっていますので、順調に流れははじまっています。

十二日、居住部について検査を受けました。設計と仕様、収支帳簿、更に建築として専門的な検査が夫々県の担当者によって行われました。いよいよ十三日より移動がはじまりました。介護部が練りに練った構想通り「あら、もう終わったの？」と新館二階に独り住まいの私はそう言う外はありません。

事務所も新しい机、気持ちよく並ぶ一列の棚、沢山の新しいＩＴシステムによる情報装置がきちんと設置されています。引越は一日で終わりました。新しい玄関は明るく広々としたいい感じです。「この壁タイルと床、まあまあよかったナー」と色選びに苦心した私には一入の想いがあります。

利用者は十八名程度の方が新築部二階に移動されました。ゆったり広い四人室はとりあえず五人で使用して頂いていますが、それでもせまくるしい感じはありません。皆さんのベッドを窓に向けました。広い明るい窓です。「大きな広い空が見え、流れる雲が見え、小鳥の飛ぶ姿、遠い山々に日が上り、夕日の沈むのも眺められて、もう本当にうれしいです。」Ｓさんは詩になりそうなコトバを満面の笑みでよろこび話して下さいました。

すべてに小さな事故もなく、八ヶ月の工事はこのように無事完了しました。神様に感謝、働き人に感謝、すべてに感謝です。が、これから七ヶ月、第二期工事期間は居住棟が東・西に分断され、何もかも大変です。南面はナオミ館の中を通ってイサク湯から東棟まで仮設の通路が作られました。北側はD棟の端から新館とルデヤ館まで工事用車輌の往来のひまを縫って「ガードマン」の旗に守られ、配膳車、入浴車、又私共も往来いたします。どうぞ、無事の日々がつづきますように。

つぶやきもなく、明るい表情といつものように明るい歩調で働く職員たち、自分のことのように工事の完成を喜び、又、これからの大きな工事に心をよせ案じて祈って下さる入所の皆様に慰められ、力づけられています。ありがとうございます。

庭には下枝梅が白い大きな大気球のように花の塊を浮かばせています。ほのかな香りが流れます。木蓮林の土が良くなったせいでしょうか、二、三年消えていましたラッパ水仙があちこちに伸び上がり、花の黄色が小さな蕾の外からうっすらと見えはじめました。

三十年余大切に仲良く使い、喜憂を分かち合った古い建物は消えてゆきました。残っているのもみんな消えます。思い出だけ残して。新しい建物はこれからまたみぎわ園の一日々々の歴史が織りなされてゆく様を黙ってつつみ込んでゆく事と思います。何か切ない想いが私の中にゆれています。これを春愁というのでしょうか。

いつもこの小さな便りをお読み下さる皆様の御多幸を祈ります。そして、私のこのひそかな事業へいつもお熱いお心を寄せて頂いていますことに、深く感謝いたしています。

どうぞあなた様の春が喜びの日々でありますよう、心よりお祈り申し上げます。

みぎわ会
だより
第134号 2002. 4. 1発行

新年度

四月一日の朝です。

新しい年度が来たと思いますと、何か心に強く走るものがあります。

この二、三日のポカポカ日和で、長い日本列島は南から北まで一斉に桜満開の花だよりが走ります。

外に立ちますと、そこ、ここに正にパッと咲き切っている花が眺められ、春はジャンプして訪れたことがわかります。

皆様お変わりございませんか。毎月の同じようなこの便りをお読み頂きましてありがとうございます。皆様もこの頃は、入学・卒業・就職など様々な新しい転機に関わっていらっしゃいますことと存じます。

希望いっぱいの新しい出発にはそれなりの準備が要るのだと重ねて強く思わせられます。勇気も忍耐も体力も要ります。その新出発のお一人々々をとりまく者たちにも思いやり、励まし、見守りなどが要ります。希望と不安の混じった緊張の時です。

ここ、みぎわ園にも七人の新人が入職してまいりました。全員「介護職」を目指している、若々しく　愛らしく　柔らかく　新しい「われ等の仲間」です。逞しく　やさしい人に育ってほしいと私たちも緊張して迎えました。

現在のみぎわ園利用者を生年号毎に大別してみますと

明治生まれ　38人・・・28％
大正生まれ　79人・・・58％
昭和生まれ　20人・・・15％

となり、

最高は99歳
最低は56歳

という構成です。一言で介護と申しましても、親子の開きある年齢差・生活歴・病歴・知的レベル、すべてお一人々々異なっている方々です。私達の理念に立って大切にお世話するということは、大変難しく重い仕事でございます。三月半ばから新任職員の事前研修を行いました。二十時間に及ぶ相当濃厚な内容の学習です。私は「倫理綱領」三時間、「老人の健康とケア」四時間、計七時間を担当いたしました。毎日一時間ずつ続ける中で、七人の顔と名前を覚えたのは嬉しいことでした。「皆さん、この学習はこれから皆さんが入学するみぎわ大学の準備学習なのよ」と私は切り出しました。「この準備学習をしっかり受けて、四月から皆さんを教育して下さるのは入所の皆さんだと考えて下さい。利用者の皆さんはみぎわ大学のプロフェッサー（教授）なのよ」

若い人たちは一生懸命よく聴いてくれました。きっと一年経てば私たちの新しいパワーに育ってくることでしょう。皆でやさしく　きびしく　きちっとコトバや実技で援助してゆきたいと思っています。ここにも希望と期待に満ちた新しい年がはじまっています。

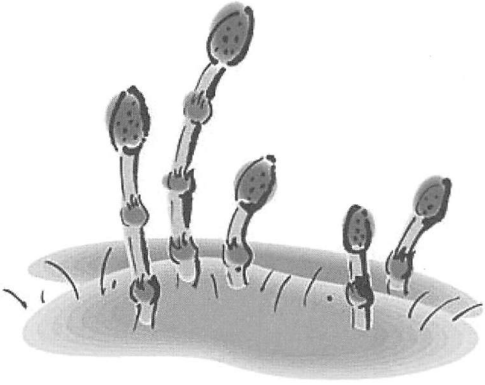
・・・・・・　・・・・・・　・・・・・・

「四月一日よ、これから一年、三六五日の戦いよ、大丈夫?」

今朝、鏡の中の自分に私は小さく問いかけました。「・・・・・・・・・・・・・・」

あなたの道を主にゆだねよ　聖書の御言葉が心の中にささやかれてきて、私たちはやっと小さくうなずき合いました。

今みぎわ村は隅々まで幸せの色と呼ばれる黄色だけでなく、赤・ピンク・紫・白、色とりどりの花々が美しく咲き盛っています。ご来訪をお待ちしています。



みぎわ会
だより
第135号 2002. 5. 1発行

感謝と夢

「風光る」さわやかな五月が待たれました。今日、その五月一日が明けました。気温が激しく上下し、夏日かと思えばヒーターのいる翌朝であったりと、地上の世の人々の流れにも似て、不安定で重苦しい雲の日も多い四月でしたから。

桜は慌しく満開し、ほんとに果敢なく散ってゆきました。あちこちからいろいろな花だよりも届けられてきます。まわりの山々はこうした気象条件下では優しいほほえみを見せる暇もなく一気に緑に燃え上がってしまいました。

薫風の五月を皆様御健勝にてお迎えでしょうか。お伺い申し上げます。

昨日でしたか、お昼休みに珍しく一寸ボタンを押したＴＶの画面では、武田鉄矢の「まっすぐの唄」が演じられていました。

「まっすぐだけが　つきささる
　まっすぐだけが　終わらない」

この唄を歌う前に少し彼の芝居についての話もありました。彼にとって大先輩である　共演者「高倉健」又、有名な監督「山田洋次」氏について語った彼の僅かな言葉は、何となく心打たれる話でしたし、続いて歌われたこの唄も心を打つものがありました。私のように古く固い人間にもわかり、共鳴できる話や唄に出会い、ほっと心の落ち着きを頂きました。

―まだ私にも通用するみたい―　そんな気分に力を得、白衣を着、聴診器を首にかけて新築西棟とルデヤ館の部屋々々をお訪ねしました。

珍しく殆どの方が目を覚ましておられ、歓迎してくださいました。「起きられへん―」と訴えるYさんと暫く慰め合い、ショートステイを続けているOさんの「早う入所にしてほしい！」という声に、出来るかどうかわからないけれど努力してみることを約束し、お一人々々の眼差しに心をこめて応えてゆきました。

「ああ、センセか、マツオセンセやな～。ああ、今日はええ日イや。センセに会えてうれしい。センセ、いつまでも元気しとってくださいよ。お祈りしてまっせ。ああ、よかったあ」何度聞いてもありがたいNさんの明るい声をいただく等、いい時間を与えて頂きました。その中で気付いたことですが、いつも気にかかっている「リース寝具」が、入浴者の空床上でそれぞれベッドの足側に、二つ折りに片付けられているのです。何回か離床後のベッド上の姿を話し合いました。おふとんが乱れたままの侘しさを指摘したことがあります。現場の皆さんがこんなにあの話を聞き入れて、きちんと実行していてくださったのか！　これは正にまっすぐなよろこびと感謝の小さな感動でした。

リースのお布団カバーの色落ちが話題になったことがあります。やや色褪せた寝具でもベッド上にきちんと片寄せてたたんでありますと、惨めさはなく、新築の明るい部屋にもそれなりに馴染んでいました。少しずつ気分が晴れやかになってゆくのを覚えました。

工事は予定どおり順調に進んでいます。まだ一年続くのですが、きっと明るい綺麗な皆さんの新し

い住居が出来上がることでしょう。

今朝、朝礼でいつものように各部の報告を聞きました。みぎわ園の24時間の流れの内容が必要な点・点で的確に記録され、個々のケアがどういうコトバや仕方でサービスされているか、ご利用の皆さんがその流れの中でどう生活していらっしゃるかが、フィルムを見るようによく見えてきます。ナース・ケア・給食・レクリハ・ラウンジ夫々の報告が連り合って、この施設の姿を映し出してくれます。利用者と職員の交わりも、ほんの短い記録から生き生き見えてまいります。

毎朝四十分を用いるこの時間は、私にはもとより、誰にもとても大切なアミノ酸なのです。

今朝は殊に細かな記録を一生懸命読み上げる一人々々の背景にある三十余年の歴史がまざまざ感じられ、ここにもまっすぐな途上にある感慨を覚えました。

「ローマは一日にして成らず。」とか。

二十数年続けてきた「全員セミナー」、飽きることなく注文をつけつづけてきた「記録と言葉」ほか、みぎわ会の「学び」は色褪せず、営々と継承される中で育ちを続けてきた歴史が見えます。これもまっすぐな道でした。

去る四月二十五日、第二三〇回のセミナーを持ちました。ここでも各施設から精一杯の新年度への取り組みのビジョンが去年の反省の上に立って発表されました。

私は新年度に向けての五分間スピーチに

「若くして学ばば　壮にして為すあり。壮にして学ばば　老いて衰えず。老いて学ばば　死して朽ちず」

という江戸期の儒学者　佐藤一斉の言葉を、数日前新聞紙上で小泉首相が早大の学生に、「本気で学問しよう」との講演に引用されたものを借用させて頂き、「ともかく学びましょう。素直に、謙虚に」と学問のすすめを致しました。

では、また。

みぎわ会
だより
第136号 2002. 6. 1発行

このごろのこと

六月五日です。

この程は晴天つづきで快適です。が、早くも真夏日に近い暑さも伴ってきました。変化の激しい季節ですけれど、皆様はいかがお過ごしでしょうか。ご健勝お祈り申し上げます。

この月は何故かなかなかペンがとれません。私には珍しい現象です。毎月末になりますと、この小さな「たより」のことが気にかかりはじめます。何をテーマにしようか、どう組み立ててゆこうかしら等、何となく楽しみ半分に想いをふくらませるのが習慣でした。けれど五月半ばから何とはなしに「空しく、もの憂く」一番好きな読書にも手も気も出ない夜が続きました。体調が悪いわけではありません。きっと「軽いうつなのかも」と自己診断し、経過を見ていました。毎朝離床に努力がいります。でも、自分を励まして、ベッドを離れ、身支度にかかりますと、「ああ、神様ありがとうございます。」とつい言葉になり、「どうぞ今日一日に必要な力を与えてください。」という祈りにつづくのがいつもの姿です。

この頃、そういう私の中にもう一人の自分が現れてきます。その私が、「疲れてるのよ。休めばいいんじゃないの。」とささやきかけるのです。表のドアを閉めて、キイを挿し込んでいるときにも、「まるで一人前のようにドアをロックしているのね。どこへゆくの?大丈夫?」と皮肉を込めて問いかけ

てきます。これはいつものことなので聞き流して私はホームへ向かいます。うれしいのは庭の花々です。
ニコニコほほえみかけてくれるパンジーたち、慰めそのものの柔らかいピンクのかすみ草、真紅のつるばらは元気でいってらっしゃと励ましてくれます。「ありがとう。行ってまいりまあす。」と、ここで私は、一寸ポーズの気分になり（自分は颯爽のつもりです）ゆっくり歩を進めます。・・・よろよろかも・・・が、不思議にも施設に一歩踏み込みますと、何故かヒザの痛みも少し忘れ、一寸姿勢が整うのです。廊下で逢う皆さんに「おはようございます」「お元気？」とか「いいお天気ね」等いつもの挨拶や笑顔が自然に出てしまい、それに応えて下さる皆さんの笑顔や声で私は昔の若い自分にタイムスリップしているのに気付きます。「よかったね、出勤できて・・・」もう一人の私が遠慮がちにささやきます。「仕方がないよ、これしかできないんだもの」とは、私。

学習のこと。

五月十八日には「エビデンス老年医学会」が、六月一・二日には「第二十五回日本プライマリケア学会」が夫々神戸ポートピア国際会議場で開かれました。老年学会は一人で参加しましたが、プライマリケア学会はコメディカルの参加も認められていますので、臼井婦長と同道いたしました。

学会へ出席する時はいつも学習への情熱に似た渇きを感じます。「あなた、難しいお話わかるの？もう学会って年でもないじゃないの」もう一人の私はいつも私を見つめてささやきかけるのです、「だって、まだ現実に診察しているんだもの。新しいことを学ぶのはあたり前よ」と私は言い返します。でも、行ってみると受付の人たちまで、「あんなに高齢になっていてよく来るわねー」とみているような妄想にとりつかれることもあります。

この度の学会のテーマは、「少子高齢社会とプライマリケア」でした。

高齢者医療について新しく鋭い医学的というより人間的見解にふれることが出来ました。私には大変よい学習の時となりました。特に「長寿↑延命＝幸福」ではない。「長寿＋Q・O・L＝幸福」であると健康長寿のすすめが強く主張されました。ケアもまた延命ではなく、Q・O・Lの維持・向上を目指すべきだとも主張されました。

「Q・O・L」という言葉もすでにトレンド性を通過し、本来の人生の意味を示唆する言葉となっています。難しい言葉です。「Q・O・L」「Q・O・L」と繰り返し考えさせられました。

「高齢者のケア」に半生をかけた私にとり、鋭い問いかけでありました。既に燃え尽き症候群の「うす闇」に落ち込んでいる道を見定めることも、歩みぬく脚力も失いつつある「わが老い」の確認であったとも申せます。「すべて神様にお委ねすることよ」もう一人の私のささやきに私は心よりうれしく同意いたしました。

◇――――◇――――◇――――◇――――◇

毎日々々ワールドカップの情報が休むひまもなく流れています。時には早く終わればいいのにとつぶやいた私ですのに、四日夜日本対ベルギー戦の放映には夢中になり、恥かし気もなくテレビへ声援を送ったり、やっと点が入ると力いっぱい拍手したり「自称うつ」はいつの間にかサッカーで消えてしまいました。

選手たちのご健闘を祈ります。

では、また、どうぞお元気で。

みぎわ会
だより
第137号 2002. 7. 1発行

教会・W杯

七月一日です。

六月は「梅雨ざむ」という珍しい低気温にとまどう一方「W杯」なる戦いの魅力についつい興奮させられる（うっとうしい中で時々ワクワクするときもある）そんな中で思わず一ヶ月は過ぎてしまいました。

皆様はいかがお過ごしでございましたか。まだ暫く不安定な今年の梅雨季が続きそうです。

くれぐれも御健勝にお過ごしくださいませ。

― みぎわ教会のこと ―

西脇みぎわ教会は、現在どの教派にも属さない自由な独立教会です。と申しましても、十名余りの平均年齢は80才を越える正会員が喜びと感謝を以ってこの事業の「スピリット」である教会を守り、神に仕える使命感に心を燃している小さな教会です。私たち信者にとり日曜日は「聖日」とされ、神に「礼拝」を捧げ、「安息」の中に過ごす一日と定められています。

幸いにも日曜日は欠かさず「礼拝」を守らせて頂いてきました。現在は武田牧師の心を込められたメッセージ、牧師夫人の素晴らしい奏楽、共に司会、献金当番などは、いずみ・ハンナの利用者である方々がしっかり受け持って下さっている美しい教会です。

毎水曜日の祈祷会も必ず七～九名の方々が自発的に集い熱心に聖書を学び、施設のため、職員たちのため、又、私のためにいつも熱意溢れる「お祈り」を続けていてくださいます。ステキな教会です。

礼拝出席は30～40名で満たされています。殊にみぎわ園からの出席者は殆ど車椅子です。忙しい職員の皆様が20名余の方たちの車椅子の送迎をして下さいます。これは本当にすばらしい奉仕です。感謝でいっぱいです。日本に二つとない姿ではないかと、私は神様に感謝し、皆様に感謝し、励まされ、力づけられています。

六月三十日の礼拝のことです。いつも出席されるアルツハイマー症の方たちのお一人　Mさんを、私の隣に座って頂きました。こうした方々は、礼拝中でも平気で勝手なおしゃべりをはじめられのです。「Mさん、先生のお話中はだまっててね。」私は開会前にMさんにそっと、しかししっかりささやきました。

讃美歌も、お祈りも、聖書を読むこともできないMさん達が必ず礼拝に参加される背後には、私たちには想像も出来ない、神の御愛がある事を私はいつも想い、且つ、信じています。

この方たちのお顔が揃うとほっと安心します。けれど、やっぱりお説教の最中におしゃべりが始まるのは困りますす。私はMさんと並び、Mさんの方は見ず、まっすぐ講壇に向かって座っていましたが、心は絶えずMさんを見守っていました。Mさんは静かに座り、両手で自分の膝をさすってじっとしていてくださいました。私は神様の優しいおいつくしみが彼女に注がれているのを感じました。

終わりも近くなり、私は幸いにもバッグの中に一粒見つけたアメをそっとMさんの手に渡しまし

た。アメの包紙をはがす私にいつものMさんの声が、「マア、センセ　コレクレテンデスカ？スミマセン・・・」と大きく出始めました。「ああ、失敗！早すぎた！」私は浅はかな自分を恥じ、心に詫びながら彼女の口に手をあててしまいました。神様が最善を為し給うているのに！いつも情けない私です。私はこれからもMさんと並んで礼拝を守りたいと祈っています。

― W杯のこと ―

二十九・三十日の両夜はテレビ席を離れることはできませんでした。開幕迄は「ルール」も知らず、何か芝居じみた荒っぽい「ゲーム」のように感じ、サッカーへの関心はありませんでした。

唯、これから一ヶ月はいつも叫び続けるようなアナウンサーの声と、この度新しい知識となった「サポーター」という群衆の異様な姿や余りにもオーバーと見える行動を、毎日リモコンを押す度に見せられるのかナー。終わるのを待つほかないという気持ちでした。ところが申し訳ない次第です。まさかと考えていました日本軍が予選を突破してしまいました。そうする中で、サッカーというゲームの激しさと、その激しい肉弾相打つ戦いのさ中にも、敵味方の選手たちがさり気なく見せる相手への思いやり、時にふっとこぼれるほほえみなどについつい引き込まれてしまい、サッカーの一ヶ月が過ぎました。二十九日の第三位決定戦はいろいろ先入観もあり、心の傾きもあり、私は余りフェアな観客とは言えませんでした。

戦いはまずは終わりました。サポーターもフェアでありたいというようなもの悲しさが残りました。

三十日の優勝戦は「満子、どっちにかける?」という気楽な観戦です。「満子がブラジル」なら「私はドイツ」と互いに楽しくサポーターを演じました。この熱戦に静けさを感じるのは何故でしょう。汗が流れ、血も滲みましたのに。さわやかに勝敗は決しました。見事なゲームでした。この戦いの中には美しさがあったと感じます。正に、「アート」でありました。

ともかく、長いW杯戦は無事終わりました。世界の多くの人たちが一ヶ月を様々な思いに巻き込まれたことでしょう。「ドイツのシュレイダー首相が、まるで普通の青年の一人のように気易く小泉首相の日本国専用機に便乗して訪れる」というニコッとさせるエピソードも生まれました。

選手の皆様ご苦労様でした。関係の世界中の皆様、殊に開催国　日本の皆様には心よりご苦労様でございました。

□□□　□□□　□□□　□□□

梅雨が明けます。災暑の季節です。

どうぞ、お元気にお過ごしくださいませ。

みぎわ会
だより
第138号 2002. 8. 1発行

いろいろのお知らせ

台風が相次いだ七月も無事に過ごさせて頂き八月に入りました。例年のように30℃を越える暑い日々がこれから一ヶ月余り続くことと思われます。皆様にはお変わりなくお過ごしでいらっしゃいますか。お伺い申し上げます。

私共もここ暫くは珍しく平穏な日々を過ごさせて頂いてまいりました。新築西棟と旧東棟に二分された状況下での生活も五ヶ月経ちました。現場ではさぞ大変であろうと考えていましたけれど、さしたる混乱もなくきちんと日々のプログラムが変わりなく進められています。これが当たり前とするところに施設としてみぎわ会の成熟度があるのではと私は心深く感じ、職員の皆さんに感謝し、私たちを信頼しきっていて下さる利用者の皆さんに感謝し、そして夜も昼も私共をお守り下さる神様に深く感謝いたします。

○夏祭り

八月二日は恒例の「夏祭り」と決められていました。夕、六時三十分開会一〇分前に来てみますと、朝出勤時には何もなかった芝庭は、中央にどんと据えられた太鼓櫓から放射状に提灯の列が八方にならび、ところどころには竹飾りが彩とりどりの色紙をサワサワと涼やかに鳴らせています。あちこちの樹陰には照明灯も立っています。冷たい飲物やいろいろなごちそうのテントも並びました。正面テントにはもうお客様もいらしています。みぎわ園・いずみ・ハンナの皆様方も早くもきちんと座に着

いていらっしゃるではありませんか。夕方の小夕立の湿りを頂いた芝庭には黄昏の柔らかい明るさが漂っています。

ボランティアの皆様もいつものように河崎デンキさん・マイクロンジャパンの皆様をはじめ、六月、トライやるウィークで来た南中の二人も加わり、皆さんが園生さん達の移動に汗を流してくださったことがわかりました。おくれてしまったと混乱し、いつもより一層モタモタの私の挨拶で早くも夏祭りは始まりました。プログラムは生き物のようです。みぎわ園80％、いずみ・ハンナはほぼ全員の参加です。

第一番は重春小　六年生の「よさこい踊り」です。パンチのある音楽のリズムに合わせ、飛んだり跳ねたりの力強いダンスです。少年少女たちの体は妖精のように軽やかにしなやかです。鼻すじの白いおしろい、目尻の赤いくまとりも迫力を添えています。汗まみれの先生方に感謝、そして拍手・拍手・拍手が続きました。

つづいて職員たち皆での盆踊りです。今夜は全員浴衣です。普段とはまったく違った彩とりどりの寮父・母さんたちの浴衣姿での、たおやかな踊りの輪が、打ち鳴らされる太鼓のひびきと共に次から次へと変わってゆく曲に合わせて流れてゆきます。日も沈み、提灯のほのかな明かりの中で、花のように波のようにきれいです。園生さんの車椅子での参加もありました。楽しさが盛り上がってきます。

一休みすれば飲み物・食べ物が配られ、そして又踊りが繰り返されました。やがて終わりも近くなり、一人一人に線香花火が一本ずつ渡されました。灯を消した闇の中でみんなの手に光の花がきらめきま

した。そのあと、「明日があるさ」の大合唱で予定どおり八時にこの一大イベントは無事終わりました。準備万端、又進行係の細やかな心配りごくろう様でした。

○工事のこと

第二期工事は予定より約十日早く完成しました。一日午後、法人側の検査を行ないました。廊下が伸び、きれいに出来上がっていました。特にいろいろ注文をつけた各トイレも希望どおりに出来ていました。どの部屋も明るく広々と感じられました。

第三期工事は南面の市道から南庭園が通路になりますので皆で庭に降りました。間もなく取り壊される建物が視野に入ってきました。飾りフェンスの窓が並んでいます。いつもきれいだなと感じていた窓です。楠の大木の樹かげで一寸腰を降ろして眺めていますと、何故か泪が頬を伝ってきました。悲しいのでもうれしいのでもない、何か切ない想いです。20年・30年私たちと一緒に生きてきた建物です。新しく建て変わるのですから古いものは消えるしかないのです。いとおしい想いです。ありがとう、さようならを心の中でくり返しました。黙って消えてゆく建物です。

八月八日・九日両日が移動日と決まっています。これから七・八ヶ月完成までは各部屋は少し窮屈かもと思いますがどうぞ御協力ください。ご家族の皆様もよろしく御理解お願い致します。

これからの工事が無事進められますよう、どうぞ皆様のお祈りを合わせて下さいませ。

では、九月までどうぞ御健勝で。

みぎわ会
だより
第139号 2002. 9. 1発行

ゆき合いの空

残暑お見舞い申し上げます。

今日は九月一日、二百十日にあたるそうです。朝からラジオからもテレビからも「東海大地震」を想定し、本格的・大規模な「避難訓練」の情報が繰り返し流されています。「あの訓練が役に立った」というような日はいつまでも来ませんようにと心深く祈りながら、沢山の人たちの忙しく慌しい動きを眺めました。

八月は猛暑つづきでしたが、皆様はお変わりなくお過ごしになりましたことと存じます。いつもご健康をとお祈りいたしています。

先頃気象情報の放映の中で教えられました「ゆき合いの空」というコトバとその現象が忘れられずにいます。それは晩夏から初秋への大空に夏の入道雲ー積乱雲と、秋の巻雲（絹雲）や鰯雲が混り合って現れる有様なのです。その日の画面には、広い青空に白い大きな入道雲とやさしく淡い巻雲が、夢のように美しく散らばって流れていました。真夏と秋の混在に不思議な大自然の営みを見せられました。

九州の北西岸をかすめて大きな台風15号は西へ去ってゆきました。その日遠いこの辺りも風が強く、庭の欅の大木がザワザワと音を立て振り乱す髪のように大枝が波打ちました。その様には心の昂ぶりを覚えました。窓からはほどよい風が入り、大自然の力とやさしさが目にも肌にも心にもしみる景色でした。

つづいて一昨日は小泉首相の北朝鮮訪問のニュースです。全国民は多分、かのワールドカップ時に似た一様の緊張感に捕らえられたと思います。あのしたたかな相手に何とか堂々と渡り合い、期待の成果を上げ、無事帰ってきてほしいと一つ心で念じ、期しつつも不安を拭い去ることができないのが本音です。人の世の「ゆき合いの空」のうす闇と重いやる瀬なさを思います。

さて、九月は敬老の月です。早くから敬老行事の準備を整えています。現代は厳しい少子高齢時代です。社会の皆様から本当に敬祝される「老い」を生きて頂かねばと私達は一生懸命です。

一日午後、教会から帰ってきました私の机上にも敬老祝金の封が届いていました。いつもの市長様のと重ね、今年は県知事様の祝金もありました。どちらにも暖かくお心こめた長寿へのねぎらいと祝いのお言葉が添えられていて感動しました。県知事様のお祝いは大正三年九月以前生まれの方へは一万円、九月以降生まれには二千円である旨も説明されていました。十月生まれの私は二千円組です。私達も毎年、白寿・卒寿・米寿の方々のためには別席を整え、ご家族の参加も頂いてお祝いしてまいりました。今年もさわやかなお席になるようにと準備を進めています。

恥ずかしながら私も米寿の秋となりました。吾が事と思えませんが事実です。これが若し食料品だったら「賞味期限」切れなのにな・・と考えました。一寸計算してみました。平均寿命から言えば５％弱の超過です。まあまあだから許して頂きましょうと一人決めし、これからの一日一日を大切にふみしめて生きさせて頂き、変質せずに無事天寿を全うさせて頂きたいと念じています。

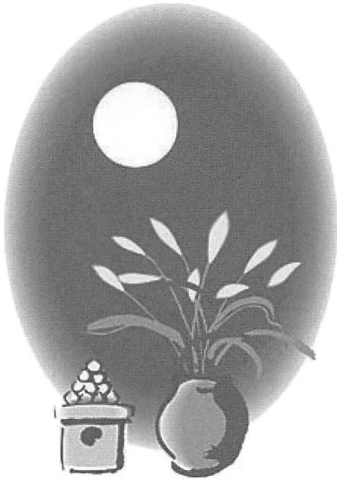
次いで工事です。幸い順調に進められています。あと七ヶ月で竣工となりました。広い食堂のテーブ

ルは円か角か又その色は?・・・・。廊下にはあちこちに座り心地のよいソファを置いて、皆さんのベッド離れが自然に進むように・・・。どの窓からも見える広くなった庭の装いは樹木? 花木? etc・・・ここも「ゆき合いの空」に似た迷いと夢が交錯しています。

毎朝朝礼時に一・二階棟、三階棟、D棟の三センターからケア実況の報告を聞きます。離れていたり混み合ったりの現場が何事もないように守られている毎日です。唯々、職員に感謝、利用者に感謝、夜も昼も守り給う神様に感謝の毎日です。

少し混乱したお便りになりましたことをお詫びいたします。

皆様よい秋をお迎えくださいませ。



みぎわ会
だより
第140号 2002.10. 1発行

運動会など

十月になりました。皆様いかがお過ごしですか。お元気のことと存じます。九月末から十日余り打ちつづくスケジュールを、ともあれ南へ東へとこなしていますうちに、とうとう十月も八日となってしまいました。秋めいて　と申しますより既に中秋の今日です。そこここに静かな秋の装いが見えはじめました。

一昨日、十月六日は恒例の運動会でした。誰もが心配していましたのが天候でした。幸いにも当日は丁度程よい曇り空から時々は薄日も射すという恵まれたお天気になりました。例年の行事ではありますが、今年の運動会は参加された三施設の皆さんも、いつもの「ボラ」の皆様も、沢山いらして下さいましたご家族の皆様も、本当にやわらかくとけ合って伸びやかな雰囲気の中で、楽しくさわやかな運動会が展開されてまいりました。開会前の「シャボン玉流し」が効いたのでしょうか、この和さかさはやはりみぎわ会の持つ一つの宝物だと感じました。誰もニコニコ顔です。車椅子の皆さんがどんどん競技に参加され、真剣にゲームに挑戦される姿には誰も一層元気づけられました。拍手が止みませんでした。

ボラ、職員の風船ゲームは力と気力の盛り上がりで、実に見せられた楽しい光景でした。折りよく平野町のお祭りで子供神輿がいつものように回って来て下さり、グランドのまん中を神輿を高くかき上げてぐるぐると錬って下さいました。神輿の中からは「エイヤサー」と可愛い子供さんの掛け声と

共に、ドンドン打ち鳴らされる太鼓の響き、本当に素晴らしいプレゼントを頂き、誰の心も遠い故郷の幼い日にかえり、思わず泪ぐむ方たちもありました。こうして運動会は本当に本当に楽しく終わりました。いつもながら大きなお力を下さる「マイクロンジャパン」の皆様、又新しく参加して下さった「エトワール」の皆様らの一日ボランタリー、本当にありがとうございました。

午後は予定通りこれも恒例となっている家族会を持ちました。工事中にて会場は「ハンナ館食堂」を利用いたしました。二時間にも足りない短い時間でしたけれど、十八名の皆様がお一人々々心を開いていろいろお話くださいました。ご家族と私達の間にはいつもしっかりとした信頼のパイプが開いていなければと願っています。私も「大切なこと」について虚心で語らせて頂きました。皆様もよくお聞き下さいました。後味の良い一と時を終えることができました。

次いで今日はいずみ寮の状況を報告いたします。

一つは事務員が突然ではありましたが、請われて近在の新しい特養へ施設長として赴任のため退職いたしました。よき活動をと激励と祝福をもって送り出しました。十一月には後任を迎える予定です。

なお、寮生の皆様では、この夏以降次々とハプニングあり、一時は五人・10％の方が入院という事態になりました。内お二人は幸い退院され、あと三人の方々はいずれも骨折と骨の問題です。手術も無事済み、いずれお元気に帰寮されることとお待ちしています。

こうしたことから、食堂の床は滑り難いソフトカーペットへ色鮮やかに貼り代え、転倒防止の備えを致しました。しかし、年々皆様の高齢化が進みます。現状から見ますと、開設当初のみぎわ園に近

付いています。自主自立支持のケアは少しずつ濃厚になっています。職員の能力が量・質共に大きく求められるようになってまいりました。

終わりに研修についてご報告いたします。

九月中旬より芹生・谷口・橋本の三名が約二週間「ヨーロッパ研修」に参加しました。帰って来た三人は眼の光が変わったナと思えるようでした。沢山の学び・新しい体験はこれからの働きに少しずつ滲み出てまいる事でしょう。私は九月二十七・八と長崎ハウステンボスで開かれた「キリスト教社会事業・高齢者福祉研修会」へ満子と共に出席いたしました。一〇五名の多くは西日本から集まった信仰を共にする同業の方たちです。その一人として力づけられてまいりました。圧巻は一九一一年生まれの九十一歳の「日野原重明」先生が東京より来会下さり、先生ならではの深く豊かな御講義を九〇分立ったままでつづけられ、即日又東京へ空路お帰りになった事でした。立派な「老い」の御姿と変わらない御精進と学究の現実にお目にかかれましたのは、すごい御恵みでございました。

引き続き、十月四・五日の両日は「福祉問題研究会　神戸大会」に的場いずみ寮々長と臼井みぎわ園看護部長と私の三人で出席いたしました。テーマは「明日の福祉と医療のあり方を考える」でありました。激しい長寿化の流れに追いつけない福祉と医療の協同提携が強く問われようとしていました。こういう積み重ねの中から成熟した長寿社会が形成されてゆくのであろうかと希みを失わずに、ささやかな努力をつづけてゆかねばと考えされられた事でした。この集いでは、二十年以上も昔全国老施協でいつもお親しく御一緒に委員として励まして頂いた北海道の高橋先生や関東の山中先生、又いつ

も親しくしている近府県の沢山の友人にお逢い出来ました。うれしい二日間でした。

少し余計な私事ですが、長崎では二十八日午後、長崎在住の知人にお世話になり、女子医専同窓で今は亡き友の母校「活水学院」を訪れたことです。彼女との数十年に及ぶ交わりや、このきつい坂道を毎日登下校したであろう彼女の女学生時代の姿を偲び、「古川さん、あなたの母校へ来ましたよ」と語りかけ乍ら美しい芝庭に佇みました。半世紀の歴史の中を漂流する一時となりました。このあと、長崎のあちこちを案内して頂き、美味しい卓袱料理も頂きました。

こういうことで、いつも月初めに書くこの「小さな便り」のペンが持てませんままおくれてしまいましたが、私は幸せに長生きさせて頂いています。

皆様に、どちらの皆様にも唯感謝しています。

どうぞ、良い秋をお健やかにお楽しみ下さいませ。

みぎわ会
だより
第141号 2002.11. 1発行

ショックつづきの十月

十一月一日です。大変寒いと感じます。小さな雨が降っているからでしょうか。夕方には晴れるという予報ですけれど。

庭の木々の紅葉が日々に深まるのを朝毎に眺め、それぞれの色に楽しませられ、心の安らぎを与えられます。自然のありがたいお恵みです。

皆様、いかがお過ごしですか。ホーム内では一寸熱を出したり、咳が出るという方がパラパラ現れてまいりました。皆様はもう、インフルエンザワクチン注射はお受けになりましたでしょうか。美しい秋をお元気で楽しくお過ごし下さいますよう祈りつつペンを執りました。

去る十月はお天気にも恵まれ、深まりゆく秋を心静かに味わう日々と思っていましたが、先ずは「小柴昌俊」先生のノーベル賞受賞という、うれしいニュース、しかも数日ならずして「田中耕一氏」が重ねてノーベル賞受賞決定というビッグニュースです。これは不景気で落ち込んでいる日本人の心に大きな光を与える喜びのショックとなりました。誰もがそれなりに自信に似た力と希望を持たねばと思わせられたのではないでしょうか。殊に、弱冠無名の田中氏の受賞は、業界・学会にも連鎖反応的に様々な波が起きているようです。慌しくきびしいこの時代に黙々と研究に打ち込まれている学究の皆様のことを、多くの国民がふと考えさせられたことでもありましょう。

次いで、北朝鮮に拉致されていた方々が二十四年ぶりに帰国されたニュースです。不条理、非情なかの国で生き抜き、漸く祖国へ生還された方々のお気持ちは、現在の我々日本人にはとうてい想像も理解も及ばないものと思います。五人の皆様は、熱狂的な歓迎と共につきまとう「マスコミ」には重いショックを受けて居られるであろうとお察しいたします。暖かい肉親や故郷の風物が、長い長い忍苦に耐えた皆様をゆっくり時間を掛けて回復させて下さるよう見守ってゆきたいと思います。反面、大切なお子様やご家族の所在不明という不安な現実に居られます方々には、本当にどうお慰めしていいのかわかりません。わが日本が祖国としてしっかり立ち進むなかでこそ、この深い痛みが慰められ、癒されるだと期待し祈る外はありません。

昨年の「テロ事件」以来、地球人類は皆、緊張しつづけ、一種の不安症候症に犯されています。その中へ又々「モスクワ」では劇場という場で恐ろしい「テロ」事件が発生し、世界中に大きなショックを与えました。大国ロシアに世界の視線が集中している中で事件は一応処理されました。あの数十時間、この国の責任者たちの負われた苦悩と決断の重さは想像すら許されません。恐怖に似た思いが残りました。

こんな十月もわがみぎわ会は正に平和そのもので、例月二十五日の「職員セミナー」が「特別セミナー」に変更され、私の米寿祝賀会として企画されていることを知りました。その内容は厳しく㊙が守られていまして、当の私は少しずつ不安がつのり、殆ど恐怖に近い気分で当日を迎えました。が、いざ開かれて見ますと、何と龍宮城に招かれた浦島太郎の体験となりました。

お心こもるお祝いのことばに感動。テーブル一杯に並んだ見事な山盛りの御馳走の数々に一驚、みぎわ会調理部の底力を改めて知らされました。つづいて各部から、他所では絶対見られない趣向をこらしたパフォーマンスの連発です。聖歌隊の美しいハーモニーも素敵でした。

唯々呆気にとられ泪もでないありがたいうれしいショックの一時を頂きました。

「先生、みぎわ園をはじめる時、今日の日を想像されましたか」総司会の椎木君が小さく私にささやきました。

「いーえ、私は飢え死にすると思っていたのよ。行き倒れてしまうかもとネ。それでもいいよって。」これは本当の正直な私の答えです。

皆様ほんとにありがとうございました。草創期の何もわからない時代から今日まで、私を助け吾を忘れて働いて下さったなつかしい皆様、ありがとうございました。米寿の私は杖を曳き乍らまだ毎日出勤しています。足が痛い時など、そういう自分が恥かしく滑稽に思えるのですけれど・・・

いつ迄続けるのでしょうかネ。やっぱりみぎわ園のケアを頂かないと生きてゆけない私なのだと思います。

では、皆様に神様の御恵が豊かにありますよう祈りつつ。

みぎわ会
だより
第142号 2002.12. 1発行

師走の夢

「早くも師走がやって来た」十二月一日の「産経抄」の書き出しですが、まさに早くも十二月に入りました。

初秋・中秋抜きで短い残暑から急カーブで晩秋へ走り込んだ今年の、それだけに短い秋を濃縮したかのように紅葉の鮮やかさは格別でした。

昨年の今日は、皇太子様に可愛い赤ちゃんがお生まれになり、この新しい「生命」の誕生が全国民に大きな喜びと希望を与えました。今日はその「愛子サマ」が早くも手押し車をおして歩きはじめていらっしゃる、お健やかにも愛らしいお姿が全国に報道されました。拝見しつつ「一年」という時の持つ力の重さを知らされます。

皆様にはお変わりなくお過ごしと存じます。歩んでまいりました一日一日がすべて大事で、いとおしく思えるのも「師走」という時がもたらせてくれる、ひそかなプレゼントではないでしょうか。

ここみぎわ会も静かなおだやかな師走を迎えています。工事も順調です。あと25％というところですが、現在は空色のシートにすっぽる包まれていまして、その進行の過程をみることは出来ません。無事竣工の日を祈りつつ、心楽しく待つ日々です。

建物が出来上がりますと、東側には相当広い空地が出来ます。ルデヤと東棟間にも中庭が現れ、玄関を入った正面にも多角的な空地が生まれています。こういう空地をどうするかがこれからの課題と

なりました。みぎわ園の立地条件や建物の性格を考えますと、やっぱり皆さんが年中いつでも自然の移り変わりを感じたり、ゆっくり大気浴をしたり、安全に散歩を楽しめる「森」の庭を考えてしまいます。

地球の健康を取り戻そうと、最近はあちこちで「植樹」が話題になっています。私も外出時は車窓から眺める街路樹のいろいろや、あちこちの緑地に見る樹々が気になります。九月に訪れた「ハウステンボス」では、葉の美しい樹や珍しい姿の木々に逢いました。いずれもアメリカ産とか、名も知らぬ遠い外国のものと教えられました。私の身辺にある森や樹々もステキです。殊に闊葉樹は、春の芽立ち、夏の緑陰、秋の紅葉から風に舞う落葉まで、夫々季節を彩り自然を物語る木々の営みです。私たちはそのリズムと共に活かされている自然動物だとも思います。

丁度此頃の私は、毎朝雨戸を開けながら裏庭の欅を眺めるのが一つのよろこびです。太い幹、段々と程よく出て重なる枝々が欅特有の樹形を作っています。その梢の尖端は、細く繊細な網のように連なり合い、冬の澄んだ空を区切って裸木独自の美しさを見せています。

三十年前、小指程の幹、20㎝位の高さの苗の鉢植えを大阪駅の地下街で買い、両腕にかかえて帰ったものです。すぐ広い裏庭に移し植えたまま水一つやらない私でしたのに、この見事な生育に大自然の力を見せて頂きます。

か細く生まれたみぎわ園も今日の姿に育ちました。これは皆「神のみわざ」としか思えません。大自然を創りすべてを秩序正しく治められる神様をほめたたえるばかりです。みぎわ園を囲んで多くの

人々の心を慰める美しい森は、まだ私の心の中に漂う夢ですけれど大事なうれしい夢です。きっと必ず実現いたしますよう祈っています。師走に与えられた夢を大切にはぐくんでまいります。

では、皆様もよいお年をお迎え下さいませ。

付記、長い間書きつづけてまいりましたこの便りの巻頭のご挨拶を、私の傘寿から米寿まで七年間分を234Pの「小さな便り」第二集として今春一冊にまとめました。目的は他にあったのですが、もしご希望下されればお送り致します。厚かましいのですが、送料三一〇円分の切手を同封して御申込み下さい。一〇〇部程用意いたしました。

みぎわ会だより

第143号 2003. 1. 1発行　＜新年号＞

つつしんで
新春を祝し
申しあげます

平成十五年　元旦

社会福祉法人みぎわ会
理事長　松尾周子
職員一同

みぎわ会
だより
第144号 2003. 2. 1発行

みぎわ便り

大変きびしい寒さが続いています。路面が凍てツルツルになるとか、庭に霜柱が立ち、土を少し押し上げて白く光るなど、なつかしいとも感じる本物の冬景色に逢える毎日です。一月が終わりました。

新しい二月に入りました。皆様はいかがお過ごしですか。インフルエンザ・ウィルスもこの低気温では余り活動出来ないように思えますが、どうぞ御健勝にお過ごし下さいますようお祈り申し上げます。

今日、出勤途上から工事現場へ眼を移しますと、少し外された青いシートの間から東棟三階の赤い屋根がチラッと見えました。いよいよ竣工が近づきました。四人室に五人・六人と詰めて生活していて下さる皆様ももう暫くのご辛抱です。お元気でお待ち下さいネ。

報告その一、昨秋以来少なかった「旅立ち」が一月に入り少し続きました。お一人々々が固有の夫々の長い人生を走り終えて静かに眠りに就かれる時、その前後は大変重くむつかしい時です。しかも、常に私たちには新しい体験と新しい学びを与えられる時でもあります。昨日はみぎわ園最古参の「O氏」が病院で永眠されました。昭和五十三年の入所ですから二十五年間の在園になります。入所時よりのおなじみは私のみとなっていました。Oさんは成人後罹られた「ポリオ・・・背髄性小児マヒ」で両下肢が麻痺したため、五十歳代での入所となりました。賢い方でした。教会生活も始まり回心し洗礼を受け

られたのは二・三年後だったでしょうか。二十五年間のOさんの生活はみぎわ園の歴史の中に編み込まれています。自治会会長としての二十年は立派でした。みぎわ園というコミュニティをしっかり守ってくださいました。毎月第一火曜日は自治会と決まっており、五十名前後の方々が集まられ、私たちも各部署から参加しました。Oさん主導の礼拝から始まり、会計報告が終わるとマイクは私たちに回されます。私のその時々のいろいろな報告や物語から、各部代表が順次必要な情報を話しました。給食部からも、行事食や調理する側の心配りが語られました。大事な時です。新人の紹介や研修生の挨拶もありました。

無論新入所の方の紹介、出来ればご本人の挨拶となります。自治会活動としては、入退所の方々へ歓迎の花束・お別れの贈り物、又、職員の動静にもいつもきちんと驚くばかりの心配りがありました。結婚・出産・慶弔すべてに丁寧に自治会のお心を寄せてくださいました。母の日には寮母・ナース・私にも美しい花束を贈って下さり、父の日には寮父たちにと欠かされたことがありません。立春には「いり豆」お節句には「ひなあられ」夏まつりは「わらび餅」と自治会から全員へプレゼントがありました。お一人500円の自治会費は立派に活用されてきました。

特筆するものに「足ながおじさん」への協力があります。何かできる事はないかとの問いに、ついその頃見た新聞記事から「交通遺児への奨学援助」の事を話して以来十数年、毎年小さな特養で生活される高齢者の皆さんから一人の交通遺児となった高校生のために二十万円が送られ続けてきました。こうしたもろもろのことを、Oさんは独りで黙々と行ない管理し報告して下さいました。お別れ会は哀しく淋しい出来事ですが、Oさんの老人ホームでの二十五年の重くゆたかな「Q・O・L」です私たちは拍手と感謝でその旅立ちを見送りました。

報告その二、数日前、私は以前から望んでいました、新大阪駅の書房に行きました。好みの推理小説を数冊買いました。この度は久々に海外著者のものを選んでみました。その一冊、コリン・ホルト・ソーヤ著「老人たちの生活と推理」を読み始めました。ストーリーはアメリカ西海岸の都市に建設された高級老人ホーム内での事件と、その解明に頭を突っ込んだ四人の老女の推理活動を中心に進められています。が、まず主役である老貴婦人たちの描写に私はショックを受けました。「ナンデこんなに迄イジワルク見るの?」と言いたくなる程、リアルで辛辣なペンはさらさらと、時にはユーモラスに彼女たちのイジワルさと自己中心の欲深さを描き出してゆくのです。それは正に私の姿でもありました。

彼女たちの「生活」は、自分だけが認めている過去の栄光への誇りと特殊な優越感に支えられているのが、哀しい程明かされてゆきました。老いと共にいつの間にか身について来る、哀しくも醜い「自己中心のワガママとイジワル」をこんなに告発されるのは私には初めての体験であり、おかしさ・恥かしさ・いとおしさなどなどに心をかきまわされ乍ら、つい眠るのも忘れて360Pを三日二夜で読み終わりました。事件の内容は意外な恐ろしさと悲しさでしたが、関係した人たちはほんのりと暖かく包まれ、思いやりと老女たちの心深く湛えられていた「愛」が溢れて流れ出る情景で終わりました。途中胃の具合が悪くなった私でしたが、ほっと息をつき少し笑いたい気持ちで本を閉じました。次は「イジワルバアサンにならない生き方」という本を探したいと願いはじめています。

長い便りになりました。御一緒に楽しめるといいのにナという気持ちです。

では、暖かい春を楽しく待ちましょう。くれぐれもお元気でお過ごしくださいませ。

みぎわ会
だより
第145号 2003. 3. 2発行

年度の終わりに

「もうあと〇〇分でスタートです」と朝から「びわ湖マラソン」についての放送がつづいている今日三月二日です。

もう三月になりましたのですね。時は止まってくれません。何かとゆきなやむ事も多い十四年度でしたが、終りに近付きました。皆様にもお変わりなくお過ごしでいらっしゃいますか。お伺い申し上げます。いつもお心にかけて頂きありがとうございます。

冷たい昨日の雨も去り「春やよい」の名に似合う、柔らかく暖かい今日の青い空です。大きくなりました庭の下枝梅が満開し、白く丸い傘形にしだれた花々のあたりから、ふくよかな香りが漂ってまいります。

三年度に亘った工事もいよいよ大詰めとなりました。今月末には全員が新しいみぎわ園に落着くはずです。二十一ヶ月の工事期間中現場でも、混雑していました施設内にも、事故一つなく無事に過ぎました。大きな感謝です。皆様に唯々心よりありがとうございますと申し上げています。

この間、みぎわ会の組織にはいろいろ人事の流れもありましたが、そうした中でも音もなく事業は変わらず進めて来ることが出来ました。

過日、理事会でお願いしていましたとおり、新理事お二方が一日視察にご来園下さいました。その折のご感想を要約いたします。

一　職員の姿が皆生き生きしていて、礼儀正しく、明るい挨拶が殊に快く、笑顔を美しいと感じた。
一　利用者の皆さんは、表情も明るくおだやかで、安らかに生活しておられる雰囲気が感じられた。
一　清潔感あり、臭気もなく安心した。
一　食事は大変おいしく満足させられた。

こういう現実の背後にある研鑽の長い歴史が十分に感じられた。

以上のようなお言葉でした。うれしく励まして頂きました。

次いで多少厚かましいかとも思いますが、おほめの言葉にちなみ、内部報告としてお伝えいたします。これは評価いただきました歴史の一コマとも言える「みぎわ会全員セミナー」の実状でございます。二・三月の両月は「より良いサービスのための私の提案」というテーマの下に、全員の一分間スピーチのスタイルで行いました。第238～239回目であります。テーマはいつも繰り返し問い直し問い直し続けているものですが、一人一人が個々の想いを練りに練ったコトバで誠実と熱意の中に発表し、みぎわ会サービスを画き出してくれました。少し描出してみますと、

一　笑顔・礼儀ある対応で利用者の安心・信頼を得る。それ以前に職員の人格統治が第一
　　この意見は沢山ありました
一　家族の方たちとの連携がほしい、温めてゆきたい、面会時のためにメモの用意をしては
　　これも沢山ありました
一　情報の流れ、共有を重視したい、リスクマネージメント、苦情処理等が円滑に進められるために：

一　みぎわ園職員であるという誇りを大切にしたい・・・　　沢山ありました

一　時間に追われ、仕事のスケジュールに追われるケアから、個人的に親しく交わりを持てるサービスの時を持ちたい・・・　　沢山の者から新しく出てきた意見です

一　職員の研修を常に重視したい、倫理綱領をよく読み返したい

一　人事考課を行うようになる、同時に施設としての自己評価をしっかりやってゆきたい　　等々

二十数年くり返し毎月続けてきた「セミナー」ですが、やはりその都度、マンネリ化しない全員の姿を見せられ、こうした中で意識と実践のリフレッシュと小さな向上がつみ重なって来ているのではといつも感じています。

新年度を前に、さまざまな想いが夢と現実の中にゆらぐ日々です。

どうぞ、よきご指導をお願い申し上げます。

皆様の御健勝をお祈り申し上げます。

みぎわ会
だより
第146号 2003. 4. 1発行

よみがえりの春

四月一日です。花冷えか花曇りというべきか、少し重く少し寒い今朝の空ですが、私たちは新しい希望と喜びの中に新年度を迎えました。

「今日はみぎわ会にとり新世紀のはじまりです。平成十五年度はきっとみぎわ会の新しい時代のスタートとなるでしょう」と私は朝礼の席で申しました。

工事は三月二十日に予定通り完了しました。「引渡し式」は藤井監事様御同席の下で、安藤建設より沢山の鍵と共に重要な書類等を受け取り、三年間の工程を共にふり返りつつ感謝の中に無事行われました。

早速二十一、二両日にて全員の移動が終わりました。新しい明るく広々とした部屋に移られた皆さんは、心配しました混乱もなく落ち着いてくださっています。以来約十日、まるで何事もなかったかのように1・2・3各フロアに区分したケアチームでの毎日がいつものように進められています。

朝礼の報告を聞き乍ら、毎朝私は言いようもない感謝と感動を受けています。黙って柔らかい絹布を重ねるように大事に心にたたみ込む日々です。

今年は久々に私の庭にもよみがえりの春が訪れています。この数年来、大事に思っている朱木蓮が次々に枯れてゆき、水仙の花も消えていました。堅くて無機質な粘土質の地力が弱り衰えているのだと感じました。昨秋来、沢山のマサ土や肥料を入れ、生い茂る雑草も丹念に除いてもらいました。二

月頃から可愛い水仙が芽を出し、可愛い白い花が次々に咲きはじめ、うれしさとなつかしさについ佇んでしまう出退の道でした。花桃も枝いっぱい花をつけ、私の古い小さなヒナ祭りを賑わせてくれました。今はパンジイ・チューリップ・ヒヤシンス・八重咲きやラッパ咲きの水仙が昔のように群り咲き、黄色の幸せを盛り上げています。本当に甦りの春です。

みぎわ園では本日より矢野泰弘先生を新園長としてお迎えしました。三ヶ月施設長の重任を負うてくれた芹生は元の副施設長にもどり、新園長はじめ新しいスタッフ達と共に、みぎわ会の新世紀創造に励んで下さる事でしょう。うれしい春です。新人を御紹介いたします。皆様の御指導とご期待を重ねてお願いいたします。

「まことに日に新たなり、日々新たなり、また日に新たなり」。これは三千六百年ほどまえ中国の殷王朝を興した湯と言う王が、大好きな言葉だったようです。王はこの言葉を刻んだ青銅製の洗面器で、毎朝、勢いよく顔をひと洗いして、おれは昨日のおれではないぞ、さらにひと洗いして、今日はまた生まれ変わったぞ、と気分を新たにしたとのことです。この話は孔子の遺言の書とも言われている『大学』と言う本にでています。『大学』はわが江戸時代においては、誰もが読むべき教養の書だったようです。

人の生命も組織の生命もともに、時々刻々、新陳代謝をくり返しています。それなのに、その人なり組織なりの特質を失うことはないのです。まことに不思議なことです。でも、ひとたび新陳代謝が

とまれば、その人なり組織なりの生命は死滅するほかないのです。新陳代謝がとまるとは、別の言葉で言えば、電池切れまたはマンネリにおちいることではないでしょうか。

私も『みぎわ園』の一員として、日々新たなりの思いで、今日と言う日を迎えたいものだと念じています。さわやかでみずみずしい新陳代謝のために。

園長　矢野泰弘

四月より再び副園長としてお世話になります芹生哲也と申します。一月より三ヶ月間園長として貴重な経験をさせていただきました。色々とご迷惑、ご心配をお掛けした事もありましたが、改築工事が無事に済んだこと、十四年度が順調に経過し新たな年度を迎えられたことがなによりでした。これは、ご利用者の皆様、ご家族の皆様のご理解とご協力があり、その信頼関係と職員一人一人の努力とチームワークの賜物であったと思います。本当に感謝の一言です。

十五年度は新しくなったみぎわ園で、これまで培ってきたみぎわ園のケアを根付かせ咲かせる努力をして行きたいと思います。そして、今後も皆様に必要とされ、地域に愛される施設を目指して、松尾理事長、矢野新園長をはじめ全職員と共に全力を尽くしていきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

副園長　芹生哲也

みぎわ会
だより
第147号 2003. 5. 1発行

古きものと新しい酒

「五月晴れ」という言葉そのもののさわやかに晴れ渡って五月一日の朝は明けました。憲法記念日の今日三日までその美しい晴天は続いています。皆様いかがお過ごしですか。快晴の連休をお楽しみくださいますよう祈りつつ五月のたよりをいたします。

去る四月は一ヶ月中、あの空模様に似て、明暗混在のニュースに明け暮れました。何が本当なのか、その人は何を求めているのか、それは何故なのか等々、判断も理解も出来ない不安・迷妄が地球レベル・国際レベル、又身近な日本社会全体に明滅いたしました。その暗い波間に浮遊して生きる小魚さながらの自分を眺め考え、思いつめてゆく「うつ」が毎日午後三時ごろから私を訪れる一ヶ月余でもありました。

けれど、みぎわ村を囲む山々や庭の樹々がいつもと同じように、いえ、一層鮮やかで透明な新緑に湧き溢れるのを見ていますと「在りて在る変わらざるもの」とその恵みによってのみ生かされているのだという実感が、雨雲のように私に覆い来る「うつ」を静かにおし流し、又離れゆくのを待つ力をも与える根源なのだと知らされてまいりました。

さて、改築成りましたみぎわ園は、私の様々な杞憂を他所に、すべては音も波も立てず移住し終えました。広い食堂も各階満席になるといううれしい声を聞きました。重症者以外の皆さんは最低一日

一回の離床をと言いつづけてきましたが、近頃、朝食時頃の部屋々々は殆どのベッドが空床になっているのです。現場第一主義を立て乍ら現場の実状に疎い私は「一体どうなっているのかしら、こんなに早くから入浴の用意かも」と呆けた事を考えたりしていました。数日前、給食会議の席上で、食堂にゆくのがうれしくて皆さんが早くから離床を求められるのだと知りました。そして二階の食堂では席が足りないというのです。本当にうれしくてびっくりさせられました。二階の数名・・A・D・Lのいい方たちに三階食堂の少しある余裕部分を利用して頂くことになったこと、二階より一際眺望の勝れる三階食堂への移動は喜んで受入れられているという、うれしい報告を直ぐ又聞きました。改築問題で固く凝っていた私の肩を少し軽くする報せです。

少しだだっ広いのでは、と考えていました「マリヤ館」も訪ねてみますと、皆さん何となく表情が柔らぎ、いいお顔になっている感じです。私もいい顔にして頂けるようなうれしさです。先月一寸御報告しました、各階単位に区分したケア組織も滑らかに進んでいます。本当にうれしい事ばかりです。こうしたもろもろの感謝をこめ、来る十七日「竣工感謝式」を行う事となりました。県・市等公的関係をはじめ、OB・又私の親しい同業の友人たち、近隣の施設関係など七十名近い方々に御出席頂くことも決まりました。先ず、当日の好天を祈りつつ準備を進めています。

二十二ヶ月余、三年度に亘る長い工期でした。長い災天のつづく夏が二回、手先も凍てそうなきびしい冬も二回通過しなければなりませんでした。が、工事現場でも何の事故もなく、青いシートにすっぽり包まれた中では、正に粛々と工事は進められてきたのです。或時期は二〇〇人以上の働き人が入っ

てくださっていると聞きびっくりしたものです。本当にごくろう様でした。皆様に深く感謝いたします。一方、施設内でもいろいろ難しく不便な状況も重なりました。特に昨秋から三月末までは浴場も洗濯室も仮設ユニットでという八ヶ月でしたが、現場からも利用者からも一言の苦情もつぶやきも聞かされませんでした。事故もありませんでした。皆さん、本当にありがとうございました。

消えてしまった古い建物のことはとてもなつかしく、誰もが大切に考えていたことも、折々の様子等は胸中深く想い出の中に包みこまれてしまいました。「新しい皮袋には新しい酒を」という訓えがあります。新しい酒は何でしょうか、と一番古い私の模索が続いています。来る八日には十五年度の新入職員歓迎パーティーが例年のように計画されています。こうしたくり返しの中から少しずつ新しいものが生まれているのだと思います。

個人的に申しますと、そう新しくもなくなった「ＩＴ」時代にすら適応出来ない古い自分をどうしたらいいのかが問題です。正に現代の「周辺人」ではないかと侘びしくも滑稽とも感じています。

先日、サンケイ歌壇で見つけた一首があります。入選歌です。

「捨てるべき　布団カバーを　今一度　　洗濯機嗤う　戦中育ち」

「この種の題材は多いが　洗濯機が嗤う　がわれ乍ら身に沁みついてしまった戦中・戦後の乏しい暮らしへの驚き、洗濯機を生きもののようにしたのがこの一首を生かした」という選者のことばがありました。親近感を頂く想いです。

では、又来月まで、皆様のご多幸をお祈りいたします。

みぎわ会
だより
第148号 2003. 6. 1発行

衣替えと十年後

台風四号の通過と共に五月は過ぎてゆきました。

六月「衣がえ」の季節ですが、一日の朝は気温低く、セーターに重ね着をしている私は、ノースリーブで歩く女性の姿をＴＶの画面で見ています。日本も広いものだと思います。

皆様はいかがお過ごしですか。この便りがお手許に届く頃は、西脇市西北端の住民の私も衣替え出来ているかと思います。

昨三十一日は夕食の窓から髪をふり乱すようにザーッザーッと波打ちゆれる欅の大枝を眺めました。あんな激しい動きに耐えている大樹の根と、その張り伸びる根をしかと抱くゆるぎなき愛とも思える大地の力に、畏敬にも似た感動を覚えました。この天地の守りの中で、樹木の成長は止みなく進んでいるのですネ。

私たちにとり、五月は濃密な日々の連続した一ヶ月でした。

十七日の「竣工式」は沢山の方々から祝福され、神への深い感謝の中に無事終えることが出来ました。御来会頂きました皆様、ありがとうございました。この一日のために精一杯準備した職員はもとより、いろいろの役割を果たして頂きました方々に唯深く感謝しています。ありがとうございました。大きな気がかりはお天気でした。一週間前から「十六・十七日」は「雨」の予報が続いていました。雨に

備える準備も大きな問題でした。ところが二日前から十七日は「晴」マークに変わったのです。この大きなお恵みには唯神様に感謝する外ありません。ありがたいことでした。

もう一つ、五月八日のことです。三名の方が発熱されました。特別な所見はないのですが、ともかく早期に抗生剤で対応しましたところ、幸い三日目には回復して下さりほっとしました矢先、この風邪症状が治ったばかりのNさんが転倒骨折、というハプニングです。自分の痛みに苦しみ乍ら、「ごめんネ、不調法なことしてしもて、ごめいわくかけて、ごめんネ。」とくり返されるNさんには、思わず涙が出てしまいました。無事入院・OPとなったのですが、その夜、同室のお二人が同時に発熱・咳という事態です。折しも来日台湾医師の「SARS」問題が連日報道されています。みぎわ園と「SARS」を結ぶ線は全く考えられませんし、手洗いやうがいのことは日常的に注意している私たちです。しかし、緊張している私にはショックでした。先の方たちには抗生剤が効いたのですから、と思いつつもやはり、と意を決して医師会長様と保健所へ報告しました。X線にも特異な所見はありませんが、高齢者の胸部には夫々旧い痕跡とも見極め難いところがあります。ともあれ抗生剤を用い、ナース・ケア両者には自分たちが媒体にならないよう注意し、この十日間の面会者のリストアップもして考えました。心配の中で十四日には皆さん解熱し回復して下さいましたし、後発者もなく十七日には安心してお客様をお迎え出来たという次第です。

その後も変化なく五月は珍しくフリーパスの一ヶ月となりました。次週には監事監査、一日おいて決算理事会と年中行事も終わりました。三十日、国・県・市より補助金の残額をギリギリ乍ら振り込

んで頂き、即同日、工事関係も先ずは清算を終えることが出来ました。達成感が頭の中を空っぽにし、何も考えられない自分を眺めているところです。

東側に出来た広い庭のことは造園会社と話し合い、秋には専門的な植樹を委託いたしました。十年経てば美しく調和した森が成長し、散歩道を挟んだ内側には季節毎の草花や花木で、皆さんを慰める風景が出来ることと思っています。ところへ丁度、届けられました「広報にしわき」誌上に、しばざくら商店会協同組合主催による「ポストカプセルしばざくら二〇一三」の企画を見つけました。平成二十五年七月十三日に開披される手紙をカプセルして下さるというのです。何てすばらしい構想でしょう!!

「十年後のみぎわ会へ手紙を届ける」虹のような夢です。私は今日の想いを託したいと思っています。

六月です。皆様のさわやかな「衣替え」をと願いをこめて

みぎわ会
だより
第149号 2003. 7. 1発行

改革

七月一日も梅雨特有の小さな雨が音もなく降り、又止むという一日となりました。冷房の調整も難かしい季節です。

いかがお過ごしですか。御健勝を念じつつ変わりばえのないこの小さな便りを送らせて頂きます。

六月は少しは落ちつけるものかと考えていましたが、相変わらず私にはバタバタせわしなく、又、思うこと、考えることの多い中に過ぎてゆきました。

幸いみぎわ会の各施設では、入所の皆様にも職員にも大きな混乱や問題はなく、安定した営みの日々が流れました。改築工事に付随する諸々の雑工事と、長い間気にかかっていましたこまごました補修工事もすべて終わりました。そして北側の中庭は花水木の並木に囲まれた、本物の人工芝の美しい緑のグランドになりました。百坪近いこじんまりしたきれいな「場」です。コ字型で落ち着いています。私たちはこの「場」を地域に開放させて頂くことを夢見て仕上げていただきました。市内の団体・グループの皆様がローンボールでも踊りでも・・・ベースボール、テニスの広さはありません・・・子供さんの小運動会でもこの広さで楽しめる遊びに使って下さる事を希っています。静かとは言え淋しいみぎわ村で老いを養っていてくださる方々に、活きた故郷の顔・声、又なつかしい方々の情報をおみやげにして頂ければ、これ以上の喜びはありません。昨日は市の連合老人会長様に

来て頂き、下見して頂きました。私達の想いも十分ご理解して下さいました。期待してお待ちしています。使用料は不要です。後片付けをして下さり楽しんで下さることだけが条件です。何時でも—夜以外—下見にいらして下さい。御利用ご希望の場合は、電話ででも文書ででもお申し出くださいませ。

◇　◇　◇

小泉内閣の「改革」声明に肩凝りが軽くなる新鮮さと期待を持たせられましてもう二年近く経ちました。私にはメディアに依る情報しか入らないのですが、「改革・刷新」は誰もがどこでも希んでいると思います。けれどこれがこんなにも難かしい事だと漸く知らせられる毎日です。リフレッシュは言わば生きている証拠だとわかっていますけれど、何と激しい抵抗・反論・既定の事実などと戦わねばならないのかを、新しい驚きと共に学ばせて頂いています。この小さな組織のリーダー・責任者としての自分をつくづく眺め考える近頃でもあります。リフレッシュへの知力・体力・気力の乏しさを深く覚えています。

そんな自分への小さな慰労と考え、先日二泊三日の東京旅行をいたしました。出発早々中国道宝塚辺りの事故により、バスは二時間遅れてしまいました。東京着も予定より遅れ、午後のプランは消えホテルへ直行には少し早い等思いながら八重洲口側から久々に見る東京を眺めました。思いもよらず不意に瞼が熱くなり、我ながら驚く感傷が私の中に拡がってきました。「どうしたのかしら」と自問する私に、東京こそ私の青春の故郷だったのだと体の方が先に反応していたことに気付き改めて泌々なつかしみました。

本当に久しぶりの銀座を少し歩くことにしました。正に学生時代の私と肩寄せ合った「銀ブラ」です。ついでに日比谷公園を訪れてみました。花盛りのバラ園へ満子は向かいました。レンガ色も黒染んだ日比谷公会堂を私はベンチにかけて眺めていました。昭和七年、東京で学ぶ身の上になった私です。私の学ぶ女子医専が主催のチャリティ「日比谷の夕べ」を思い起こしました。「陽気な中尉さん」という洋画を見るのも、本格声楽家がシューベルトの「野ばら」を歌ってくださった美しいソプラノも、田舎娘の私には胸おどる新しい体験だったことを夢よりもなつかしく想い出しました。あの時の日比谷公会堂の威風堂々とした赤レンガの大きな建物は、今は背後に林立する高層ビルの谷間で静かに老いの姿で存在していました。あの頃から七十年もの時が流れたのです。革新・改革の流れに洗われつつ生かされてきた時を大事な事と思いました。

これからも一生懸命生きさせて頂きます。神様のみ旨のままに—

◇　◇　◇

暑い夏ももう目前です。毎日お元気でお暮らしくださいませ。

みぎわ会
だより
第150号 2003. 8. 3発行

八月

冷夏と呼ばれた梅雨の七月が過ぎました。去る七月一日にこの便りのペンを取った朝の晴れ渡った美しい空を想い出してしまいました。早くも八月三日の夕暮れです。朝の庭には陽が照り、冷房の部屋から出ますとムッと暑さを感じますが、木々の間を流れる風は、心なしか初秋を思わせるさわやかさがあります。朝風の中に立ち今日は一日晴れた空からギラギラと夏の陽が注がれ、どんどん気温が昇るようにと願いました。そういう天候が続けばおくれている稲の生育がすすみ、海辺には人たちが群れ、大空に白く雲の峰が盛り上がる日本の夏になるのに・・・とう思いがあったのです。

こうした不順の日々、皆様にはお元気でお過ごしでしょうか。ご健勝とご多幸をお祈り致し乍ら、滑りのよくないペンを取っています。

七月中旬には水俣・長崎の水害、月末には東北の大地震とつづき、社会では十代前半の子供の恐ろしい犯罪や、日常的になってきた殺人・強盗のニュース等、天災・人災相次ぐ毎日は日照りの少ない雲り空の中に閉じ込められていた日本列島の症状に似ています。

唯、私たちみぎわ村は、その七月もいつものように和やかにおだやかに、しかも本年初のフリーパスの一ヶ月となりました。ここ三年近くの緊張と慌しさが終わり、疲れに似た脱緊張がまだ少し残っているのかもしれませんが。

新しい部屋々々は、一応その広さも内装も設備もよく出来ていると感じています。それでも現場からはあれこれ小さな注文がつづいて来るのは、誰もが「ベスト」を求めている一つの証しでもあると思います。施設の健康さとでも言うのでしょうか。

いずみ寮はこの程一層いい感じになってきたこと、と喜んでいましたところ、近日、相次ぐ転倒骨折事故に見舞われています。気をつけていても平衡機能も筋力も低下しつづける老年期では、仕方がない一面もあるかと思いながらつい、「よく気を付けて下さいネ」が出てしまいます。トイレのセンサー化、特養並みの支持装置、廊下の手すりの改善化等と、「お金をうまく都合して一つずつ実現しましょうネ。」と励まし合い慰め合っている私たちでもあります。

診療所はこの度、「〇百万円」を投じて、骨量測定機と心電計の買い換えをいたしました。活用して皆様の、殊に骨量測定は職員の健康管理にも活用してまいりたいと考えています。九十三歳のTさんの骨量が平均値をオーバーしていたことはうれしい驚きでもありました。キカイの正確さを信じたいと思います。

◇　◇　◇　　◇　◇　◇　　◇　◇　◇

とうとう夜になりました。滑りの悪いペンを置くことに致します。就寝前、毎夜のように、今晩一夜皆様の御無事を神に祈り、終夜この沢山の老齢者をお世話し守って下さる数名の夜勤者のために、心を熱くして祈ります。何事もなく夜となり、朝となる事は決してタダ事ではないと私はいつも感じています。大きな神の御恵みに守られ、導かれているこの一群の幸せを深く感謝しています。多くの

方々から御加祷頂いていますことも身心に感知させていただく力と喜びです。ありがとうございます。

◇　◇　◇　　◇　◇　◇　　◇　◇　◇

今日、第一聖日礼拝の中で、いずみ寮の「S」さんが洗礼を受けられました。みぎわ教会には大きなよろこびと力です。又、聖日毎に二十数台の車椅子の方々の送迎には本当に感謝しています。自分の年齢を忘れた方たちでも礼拝中はいつも静かにしていらっしゃいます。脳組織は衰えていても、一人々々の霊は神に覚えられているのだと知らされます。会堂一杯の老人たちの礼拝を神は祝福して下さる。これがみぎわ会の平安の源泉だと信じさせて頂くのです。

皆様の御協力ありがとうございます。

暑い日々をどうぞお大事にお過ごし下さいませ。

みぎわ会
だより
第151号 2003. 9. 1発行

九月

八月が過ぎてゆきました。冷夏が続きました。

皆様にはお変わりございませんか。

ヨーロッパの国々では炎暑のために沢山の人たち　殊に高齢者が沢山生命を失われたという事です。地球温暖化なのか、もっと大きな宇宙レベルでの定期的変動なのかはわかりませんが、地球という宇宙では小さな一つの美しいと言われている星に生きる六十億の人々も大自然の営みの中で、人間の哀しさを負いつつ愛し合うことができないで「生きるたたかい」にうたかたの生命を燃焼しているのだナーと何となく空しいこの頃です。

毎日の情報は重く暗く冷夏の空模様に似て、読む程に心が滅入ってしまいますが、ここみぎわ会では八月十一日、新しい緑の内庭で恒例の「夏まつり」が行われました。三施設から殆どの方が集まられました。

今迄と一寸趣の変わったしっとりと和やかなお祭りになりました。皆さんの、殊に若い人たちの浴衣姿がステキでした。太鼓と音楽に合わせやさしい踊りの波が流れました。本当に心休まるなつかしい「私たち」の時を持ちました。車椅子のまま踊りに参加する方もありました。僅かな時間でしたが、ここには安らぎと平和がありました。小さいけれど本物です。打ち上げの花火になり、きれいな輝く

光の花々を無心に楽しみました。皆さんを送り、片付けがはじまるのを待っていたように雨がパラパラ落ちはじめたのも、本当にありがたいことでした。

十日後には和田町の老人会の皆様が「ローンボール」のグループで訪れて下さり、うれしい交流がはじまりました。いずみの皆様の参加もありました。ありがとうございました。

みぎわ園では異常気象とは言え、皆様の間には軽い風邪様症状が散発した程度で、静かで平穏な夏となりました。唯、いずみでもみぎわでも転倒骨折が相次いだお盆の二、三日がありましたが、現在では大体皆様が退院し、回復の途上にいて下さいます。

庭では六月頃からコスモスが咲きはじめました。「秋桜」という名を忘れたのでしょうか、風にゆられる美しくやさしい花の波を見ることもなく、草丈ばかりが異常に伸び、その中にチラチラと貧弱な花が咲く有様でした。やはり冷夏のせいでしょうか。数日前思い切って全部抜き去って頂きました。思いがけず「白い百合の小群生」がコスモス林の跡から現れ、庭はさわやかになりました。一ヶ月もすれば植込まれた秋の花々が又、私たちを喜ばせてくれる事でしょう。

先頃ですが、新聞紙上の小さなコラムで読みました記事をお伝えいたしたいと思います。

先々月欧州を御訪問になりました天皇・皇后両陛下が、ポーランドの首都ワルシャワを訪れられた時のことです。一〇二歳の一老兵が両陛下の前で「モシモシ　カメヨ　カメサンヨ」を始めから終わりまで日本語で唄って歓迎して下さったと言う記事です。説明によれば、第一次世界大戦時（一九一〇年頃）ロシア・ドイツ・オーストリアと言う強大国にはさまれた小国ポーランドは、三方より侵入され遂に

亡国に到りました。連合国側の捕虜となった彼は、日本に送られ一年余りを過ごしたのだそうです。その時代の日本の捕虜処遇は、暖かくやさしく人道的でした。彼はそのよろこびを忘れず、覚えていた日本の童謡に心をこめて天皇・皇后様をもてなしたのだという、一〇〇年近い時を大事に抱きつづけられて来た日本への感謝のエピソードでした。グッと来ました。

小泉首相が東欧諸国を訪問された記事の側に置かれた目立たないコラムです。心に灯された小さな光となりました。

当たり前のことですけれど、私たちは施設を利用して下さっている皆さんを心から大事に思っていますし、又大事にしたいと考えています。どうすればよりよいケアが出来るかを、毎日考えています。そのことがよろこびなのですが・・・・及ばない事も多いです。どうぞ、いろいろな御意見・御指導をお寄せ下さいませ。又、よき御協力を頂きたいと存じています。

九月、さわやかによい秋をお迎え下さいますように。

祈りをこめて。

注・ポーランドは第二次世界大戦後はソ連に制圧されていましたが、現在はしっかりした独立国に立ち直っています。ラジウム・X線発見者のキューリー夫妻や、有名な音楽家ショパンもポーランド人です。三十年位ワルシャワを訪れました時聞かされた彼国人たちの祖国愛と誇りの話は忘れられません。

みぎわ会だより

第152号 2003.10. 1発行

十月

十月です。この年も既に3／4を過ごしてしまいました。

冷夏・残暑・台風・地震に重ね、海・山の事故、大火災と目まぐるしく襲う天変地異・人災の打ちつづく中に、九月はすぎてゆきました。

政界も又情報上でも水面下でも、波打つ戦いの音が流れています。何となく不安感に脅えることもございますね。

皆様にはお変わりなくお過ごしでしょうか。お変わりないご平安と御健勝を祈りつつ、これ亦変わりばえのない便りを、いつもと変わらないおなつかしさが胸の中に音もなく滲むのを覚えて書いています。

草の手土

刈っても
刈っても
追いつかない
土手の草が
うらめしい

大雨続きで
土砂崩れのニュースが
流れたとき

刈られても
刈られても
ふんばった訳を
教えてくれたね

土手が抜けないように
自分の役目に
一生懸命だったと

このうたは、九月二十八日産経新聞の「朝の詩」に選ばれて、いつものように一面の左肩を小さく占めていた詩「土手の草」です。作者は、福井市五十六歳の女性です。毎日何となく眼のゆく小さな囲いです。ホオーッと思ったり、すごいなあとか、なるほどねと通り過ぎるのですが、この詩は何故かゆっくりくり返し読まされてしまいました。詩われているコトバの中から、控え目乍ら弱いものへの静かないたわりに似た暖かさが素直に伝わって来るのです。

本当に草にはかないません。庭の草引きに夢中の満子に「満子、草には勝てへんよ。腰痛にならんうちに止めた方がええのんちがう?」とよく申します。そう言う私も土の上にボタボタ汗を流し乍ら草引きに時を忘れた頃もありました。そして今はもうお手上げ降参している草です。嫌われものの草です。なのにこの詩を読み乍ら、いつの間にか自分が草に見えて来たのはショックでした。刈られようとしたり、踏みつけられたりし乍ら、この土手にしがみついて手も心も離せない自分の姿が、チラチラ見えるように感じられてまいりました。ヘンな話ですね。

九月は敬老月として忙しく過ぎました。例年通り米寿・卒寿・白寿・上寿　計二十一名の方々を数名の御家族も交えてお祝いいたしました。今回は、シンプルで一寸おしゃれなお祝いの席がセットされましたが、それなりに思い深い時を静かに過ごすことが出来ました。思えばこの方々も大事な土手を守るために、唯一生懸命刈られても踏まれても耐えて来られたのだナーと、私は独りふり返り、改めて皆様のご長寿に心から感謝したい想いに浸りました。美しい花も咲かせず、よい香りも放てなかったかもわかりませんけれど、お一人々々に守られねばならない土手があったのでしょう。私も救われ

ました。

九月は日々満席のまま、フリーパスいたしました。まだ守って頂かねばならない土手があるのでしょう。入院者も次々お元気に退院されました。

秋らしい澄んだ青い空、白い雲も柔らかく、案じました田圃の稲穂も私の目にはいつもと余り変わらず黄金色の穂を垂れています。

世界中に不安が満ちていますのに、平穏なみぎわ村の秋です。皆様と仲良く楽しく十月も過ごさせて頂きたいとみんな一生懸命です。

四日の運動会もいいお天気に恵まれることでしょう。皆様のご参加をお待ちしています。職員にはうれしい一泊旅行のプログラムも作られました。私には八十歳代最後の誕生日となりました。皆様と一緒に老い、同じようにみぎわ村から旅立たせて頂けるようにと願っています。

では、又ひと月、お幸せとご健勝を祈りつつ。

PS　タイガースのハッピを買ってきて頂きました。長寿お祝いの席で披露しました。

着心地よく、やんやの拍手をいただきました。ステキですよ。

みぎわ会
だより
第153号 2003.11. 1発行

旅のこと

特殊日と言い伝えられ、私もそう思い込んで来ました十一月三日の「文化の日」は、必ず晴れる一日の筈でした。が、今日は終日小さな雨が降ったり止んだりで、かすかに黄ばみ始めたまわりの山々の姿さえ、さだかでない深い霧が立ち込めています。カリフォルニアの大火から流れ出た煙が太平洋の流れに乗り、はるかここまで辿りついたのではと、私はそんな事を考えてしまいました。

十月は終わりました。十一月です。霜月です。

皆様はいかがお過ごしになりましたでしょうか。私は上旬の月例行事を終え、十月九日関空泊にて十日から二十一日迄、北ヨーロッパを旅してまいりました。往復共なつかしいKLM（オランダ航空）機を利用し、スウェーデン・ベルギー・オランダ三国を心易い友人二人と、信頼出来る日新航空の藤田氏の案内に、満子を加え五人のグループでのんびり楽しみました。出発前、春からデンマークに半年留学された浅野先生から、スウェーデンは0℃とか、寒さに気を付けてとのお便りを頂きましたが、十日間の旅程中は、毎日晴れ渡り美しく澄み透る北国の空の下に置いて頂きました。5℃±のスウェーデンは黄葉の真っ盛りで、背の高い広葉樹の森も、一直線に並ぶ長い並木も透明な黄に染まり、古城の庭園も亦黄の落ち葉が敷きつめる美しい眺めでした。どこも静寂と言える雰囲気です。

ストックホルムの市庁舎は、日に映えてまっ赤な蔦が壁の一面を上階迄覆い尽くし見事に彩ってい

ました。昨秋、お二人の日本人がその栄誉に輝かれ、私たちも喜びをわけて頂いた「ノーベル賞」の本拠地です。

市庁舎をくわしく案内して頂きました。国王に面接された田中さんの逸話を思い出す「黄金の間」、「藍の間」、数百人の会食の場となる大ホールも余り観光客もなく、重々しく長い歴史を見守って来た、広々と静かな空間でありました。

第二夜はノーベルディナーと同じメニューの夕食を頂くということで一寸装い、同じと言うシャンパンから始まるフルコースを楽しくも勿体なく、思いを込めてあれこれおしゃべりもはずむ時を過ごさせて頂きました。

十二日は約一五〇キロ程南方にある「リンショーピン市」を訪れました。明るく車も少ないハイウェイです。見渡す限り広々と隅々まで耕されている農地と黄葉の並木がつづきました。大学の町と言われるこの市では、西脇出身の前田さんに逢う目的がありました。私にとり前田家とは、四世代に亘るホームドクターの親しい関係です。彼女は関西学院大学に学び、私には旧知の浅野教授のゼミに加えられ、今春卒業後も同教授の御計らいを頂きリンショーピン大学留学と共に老人福祉研修生として学習中なのでした。

ストックホルムより更に静かで黄葉の樹々に初冬の日が透ける日曜日です。彼女の案内と計画により、大きな老人施設の一棟を訪問見学させて頂きました。いかにも由緒ありげの高級家具と共に、この施設で生活されている方のお部屋でご自持の立派なお茶碗でお茶を頂き乍ら、前田さんの先輩にあたるS姉が説明・通訳をして下さいました。お茶の席へバースデーケーキが運ばれました。明日十三

日は私の八十九歳の誕生日だと彼女は知っていたのです。職員や他の利用者も加わって下さり、正に歴史的な誕生パーティーの出現に、私たちはほほを寄せ合い、しかと肩を抱き合ってこの再会を楽しみました。孫娘を抱くようなよろこびでした。

十三日に訪れたベルギーの首都 ブリュッセルでは、「社会福祉局国際事務局アドバイザー」の肩書きを持つお二人の市吏員から「ベルギーの社会保障と資金調達、社会保障制度、高齢者の生活等」につき二時間の講義を頂きました。有資格の日本人青年が通訳して下さいましたが、医療・介護・障害・年金等の話になりますと、専門用語の解釈がぴったりせず焦りを感じながらも、緊張しきって熱心に学ばせて頂きました。

おおむね御仕着せ、命令で守るべき規則・規定下の日本とは異なり、この国では国民生活の重要問題は常に行政と市民が対等の場で、話し合い考え合って進められているように私には感じられました。士農工商のカーストから出発した日本の政治と、あの煌びやかな世界一美しいと誇る「グランパレス」を演出した、商人・職人たちの組合から自然発生的に形成された民主国家の在り方との違いではないかしらとは、私個人としての感想です。

市立の老人ホーム（ーマンションー）も一寸見学しました。オランダのことは残念乍ら紙面に入り切れません・・・。誰も体験しない「水」との戦いに勝ち抜きつつ、国家を形成してきた「ネーザーランド」の力に、今回は強い感銘を受けました。のどかな美しい国土は、彼等が「我々が造った」と誇るに足るものと深く感じました。

ブリュッセル着の十三日、みぎわ会の皆様から、いつものように私の誕生日を祝うメッセージの一束がファックスで届きました。ひと時、胸に押し当てて眼を閉じると、お一人々々の顔や声、みぎわ村の風景が、津波のように私を大きな渦の中に巻き込んでしまい、声もなく感動にむせびました。そして十回もくり返し、その一頁々々を読みつづけました。よろこび、幸福感というのはこういうものなのでしょう！。用心の為にと持ってきた車椅子は必需品となり、藤田氏・満子・ドライバーや皆さんに毎日御世話になりました。信号の少ない彼の国では、道端に車椅子を見ると、双方から車の方が停車して横切るのを待っていて下さるのには驚きました。

おかげ様で元気（?）で勿体ない時を与えて頂きました。この度は時差の後遺症もなく、帰国後も何故か忙しいと思う日がつづき、気がつけばもう十一月も三日という今日になっていました。

「十一月という月は一年がゆっくり熟してゆく時間であるように思う」と一日の産経抄に書かれています。

三十五才の年を重ねたみぎわ会も、九十年目にふみ込んで来ました老いの私も「熟」には程遠い姿である事を沁々知る日となりました。今日あるのは唯、「神の御恩寵」に守られた実証なのですと、真実をこめ告白出来る幸せを感謝するのみです。

もう残り少ないこの年です。皆様のお祈りに感謝し、せめて「ささやかな実り」をと祈りつつ。—旅便りになりましたことおわび致します。—

どうぞよき実りの秋を、豊かにお過ごし下さいますように。

みぎわ会
だより
第154号 2003.12. 3発行

十二月

とうとう十二月に入りました。

皆様にはお変わりなく師走をお迎えになりました事と存じ、そのよう心をこめてお祈り申して居ります。

今年は夏も秋も何となく曖昧な気候でしたけれど、まわりの山々はいつもと変わりなく美しいオレンジ色に彩られてゆきました。山裾から一日毎に山頂へと移りゆく色の流れに言いようもない慰めを受け目を凝らして眺めた数日です。

自然界の営みが確かめられることは、私たちの大きな安心の源だと沁々考えますが、人間の世界には不安や哀しさが絶えません。

優れた若いお二人の外交官の殉職のニュースで十一月が終わったことは本当に哀しく口惜しい限りです。「一日も早く日本につれて帰りたい」と成田を発って現地へ向かわれたご遺族のお姿に胸を打たれつつ、「一日も早く日本へ」という言葉の重さを改めて思わずには居れませんでした。日本こそ私たちの唯一の大事な祖国です。

この大切な祖国 日本の一隅で一点のように小さい乍ら一生懸命に営んでまいりましたみぎわ会も三十五才の年の暮れになりました。一日一日が必死だったと自分では考えていますし、これからも決して変わる事はない筈ですが、この長い道程には多くの祈りの支えと皆様のご支援とご指導あっての

事でございました。厚く感謝いたします。

介護保険制度も第五年目に向かいます。三年毎の見直しということで、本十五年度より介護料の4.2%のカットが行われてまいりました。みぎわ園では年間二五〇〇万円余りの減収になります。年当初は三千万円を予想したのですが、八ヶ月を経過した今日、少し緩和出来そうです。が、これからは職員一人一人に経営者としての自覚を持って「ムダ」使いをしないことに心掛けてほしいとくり返している私です。しかし、現場はいつもと同じように安泰です。時々朝食の食堂へ伺いますと、各階共満席の盛況です。80%以上の方が離床して来て下さると聞き、本当にうれしく喜びをこめて挨拶させて頂きます。そして皆様が安心して生活していて下さる雰囲気に力づけられるのです。

今日から東側の広い空地に植樹がはじまりました。樹々が成長し深い森になる夢を抱いています。春の芽立ち、燃える新緑、夏の緑陰、秋の黄葉と風に舞う落葉、冬木立を透かして見る青い空などを演出出来るようにと、四季夫々の花木も植え込まれます。固い水はけの悪い地層ですが、そこでも育つものをと選んでいます。入所の皆様が安心して散歩したり、木の葉や庭の花々にふれて下さる豊かな美しい庭になること、森になる日が待たれます。健康の元、オゾンに包まれた施設になってゆくでしょう。「みぎわ園の花」「みぎわ園のもみじ」と郷土の見所になれればうれしいですね。

十二月六日には関西学院大学教授 浅野先生をお迎えして、「デンマークの福祉」と題した御講演を頂き、第二四七回のセミナーに代える予定です。十二月十日には恒例の「忘年会」を東条湖辺のホテルで開くことで、担当委員たちは熱い準備をすすめているようです。

十三日は西脇教会と合同でクリスマス祝会、二m近い活きたモミの木にきれいなデコレーションをつけました。よろこびが盛り上がるでしょう。

二十一日クリスマス礼拝（教会）につづき、二十三日は例年のように燭火礼拝を行います（ルデヤ3階）。

この一年を感謝の中に送りたいと願っています。

インフルエンザの予防注射も終わりました。大掃除の契約も出来ています。

どうぞ明るいよい年を迎えることができますように。

新年が新しい希望と平和を地球人類に与えてくれますように。

この便りをごらんくださいます皆様のお上に、一層の御多幸をもたらす年でありますように。祈りをこめて。

みぎわ会だより

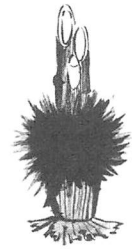
第155号 2004. 1. 1発行　＜新年号＞

謹賀新年

新しい年が地球人類に希望と勇気をもたらせてくれますように、貴方様のよき御迎年、御一家のご健康をお祈り申し上げます。

旧年中は一方なりませんご支援、ご指導を頂きました。ありがたく存じています。今年も不変不屈の意気で歩み出しています。お変わりなき御見守り御指導をお願い申し上げます。

平成十六年元旦



社会福祉法人みぎわ会
理事長　松尾周子
職員一同

みぎわ会
だより
第156号 2004. 2. 3発行

春近し

今日は節分です。早春の光が庭に注がれています。

皆様お変わりなく御元気でいらっしゃいますか。お伺い申し上げます。

去る一月三十一日、医師会関係の研修会で神戸へまいりました。

五時終了後の帰路はいつもの裏六甲を縫い、社・神戸線を走りました。トンネルを出ますと、まだ夕暮れのうす明かりが空一面に拡がる美しく静かな風景がありました。六甲連山の稜線の流れにも、今は冬木立ちの裸木になっている街路樹の細かい枝尖の陰絵のようなレースにも、何となくふくらみが見えるようで、「春近し」とほのかなうれしさが湧くのを感じました。

きびしい寒波が打ちつづいて、日本列島上を流れてゆきました。春は待たれる季節ですし、そのコトバからもよろこびが漂い出すものだと泌々思わせられています。

新しい二〇〇四年を誰もが沢山の願望をこめて迎えました。残念乍ら今日までは「聞かせないで！」と叫びたい虐待のニュースや、どう考えていいかわからないけれど、自衛隊イラク派遣という、もう祈るより外ない現実もどんどん進められてまいりました。

私たちは、ともかくこの小さな高齢者集団を守って、平穏な日々を送ることに一生懸命になる以外には何も出来ないのだと・・・それは仲々むずかしいことなのですけれど・・・思い定めています。

施設の現状を見ますと、入所利用二〇〇名の方々の内訳は、明治生まれ18%、大正生まれ65%、昭和生まれ17%という構成です。35年前の開設時に比し、平均年齢は十年近く高くなっています。私が今九十歳代という超高齢域に近づいているのは驚きの外ございません。無我夢中の日々であったとはいえ、退く時を忘れてしまい、途方に暮れていますというのが正直な告白です。幸い理事会の御承諾を頂き、本年一月六日より医学博士　丸野貞彦先生が副理事長に御就任下さいました。感謝して御報告いたします。

新しい建物にも馴れ、皆一日一日の業に励み、且つ学びを重ねています。新しい東南面の庭の木々も活着したでしょうか。間もなく夫々の形の葉を出し、花を咲かせてくれることでしょう。あの梅は実るかしら・・・と今は植えられたままの梅の庭を眺めては、春を待つ私です。

まだ十分成育していない介護保険制度にも、健やかな成長が希われます。「走り乍ら考え」られる制度のようですが、この司配下で高齢者たちを守り、甲斐ある長寿を形成して頂けるようにお世話をする私たちには、限りもない労と智と愛が求められているのを、事毎に、日毎に思わせられます。迷いもなく労し励んでいる一一〇名の職員「吾等の仲間」の健闘に感謝しお一人々々の美しい成長を祈るのは、私だけではない筈です。ご指導ご支援をお願い申し上げます。

春近し　の想いと共に、皆様の御健勝をお祈り申し上げつつ、二月のお便りといたしました。

みぎわ会
だより
第157号 2004. 3. 3発行

やよい

「極寒の春　三月」夜のＮＨＫの気象情報が東京の寒さをこう語り、つづく説明ではやはり今年は「暖冬」であったと統計を以って総括しています。あ、三月に入ったんだと気付いた朝でした。いつも気にかかる月変わりですのに、ぼんやりしていた私です。

皆様にはお変わりなく春三月をお迎えでしょうか。何もかも定まりないこの冬であったように感じていますが、どうぞ誰にも美しいやよいの月となりますよう願いつつ、少しおくれたいつもの便りを送らせて頂きます。

私たちみぎわ園では、一月末から三・四日の波で数名の方の高熱がつづきました。マリヤ館に殆んど限られていたのは、感染源の関係でしょうか。インフルエンザ反応(＋)は三人だけでしたが、一時は十名余の方々の肺炎症状に、特養での点滴限度も切れ、丸野先生のお助けを頂くなどいたしました。二・三の方につきましては、御家族の来園もお願いしました。ナース陣はじめ、ケアも皆給食も一つになり、力を尽くしました。一〇一歳のＫさんから殆んどの方が九十歳前後でしたのに、幸いにも皆さんが波が引くように順次無事パスして快復して下さいました。奇蹟的な経過です。漸く心身の緊張が少し深い疲労に変わりつつ、三月に入ってきた有様です。

通勤の道には春が来ています。昨春以来、いろいろ手を入れ、地力の強化に努めて来た甲斐が見え

始めています。菜の花が漸くその色に咲き、大きくなった下枝梅は、日に日に白い花が殖えてきました。あと一・二日暖かい日が訪れれば満開と思われる三分咲きの美しさを見せています。久しぶりに黄水仙の蕾がツンツンと伸び並んだ様には、ついニコッとしてしまいます。衰えていた朱木蓮も、今年はきっと沢山花をつけてくれるのではと思えます。

一年前、介護料の変更（42％カット）に神経を尖らせて迎えました十五年度も終わりに近づきました。誰もが緊張感を以ってよく力を出し頭を使ってくれたおかげで、当初心配しましたよりは、ずっと軽い減収で新年度を迎えられそうだと、事務長がうれしさを交えてささやいてくれました。

十五年は世界中が人と人、国と国、民族対民族、又宗教対抗の戦いに明け暮れた一年でした。自然界にも大地震、山火事、洪水が打ちつづきました。殊にＢＳＥに次ぎ鶏のインフルエンザという聞いたこともないニュースが、日本列島をナメ尽くそうとしているかの昨今です。心配ばかり大きくなります。身辺に危険がいっぱいです。

私たち人間がどこかで道の選択を間違ったのでしょうか。幸せは唯安心出来るところにだけあるのではと、私のような年代の者には、不便も多かったけれど暖かく隣近所も信じ合って生活した様子が、物語を読むように想い出されます。

現在の私の一日は、朝礼で始まります。少し辛い離床から九十分位毎日同じ緊張感に圧し出される出勤準備、時には寒い外気に敏感にけいれんする足の痛みをなだめつつホームに着き、講堂に向うのですが、Ｅ・Ｖからの廊下に並ぶソファには、朝食後のいこいを取る常連の方々が、のんびり坐って

居られます。「お早ようございます」と交わす声と笑顔もいつもの通りですが、時に、つと私の手を取って「まあこんな冷たい手―」と握って下さったり、毎日「先生久しぶりやったな」となつかしんで下さる笑顔の暖かさ。ここにある安らぎと、通い合うと言うより注ぐように頂く皆様からの信頼に、私は陶酔させられているのだと思います。もう限界を越えたわが老化を意識し乍ら、このうれしさに魅せられているようです。この一日一日の尊さに生かされています。

ともあれ、今、日本国民である故に加齢衰退の途上も、信頼と安心が漂う中で淋しくとも安らかに生かされる「幸せ」を感謝し、この福祉を委ねられている小さな事業体として、一生懸命に皆様の平安を守りたいと願わせられています。御指導御助言下さいませ。

皆様にも私たちにも、暖かい春のよろこびが訪れますように。

みぎわ会
だより
第158号 2004. 4. 1発行

新年度いろいろ

早くも四月五日になりました。

テレビの花便りも遠ざかりました。気象情報士の誰かが「今は春と冬の混ざり合った季節」と言われましたが、正にそのとおりの日々です。

皆様はお変わりなくお過ごしでございますか。お伺い申し上げます。

みぎわ村にも春は訪れて来ました。朝、東屋の屋根に白く光った霜が、少し日が登るともう消えているような中で、きちんとしたスケジュールに副うように桜はきれいに咲き満ちました。前庭の花桃も丈高く沢山花を付けました。各ホームの雛祭りを賑わしてくれたことと思います。衰えていた朱木蓮が、今年は大部元気をとりもどしています。どんな花が咲き出すかとなつかしさと喜びで、小さく咲き出している蕾を眺める毎日です。菜の花も野草のように小さく背の低いチューリップたちも、なつかしいラッパ水仙も咲き揃いました。本当に春が来ました。山にも里にも野にも春が来ています。

そしてこの春四月は、事業体には新年度のはじまりでもあります。何かと慌しく、時には驚き時にはうめき　なやむ中にいつも必要な助けを頂き、十五年度は静かに去り、新しい十六年度が始まりました。介護保険制度のゆく末は気にかかる問題ですが、今年のみぎわ会は大きく人事の刷新が行われました。

みぎわ園・いずみ寮共に「施設長」が変わりました。みぎわ園では、矢野園長が退任され、副園長の芹生哲也（37才）が施設長に、臼井いさみ（48才）看護部長が副施設長、臼井事務長（44才）は変える事の出来ないベテランで続投となりました。いずみ寮も22年を一すじにみぎわ園寮母・寮母長・いずみ寮寮長と励んだ、神原かよ子の定年退職の後を受けて、津瀬美智子（51才）を寮長に昇格させました。結果、トップ陣の平均年齢が40才代という若返りとなりました。各部の組織も、リーダー・サブリーダーの適材化が実現しました。

みぎわ園は創立35年に入ります。数字のみではわかりませんが、老人福祉法制定の昭和39年から見ますと、業界では草創期に開設した古い部類の歴史ある施設と見られています。この度のトップ層は全員みぎわ園育ちであることもうれしく、皆でさわやかな明るい施設づくりに励み、みぎわ会第二世紀の基礎が形成されてゆくことと期待しています。皆様のお変わりないご指導をお願い申し上げます。

教会も新年度より、神戸聖愛教会 前牧師、新里昌平先生のお援けを頂き、礼拝を守り牧して頂けることになりました。神に感謝し、先生に感謝いたします。

余談乍ら、だんだん難しくなるイラク問題に、誰も気の重い感じでいましたところへ、二月末以来、鶏のインフルエンザ事件が起こりました。音もなく匂いもなく全く目に見えないウィルスの侵入で、数百万羽の鶏の生命が奪われる悲劇です。不運にもウィルスに襲われた業者の対応から、深刻な社会問題も起きています。胸の疼む出来事です。事業者（体）にはやっぱり、損益を超えた理念と倫理感が必要なのだと考えさせられています。思いもしなかった状況に遭遇した時の判断とその対応への決

断には、背景として専門的知識と社会的責任感が問われているようです。大変難しいことです。

私共の仕事にもヒヤリ・ハッとはつきものです。表に現れない失敗もあります。

「長」という職に求められる責任の重さ・判断と決断の難しさを思い乍ら、若いトップ達が時には孤独に耐えつつも、謙虚に逞しく成長してゆけますようにと祈るだけの私です。

世界中が平和で建設的な方向へと転換してゆくことも、祈らずにはいれないことです。小さな祈りですけれど。

付記・四月六日、神原かよ子前寮長の「関西聖書神学校入学式」に参列させて頂きました。心打たれる入学式でした。神原さんはこれから四年間在学中、神学生としてみぎわ教会を助けて下さることになっています。これも深い感謝です。

みぎわ会
だより
第159号 2004. 5. 3発行

新緑便り

新緑の五月が訪れました。

こういうご挨拶しか出来ないのが、何とも口惜しいと恥じるばかりの新緑に溢れる五月です。

平戸つつじも満開です。自然の大きな恵みと慰め、よろこびにつつまれています。今日此頃の日本人として、内外交々むずかしい問題の坩堝にある思いの日々でありますのに、全く別世界の安らぎは心に沁みる幸せと申せます。いいお天気つづきで、そそぎかける陽の光りに、浸りきって居れる私たちの無防備と安全は、この世ならぬ恵みと思わせられます。

皆様はいかがお過ごしですか。入学・卒業・就職など、喜びにお忙しい時もすぎ、好天の連休を「ゴールデンウィーク」になさっていらっしゃるでしょうか。ご健勝でこの平穏の朝夕を楽しくお過ごしのようお祈りいたしています。

お心にかけて頂いていますみぎわ会は、新年度に入り新人たちを加え、新組織下での歩みを進めています。心配性の私には、不安や緊張から抜け出せない一ヶ月でしたが、全施設はどこも、定まったレールを時刻正しく走る列車のように、夫々の軌道を変わりなく元気に走り抜けています。起るべきハプニングにも、巧みに正しく対応して平穏という言葉に尽きる一ヶ月となりました。私はどっぷり

と疲れてしまい、二十九日の休日を幸いと、二十六日月曜の診療・セミナーを終え、久々に六甲アイランドの小さな家へまいりました。

心にかかり乍ら出来なかった一、二の事をきちっと仕終えることを独り心に決めていましたが、物音一つない、知る人もない、三方厚い壁の部屋からはるか大阪湾の広がりだけを眺める一人きりの三日を、半醒半睡、本も読まずペンも持たず、TVをつけたり消したりで体調も怪しくなり、とうとう満子に「SOS」となりました。満子が来てくれ、デパートへゆきたいと駄々をこね、車椅子を借りてゆっくり楽しませてもらったり、家から近いスーパーへ手押車を押して一緒にゆき、トマトやらっきょ・パンなど時間をかけて買物をする間にすっかり元気になり、退院患者のようにうれしく帰ってまいりました。

わが家の玄関まわりには、おだまきが沢山広がり、可憐な花がいっぱい咲いていますし、羊歯の元気な緑が大杯の重なりのように地を被っていました。

二日、礼拝式の座で「祈り」の説教を聞き乍ら、私にとっては自信のない、しかし必死で孤独なこの数年の戦いから脱出させて頂いている事実に気付き、流れる涙が止められない感謝を頂きました。礼拝堂から外に出ますと、新緑の世界でした。樹木毎に、枝毎に、その濃淡も透明度もちがう微妙な美しさ、風に波打つ輝きに言葉もなく立ち尽くしました。「池のまわりがきれいになりましたよ」礼拝後、隣席のSさんの言葉を思い出し、満子に援けられ乍ら山の池へ行ってみました。だんだん押され、千坪を切るかになっていますけれど、原生林です。大事なところです。太く丈高くなった木々の

幹をさすり乍ら眺めました。木漏れ日は緑に染んでしっとり柔かく静寂の世界を満たしていました。音もない木かげに一人の人が見えました。長い柄のガンジキで、池の面に漂う樹々の落穂を掬っておられるのです。

動くともない水が浮遊物をゆっくり流しています。木かげでは見えない小柄な老人が、根気良く掬い取っては若木の根元に積んでいます。いずみ寮のXさんのようです。黙って会釈し暫く見ていました。「ミレー」の絵を思う影色です。緑を映した水面に小さな光る円を作っているのは、細かく小さい噴水のわざでした。

まだ二日お休みがある私には正に「G・G・G・W」「偉大な緑のゴールデンウィーク」になりました。皆様もいつかこのみぎわ村の小さな秘境を訪れて下さい。「やさしい癒し」をお味い頂けるのではと思います。

長々しい緑のおたよりになりました。おわびいたします。

皆様の御幸せを祈りつつ。

みぎわ会
だより
第160号 2004. 6. 1発行

みぎわ便り

皆様お元気ですか。六月一日はさわやかな晴天で訪れました。三日前に九州・四国の入梅宣言があり、昨五月三十一日は高温・多湿のひどい天気でしたけど、梅雨という恵みの雨期は、小さな島国のわが国土・国民生活の生命を支えるものと感謝して過ごすはずなのですが、やっぱり晴れ渡った空はうれしいですね。

五月という一ヶ月は、国内・外共々、私たち日本人には何とも難しく心痛む出来事が多すぎたように思います。毎日TV・新聞で送られる情報の「明暗・喜怒・理解出来にくい現実」の中に、苦しく模索をつづける日がつづきました。メディアの成長と成熟の感じられないやり切れなさも感じました。直接関係ない者にも何とも空しくも口惜しく、重苦しい日々でした。

国家という中にある民族・宗教・伝統そして指導者・政治家・学者について、この度のようにストレートに考えさせられた事はなく、正に難解の人の世の哀しみを思うのみでした。

そういう中で、先日の中国（岡山県）山系の谷間にある「大桜村」の放映には感動しました。日本固有の美しさ、自然と人間のすき透るような関係には、言いようもないうれしさを尊くも感じました。こういう日本の姿から救いのような安らぎを得乍ら見入らせられました。

さて「みぎわ会」のご報告ですが、七日夕には恒例の「新入者歓迎パーティー」を芝庭で楽しく展

開しました。夕闇と共に新旧の交わりは深くなってゆくようで、暖かい時が流れました。楽しくうれしい一刻でした。

組織としましては、十九日に事業監査、お二人の監事様にはお忙しい御日程をやりくりして、細かくみて頂きました。二十四日は十五年度決算理事会となりました。十五年度は、介護料カットの危機感に緊張深いきびしい経営でしたが、無事安定経営を果せました。その前年に敢行した諸規程改正もありますが、毎日重荷を負うて責任を敢行してくれた、施設長はじめ事務長以下現場や各部の一人々々の精励が、細かい数字の中から読み取れる思いでした。行先困難なこの種の事業です。福祉が好きでみぎわ会を大切にして下さる一人々々に感謝する外ない私です。

みぎわ会もこの五月で満三十五年を通過しました。もう三ヶ月で私も九十歳になります。ここで急にホームへゆきたくなり、ペンを置いて出かけました。パットを貼り、サポーターで固めたひざ、コルセットの腰という重装備です。杖だけ持って出かけました。ここ数日の痛みが消えている今日の私の足です。きれいな夕暮れでした。広い庭を目ざしました。昨春竣工式に中庭を飾った五十株の「あじさい」は広い庭に全部活着し、少しずつ花をつけはじめていました。裏庭に沢山あった楓 約二十本が程よく配置され、まだ柔かい若葉で美しい姿を装っています。「先生、先生のお庭の子生えの楓が、こんなに立派に育ちました、ごらんになって下さい。」今年初頭逝去された岡沢先生に、私は心の中でお話かけました。創立理事としていろいろお力添え下さり、三十年も理事を務めて頂いた先生です。三十五年前の開設時に、広大な岡沢邸の庭園から手の指程の楓を沢山頂いて来たもので

す。幹は径10㎝、高さ二・三mに成長しています。夫々自然に成っている姿です。秋の紅葉はきれいでしょう。「岡沢先生のおだやかな微笑」を見る想いです。あちこちにベンチを置き選んで植えた山桜3、と外側には欅3、夫々五m程の若木も植えました。何年か経てば私の夢見て来た森に囲まれた施設になるでしょう。毎日、何人かの利用者が「ベッドを離れて」この森を散歩して下さるのが、私の一番深い夢なのですけれど。

厳重な出口のない庭をさ迷っていた私を見つけ、寮母のSさんが家まで付き添って下さいました。三〇〇mも歩いたかしら、うれしいなあーと部屋へ帰りますと、原稿紙を広げたままの机上はそのまま、軒端にさし込んでいた夕日は少し沈み、木洩れ日に変わっていました。きれいな夕暮れです。

戦火からは遠い日本の静かな晩春のひと時でした。どうか一日も早く世界に平穏が訪れますようにと願う外ございませんネ。

皆様の御多幸、御健康を祈りつつ、又七月まで。

みぎわ会
だより
第161号 2004. 7. 1発行

流れ

今日七月一日は快晴の夏日となりました。

あちこちで豪雨・台風上陸、又は竜巻などの災害が報ぜられた六月でしたけれど、この辺りは「ああ、梅雨らしいなナー」という数日があった程度の一ヶ月となりました。近くの田圃は一、二日の間でさっと青田に変わりました。稲苗の日に日に育っている力が見えるような眺めです。

皆様にはお変わりなくお元気で七月をお迎えでしょうか。いつも乍らご健勝を祈りつつお伺いいたします。

六月中は、この広い地球人類の世界には、他にもっと沢山の面白い事、お芽出度いこと、うれしいこと、楽しい出来事があるのではないですかと問い返したいような、無気味なテロ事件、気にかかるけれど本当はどうなのかわかり難い六カ国会議、日朝関係の難しさ等々、気の重くなる情報ばかりが届けられます上、国内では考えられない幼児虐待、子供や少年少女たちの恐ろしい犯罪、いつ迄もくり返される強盗・泥棒の事件の報道に、何となく「うつ的」になるような日々でした。

間もなく、世界中を湧き立たせる「オリンピック」が発祥の地「アテネ」で開かれます。勝敗に拘らず、明るく希望をかき立てられたり、アハハと声を出して笑い合える世界の姿が見たいものです。

さて、みぎわ会では六月も静かな「スローライフ」と見えるように流れてゆきました。小さな波や職

員の忙しさも、誰も余り気にしてもいないような感じです。ホームという名そのものです。

その六月上旬に、みぎわ園最高齢のKさんの旅立ちがありました。一〇一歳のKさんは、静かに安らかに全身を私たちに委ねておられる様子で休んでいらっしゃいました。終末期にあってもベッドを訪れ「Kさん、こんにちは」と声をかけると、眼を開け私の顔を見ると、「にこーっ」と柔かい親しみいっぱいのほほ笑みを返して下さるのです。胸に当てた聴診器からは「トントン　トントン」とリズム正しく清澄な心音が流れてきます。このいい心臓が、Kさんの御長寿の源なのだと思いました。

それでもいよいよ今晩中かとの知らせに集まって下さったご家族に、まだ心臓がきれいに動いていますから・・・と廊下のソファーでそっと話しています時、側に付いていて下さった孫さんから呼ばれ、急いでベッドに伺いますと、呼吸が止まっていました。胸に当てた聴診器には何の音も響いて来ず、静止の闇でした。安らかな旅立ちでした。大往生と言われるものでしょう。

一〇一年余という気の遠くなりそうな時間。Kさんが初ぶ声を上げられて以来　胎内でも鼓動はつづいてはいましたが　一日も一分も休まず止まらず乱れることもなく、リズム正しく動きつづけた小さな臓器・心臓です。尊いとも、いとおしいとも、生命の神秘に言いようもない感動を覚えました。私の耳の中に、あの柔かいけれどしっかりしたKさんの心音が残っているようです。

そう言う私もあと百日余で「九十歳」になります。我乍ら不思議な気持ちです。

六月五日の夜、みぎわ園創立三十五年と共に私の「卒寿」を祝う集いを開いて頂きました。神原かよ子さん、丸山智枝子さん、宇治川愛子さんたち30年から25年のみぎわ園キャリアのお骨折りで、「十年以上勤続ＯＢ」に呼びかけて下さったそうです。一〇〇人以上もあったと聞き、驚いたり感謝

したりの私でした。

当日は28人と芹生施設長・臼井事務長の現役も加わって下さり、何とも暖かく、さわやかにお祝い頂きました。うれしいという外ありません。お集まり下さった皆さんのお顔を見るだけで、遠い日が今日になる、うれしくなつかしい再会に、唯、手をとり合い、肩を抱き合うばかりでした。

皆さんからいろいろなスピーチを頂きました。昔も今も変わらない、私のわがままや厳しい提案に応えて下さった方々です。そうした皆様の忍耐やお力で、みぎわ会三十五年の歴史が造り上げられたのです。ありがとうございました。

「神様ありがとうございます。」

・・・・・・　・・・・・・　・・・・・・

私の長寿もおかげ様で順調に進み、心身の老化も平均的ではないかしらと、物忘れ・字忘れ・約束忘れで皆様にご迷惑をかけています自分に、恥ずかし乍ら慰めをこめて言い聞かせる毎日です。

「時」は音もなくしかし的確に流れています。人も世も、考え方も価値観も変わってゆくようです。が、みぎわ会がこの長寿時代に在って、この地方の「小さな、いこいのみぎわ（汀）」として皆様に用いて頂けますように。この祈りだけは変わらない私たちの宝です。

次第に難しくなりそうなこの仕事に意欲を持って励んでいる一一六人の職員のためにも、皆様の変わりなき御支援と御指導をお願い申し上げます。

これから二ヶ月余は一番暮らし難い季節でございます。くれぐれも御健康にとお祈り申しています。

では又八月迄。

みぎわ会
だより
第162号 2004. 8. 2発行

秘めごと

台風10号の進路が北西にそれてゆき、八月一日は静かな、しかも久々に程々のおしめりを受けたよい朝となりました。一日中雲が厚くてきびしい日射もないところへ時々風が流れますと、本当にほっとさせられる快さです。でもまだまだあと一ヶ月以上暑さは続くことでしょう。

皆様にはお変わりもなく災暑の日々をお過ごしのことと存じます。

怖ろしい北陸の大洪水の情景は、本当に辛く哀しい想いに陥ちこませられました。何のお手伝いも出来ないのだという事で、つい情報の切れ目と共に自分から遠い出来事にしてしまうのですが、おゆるし下さい。この災害地へ身を挺して下さる沢山の人たちに、自分も救われているかのように感謝します。殊に「二億円の宝くじ」プレゼントの報道には、思わず手をたたくようなさわやかなよろこびを頂きました。恥かし乍ら心の中で「どうもありがとうございました」とくり返しこの無名の善き人に感謝しています。

八月と言えばやはり私には「敗戦時」の想いが、亦新しい一つの情感となって心を占めてまいります。みぎわ村の夏は遠近の怖ろしい出来事とは無縁のように、平穏な日々として過ぎています。けれど戦争の傷は心の闇深くつつまれた疼みとして、誰彼の胸に秘められていることを知りました。

数日前の事です。発作から少しずつ快方に向って居られるNさんですが、混乱は続いています。

いつものように私がお部屋を訪問しますと、ベッドに顔を伏せている姿がありました。驚いて「どうされたの」とささやきかけますと、泪を拭き乍ら、「先生にだけ言うのやけど」と話された切れぎれの言葉をつなぎ合わせると、どうやら若い頃の愛人への「申し訳ない」という哀しみの泪のようでした。戦没された彼を偲び、自分一人こうして生きていて申し訳ないとの泪なのです。私は不意に自分の秘密の戸を指されたように感じ、つい彼女の手をとる私の目にも泪がにじんで来ました。

この方の今は記憶力をはじめ、様々な精神機能が少しずつ低下してゆく混乱の中です。不安と淋しさの中で、不意に浮かび上がった大切な愛惜への泪なのでしょう。

世界一長寿国になった日本です。殊に女性は長寿者の80%を占め、人生90才時代に及ぼうとしています。

80才以上の高齢期にある女性の中には黙ってつつんでいらっしゃる遠い日の哀しさが、まだみずみずしい昔の姿のまま生きているのかもと、暫く乙女のような追憶の世界に引き込まれたのでした。

二日、礼拝に出席されたNさんは、とてもおだやかないい笑顔を見せて下さいました。あの事は今は忘却の中に沈潜しているのでしょう。

あと10年も経てば、私たちの持つ大切な夢にも似たひそかな慕情も日本から消えてゆくことでしょう。

今日二日、サンケイ新聞紙上で月例の石原慎太郎氏の「日本よ」の論説を読みました。敗戦後59年、時と共に失ってしまわれつつある古き日本の、よき日本人のこころ―自立と誇り―への愛惜と警告がこの方特有の明快な文字で綴られていました。心を打つ憂国の言葉でした。

今年はこの辺りの緑も花々もきれいです。殊に百日紅のゆたかに力強い花々は、美しく微かな色調のちがいにも慰められます。皆様と共に一生懸命生きてゆきましょう。と励まされています。暑い一と月を、どうぞ御健勝にお過ごしくださいませ。

みぎわ会
だより
第163号 2004. 9. 2発行

暑かった八月

多分地球上の二百余国の人たちを夢中にし、日本人の多くの人たちを睡眠不足に追い込んだ「オリンピック」は終わりました。

殆ど毎日焼けるような暑さに包まれた日本の街々村々のことを聞きつづけた八月も、月末に襲来した台風十六号が、細く長い日本列島を南端から北の果てまで、大雨と暴風で山も河も家も道も、木々も田も畑も果樹園も破壊した上、人の生命までも奪って、ゆっくり通りすぎるのと共に去ってゆきました。

防災の日、今日九月一日は静かです。青空も少しのぞき、何か肌ざわりのちがう空気になりました。

まだ残暑もつづくと告げられてはいますが、あちこちに小さい秋が生まれて来ることでしょう。

皆様にはこの八月をお障りなく御過ごしになりましたでしょうか。台風の被害もございませんでしたでしょうか。どうぞ、お健やかで御無事をとお祈りいたしています。

異常事態の発生を案じました。「オリンピック」は、日本選手たちの健闘が国民を力づける二週間余りとなりました。人類の「美」と「知」を創り出した国、ギリシャの古都アテネらしい大会だったように感じました。それにしましても、久々に金に輝いた男子体操には、人間の体の美しさに驚嘆させられるばかりでした。女子マラソン優勝は、前回のQちゃんを思い出し乍らいましたが、本当にう

れしく、見ていて心安まる走者の勝ちぶりは言いようもない慰めも与えられた勝利でした。

選手の皆さんの長くきびしい訓練は想像することも出来ませんが、人間の戦いがスポーツという形で終わるのだったらナーと、この華々しいイベントの彼方で、相変わらず血を流し殺傷し合う戦いがつづいていることを、哀しくも恐ろしくも思わせられる時間でした。

そうした長く暑い八月も、このみぎわ村では濃く深い緑に囲まれ、台風の被害も言う程のことなくおだやかに流れてゆきました。

八月七日は例年行事の「夏まつり」でした。今年も芝の中庭で開きました。いつものように盛会でしたが、今年は夕食を済ませて、飲み物・タコヤキ位のおやつを頂き乍ら進められましたので、すっきりした中に暖かいコミュニケーションが流れ、踊る人・見る人の間には柔らかいものが漂い溢れていました。殊に毎年独特の「出し物」で私たちを楽しませ、御本人も大いに楽しんだ酒井さんが、重症のベッドからいい表情で眺めている様子や、何一つ出来ないOさんも「リクライニング」で降ろしてもらい、気分の仲間入りをしていらっしゃるのを知り、ケアの皆様の細やかな思いやりに打たれました。ありがとうございました。終わりの豪華な打ち上げ花火に迄、皆さんのハートがいっぱい詰まっていました。私には言いようもない感動の夏祭りとなりました。

前日八月六日には「県教育研修所」から「県立高校行政職員」の資格を取った方たち18名が一日研修に来られました。約十年近く定例行事になっています。午前の60分は「これからの長寿時代を生きる30代の皆様へ」という少し長いタイトルで、私がみぎわ園ものがたりをさせて頂き、早速十一時から実習に入って頂きました。相談員の橋本さんは仲々のお仕事だったと思いますが、数日後、全員署名入りの

研修レポートを送って頂きました。内容は相似たものが多かったのですが、大別して列記いたします。

1・老人ホームを訪問したが、こんなに明るく清潔感に溢れ、全く臭気のないところがあることに驚いた・・・

殆ど皆さん第一に記述されていました　同1

2・職員が皆、生き生きとし、明るく、礼儀正しい挨拶と態度に感動した・・・

3・職員のやさしい笑顔と暖かいコミュニケーションが、入所者の明るい表情とのんびりした様子の原動力だと感じた。誰もが個々の名前で呼ばれていたことも・・・　沢山の方々から

4・お茶殻を撒いて掃木で床の掃除をされているのに驚いた。合理的だし静かで仕事をしつつ、職員と利用者のコミュニケーションが作られていた・・・　沢山の方

5・入浴の手伝いをした。車椅子のまま入浴出来る設備をみて驚いた。職員の「手で洗うと肌が本当にきれいになったかどうか確かめられる」とのコトバとケアに感銘を受けた

6・入所者から自分の名前を聞かれた。その人は「私は死ぬまでここにいます」といい表情で言われた。サービスの与える安心感と信頼を確認した。

7・どの施設もきれいで明るく上等の調度品が用いられていて、この事業のスピリットを感じた・・・　etc

右は二十四日　第二五五回セミナーで発表し、もう一度誰もが自分を振り返らせて頂きました。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

今日九月二日も小雨が降り気温も下がりました。気象学者　倉島厚氏の言葉によれば「ゆきあいの空」だそうです。猛暑の疲れが出る季節です。どうぞくれぐれもお大事にお過ごしください。

様々の心痛むニュースのつづく中ですけれど・・・

みぎわ会
だより
第164号 2004.10. 5発行

十月

時をたがえず金木犀が咲いているのを九月の末日に知りました。「よく咲いてくれたわね。こんなに暑い日がつづいたのに、やっぱり秋なのね。」小さな金色の花に顔を近づけて、つい語りかけてしまいました。嗅覚も衰えている私には、あのきれいなつかしい香りが十分届かないのですが、それだけに花との再会はうれしくなつかしいものでした。

本当にきびしい残暑でした。打ちつづく台風が日本列島を殆ど相似たコースで通り抜け、残暑は一気に初秋の世界に移りました。

台風の爪跡と言うには余りにも恐ろしい傷痕が各地に残りました。為すこともなくTVを見ていることが辛く申訳ない気分でした。被災された方々に、どうか一日も早くお立ち直り下さいと祈るだけしか何も出来ないのが哀しいことでした。

この便りをごらん下さいます皆様には、お変わりはございませんか。どうぞ御無事をと祈っています。

私共も、幸いにも何の被害もなく、全員無事に過ごしています。林の中の木々は相当数倒れましたが、人的な被害はなく停電もなく有り難いことでございました。九月一日は「災害食」の献立もありました。

九月は敬老の月です。例年のように敬老の色濃い一ヶ月となりました。数年ぶりに「森本まさの」

さんが上寿をお元気で通過して下さいました。市長様をはじめ、地域をあげてのお祝いを受けられました上、月末には小泉総理と県知事様からも祝寿の証書や記念品が届きました。森本さんは、八年余の入所以後の日々を、きちんと散歩を欠かさずしっかり静かに過ごされました。最近は杖が要りますが、姿勢よく小柄なお体をしゃんと立ってゆっくり歩行できます見事な御長寿です。

みぎわ会としましても、二十日の敬老日には、全施設合同の敬老お祝い会を行いました。広い講堂に金屏風を立て、九つのテーブルが顔が見えるように美しい花台を中心に配置され、各テーブルにも可愛い花が飾られました。米寿十二人、卒寿十八人、上寿一人、計三十一人。御家族は十九名の御参加でした。入院中二人、ご欠席七人です。がご出席の皆さんはいい表情で夫々に装い集って下さいました。各責任職員を加え五十名近い集まりです。がしっとりと落着いた喜びの時となりました。御本人・御家族の発言もあり、誰にも「生きる」という事の意味あるよろこび、「生かされて来た」ことへの感謝が深く心にひびくのを感じさせられました。終りは皆の知っている『ふじは日本一の山』を歌いました。例年の行事ですが、本年は誰もが本当にいい集いでしたネと思わず口にするような「香り」とでも言える余韻が残りました。担当職員たちの成長も大きな喜びとなりました。

この集いの皆様が歩まれた「日本の苦難時代」を思わずには居れませんし、今回で三十五回目の敬老会を行うことになる「みぎわ園」歩んで来た歴史にも深い感謝を覚える時となりました。

月末には早くも来春の求職者の面接を行いました。高卒三名、大卒三名、計六人の方々を前にして改めて「時代」を感じ且つ知りました。みぎわ園開設十年前後までの求人の苦労は、今は私だけが知

るものですが、全く想像も出来ない社会の変遷です。新しい力を加えられ、近づきつつある超高齢社会の長寿者たちが、更に成熟した社会保障制度の中で、より豊かに安らかな長寿を全うされるようにと深く祈らずには居れませんでした。

コスモスが庭のあちこちで本当の秋桜の美しい花を咲かせています。空の色も変わってまいりました。オリンピック・パラリンピックも終り、イチローの快挙など楽しませて頂きました。これからの急ぎ足のこの年が、少しずつでも明るく快い日々へと進んでまいりますようにと願う想いです。

忙しい十月も早五日になってしまいました。皆様の御健勝をお祈り申し上げます。多難な国家を負うて立ち上げられた新内閣が、私たちの大切な祖国をしっかりと守り、より力ある独立へと導いてくれますように、大・小を問わずリーダーの孤独を知る一人として、人知れず祈らずには居れません。

では又来月まで。

みぎわ会
だより
第165号 2004.11. 3発行

十一月

十一月三日です。「文化の日」は玲麗な秋天という特別日と知り、又体験してまいりましたが、今日は何やらうすいヴェールをかけたような秋の日でございます。皆様いかがお過ごしですか。とお伺いする事もはばかられるのですが、どうぞお元気でいらっしゃいますよう祈りをこめて申し上げます。

「西脇市が水害と聞いたけれど」と遠い熊本の水民先生から電話を頂きました十月二十日の夕刻にも、「大雨だったけど大丈夫よ」と平気でお返事した私でした。

強大な台風23号の予報がつづいていました二十日の朝礼では、通勤の途上の安全の為、遠い人たちは早く切上げて明るい間に帰ってネと、又夜勤者には、各施設共在園の皆様には決して外出しないよう、よく気を付けてネという程度の注意で、疲れ気味だった私はもう午後は帰宅して休んでしまいました。

夜十時も過ぎ、みぎわ園でお一人の「旅立ち」あり、満子に助けられ乍らまいり、副園長も来てくれ、夫々の任務を尽くして、帰りは車椅子の利用となりました。が、その頃あの荒れに荒れた空は美しく晴れ、雲が切れ乍ら流れ、星がキラキラ輝いていました。

みぎわ橋はもう水がスレスレですと満子は言いましたが、市内の大浸水のことは全く知りませんまま朝になりました。

職員数名宅に床上浸水と二十一日出勤直後にはじめて聞き、驚きあわてました。とりあえず「暖かいおにぎりとコロッケの揚げ立て」を被災職員に届けることを考え調理部に指示し、園長他元気な者たちが夫々お届けしたのですが、その頃から疲れ気味の私は、午後は休んでしまいました。くわしい情報が届かず、思いついて親しい方のところへお見舞いに出した満子から「南先生も大変です」と聞き、「えっ」と驚き呆然とするばかりでした。

何とも申訳ない不都合ばかりでございました。おわび申し上げる外ありません。二・三日経ち市内や近郷の水害情報を次々聞かされるという有様の中で、何故こんなにぼんやりしているのかしら　と少し落ち込んでしまいました。ところへ、中越大震災のニュースが飛び込み、つづいてその惨状の情報が途切れる事もなく映像と共に送られる日がつづく中で、十月も終り近くなってしまいました。

漸くお見舞金を送る道が明示され、施設・教会・入所者自治会等から、西脇・豊岡、そして中越へと精一杯の想いを託してお見舞金を送りましたが、現地の皆様のご苦難に唯々お心を強くしてお耐え下さいと祈る外はありません。

もうずっと昔に話題になりました、小松左京氏の「日本沈没」を思い出し、本当に地球はどうなるのかしらと漠然とした不安の日々がつづきます。被災しない私迄うつ状になっています。

皆様の御健在御無事を重ねてお祈り申し上げます。

十月初旬はいいお天気でございました。運動会もいつものように楽しく終わりました。私事になりますが、十三日は私の誕生日にて、卒寿という節目を越えさせて頂きました。まさか！という気持ち

ですが、みぎわ園を創めましてよりは唯々この途一つ忘我の年月だったことを思い知る事になりました。勿体ない一日々々でした。ひたむきに生きさせて頂きました事は「感謝」の外言葉はございません。いろいろのあやまちも失敗も許して頂いてまいりました。

十日の礼拝では教会で私の卒寿を祝して頂き、十一日には私宅にてささやかな感謝のお茶席を、満子演出にて開かせて頂きました。何十年離れていました袱紗をさばき、お茶筅を振りました。沢山の方々の御手伝いを頂き、私には大変楽しく想い深い一日となりました。

十三日にはみぎわ会職員たちのこれは又素晴らしい演出で、私には竜宮城に招かれた浦島太郎さながらの一日となりました。O・Bの方たちも参加下さり、みぎわ園35才の長い道を沁々ふり返えらせて頂き、感謝と喜びの時を頂きました。

ふりむけば　はるか恵みの　花野道
秋晴れや　茶を点てまつる　卒寿の手

句の道も離れて十年余となり、句にもならない感動でございます。そんなこんな明暗激しい十月を過させて頂きました。

施設も職員たちも共々、十月という一ヶ月を先ずは大事なく過させて頂きました。私も「要介護1」の認定を頂き、今は喜びのあとの疲れにどっぷり陥ち込んでいます。

人生で一番むつかしいと言われます「老い」の時を、皆様と共に一日々々大切に過させて頂かねばと、改めて自らに言い聞かせています。私事のみ申し上げ失礼いたしました。

十一月は無事平穏の日々でありますよう祈りをこめて

みぎわ会
だより
第166号 2004.12. 3発行

十二月

その一

十二月になりました。北国の雪だよりを毎日聞くようになりました。

この辺りは少し遅れましたけれど、いつものように周囲の山々が一気にオレンジ系の紅葉に変わりはじめました。何となく心に安らぎを頂く自然の恵みです。

去る十一月は中越地震の言い様もない破壊情報が来る日も来る日も続き、つい暗く哀しい自分になる日々でした。冷酷無惨な児童殺傷事件も、日本人の心に大きなショックを与えた出来事です。が唯一、二歳の優太君の劇的な救出は、私たちすべてに大きなよろこびの光を与えてくれました。極限状況の中に、数日も生きつづけ生還した幼児の中には、百年も生きぬかせる生命力がひそんでいたのだと、創造主の御力に畏れをも覚えさせて頂く時でありました。天災は仕方ないとも申せますが、せめて訳のわからない人災のない社会になるようにとの思いが、日々つのってまいります。

さて、このみぎわ会では、十一月いっぱいはいつものように平穏にすぎてゆきました。若い職員の四人がパートナーを得て、社会人として出発するという喜びも重なりました。組織疲労という言葉を新聞上で見、ドキッとさせられましたが、みぎわ会は三十五周年という、この世界ではやや長い歴史の中で成長してまいりましたが、来年は又一層、若々しく力ある組織としてしっかり歩んでゆかねば

と願っています。

去る二十八日は、アドベント（待降節）第一聖日となりました。教会では、紫色の大きなローソクが紫のリボンで美しく円型に飾られました。その一本に点火して始められた礼拝では、「クリスマスの意味」について奥深い神の愛が説かれました。この時代の中で信じる神を与えられ、その御愛に依り頼めることは大きな幸せです。

自分を見れば、どこまでも愚かで弱く吾れ乍ら哀しくなる日々ですが、神の御愛を信じ祈りつつの日々が、生きてゆく力になっているのだと思い感謝しています。

十二月十五日には、神原さんが在学している「聖書神学校」の方々が来て下さり、楽しい「クリスマス祝会」を園の皆さんにプレゼントして下さることになっています。つづいて二十五日は「燭火礼拝」、二十八日の「もちつき」と例年の行事を進めてこの年を送り、新しい二〇〇五年を迎えることになります。

この一年間の皆様のご指導ご支援を深く感謝申し上げます。どうぞお変わりなくよろしくお願い申し上げます。

新しい二〇〇五年を皆様が御多幸の年としてお迎え下さいますよう、お祈り申し上げます。

その二

今月はその二として重要な情報をお届けすることにいたしました。

私 松尾周子はみぎわ園創設以来、理事長の重任と共に、嘱託医として松尾医院の名で医療面も兼任

してまいりました。昭和五十三年以後は「みぎわ園診療所」の認可を頂き、法人事業の一部として診療を続けてまいりました。その間、西脇市立病院は協力医療機関として、どんな時にも御世話になってまいりましたし、近隣の医師会の先生方も折々様々の御援助を頂き、一〇〇〇余名の施設利用の方々を、天寿による旅立ちまでのお世話をさせて頂いてまいりました。これは、全職員が一つ心になって当る大切な任務としての成果であり、御家族の御理解の下、思いを尽くして果たせて頂けた重い軌跡でもございます。

先月の「たより」にてご報告いたしましたが、私は九〇歳の高齢になりました。過去十数年前より「皆様に安心して頂ける」を第一条件として、医療問題を考えつづけてまいりましたが、仲々道が開けませんままに今日に至りました。春以来、副理事長 丸野先生のお力添えを頂き、通院可能な「いずみ」の方たち大部分は、火曜日午後を「いずみ診療」に当てて頂き、六月より順調に進めて頂いています。みぎわ園約一三〇名中「主治医」を既にお持ちの方が約四〇名いらっしゃいます。みぎわ園診療所ご利用の方たちを、この度 理事会・丸野先生の御仲介により、芳田地区内の「内橋　裕先生」と「河原　淳先生」にお願いする事となり、両先生の御快諾を頂いています。とりあえず十二月より私の診断上の考えから、お二人の先生に十八名ずつの施設利用者の診療をお願いしています。三月末までには全員がお世話になりますよう、計画し御了承を頂いています。お忙しい御自宅診療に加え、往診による診療となりますし、高齢者診療にはお一人々々に時間がかかります。本当にうれしく感謝申し上げています。そうして私はこの年度にて、医療の任を解いて頂くこととなります。長い間のご理解・

ご協力ありがとうございました。

西脇病院々長先生も一層の御協力を快く御聞き入れ頂いています。他の先生方の御協力も変わりませんので、ご安心くださいませ。

みぎわ会だより

第167号 2005．1．1発行　＜新年号＞

謹賀新年

皆々お揃いにておめでたく御迎年のことと存じます。
本年もお変わりなき御交誼と御指導の程、お願い申し上げます。
昨年は地球レベルの荒捐、不穏、相重なる年となってしまい、オリンピックの輝きも影を落としたかのようでございました。
新しい二〇〇五年が、何とか無事平穏の中で、日々人々が信じ合い愛し合える社会へと転換してまいれますようと希うばかりでございます。
貴家御一同様にも、御健勝　御多幸をお祈り申し上げます。
私共も変りなく誠実に事業に励み、一隅の小さき光でありたく精進を期しております。
何卒よろしくお願い申し上げます

二〇〇五年　元旦

社会福祉法人みぎわ会
理事長　松尾周子
職員一同

みぎわ会
だより
第168号 2005. 2. 1発行

春よ来い

二〇〇五年はいいことを見たり聞いたり出来る年であるようにと、心の底から切ない願いを抱いて迎えました。けれど、あの年末の大津波の悲惨とも恐怖とも言い表せない辛さを持ったまま年は明けました。

今日は早、二月一日ですが、日本各地の大雪と、その大雪が被災間もない中越に重ねての労苦を、雪に馴れない関西方面にも様々な事故の要因となっています。人間の生活がどこからか追いつめられているようなうら哀しい日となりました。

私は今朝は朝日に輝く白雪の庭を見、汚れなく美しい早春の朝を感動的に迎えたのでしたが。

皆様はいかがお過ごしですか。どうぞ、お元気でいらっしゃってください。やがて来るはずの暖かくやさしく慰めに満ちた春を御いっしょに待ちたいと願っています。

みぎわ会の新年もいつものように明るく元気に明けたのですが、一月末より広島方面の特養の「ノロウィルス感染」のニュースが、施設側に大きな手落ちがあったかを匂わす様な表現で、三段抜きに報道されました。全国の特養の大部分は、どんなに心を尽くし力を尽くし、衛生に配慮し、皆様を大切にお世話しているかがわからないのかしらと、一寸声を出したい気持ちでした。全国特養の現状は、わが国の長寿化に伴い利用者の平均年令85歳というのが実態です。抵抗力も回復力も殆んど消耗して

おられます。いろいろの問題が起こっているマスコミの世界は、その本来の使命を逸脱し、人々の目を引き、疑惑心を深めさせる事に努力しているのではと思わせられる時もあります。

「手洗い、食べもの、身辺の清潔に気をつけましょうネ」と朝毎に言い、ティッシュのこと、うがいのことなど話しています中に、一月十七日朝より、職員一名がいわゆる「胃腸風邪」の診断で二日欠勤し、十八日より私が開業していた頃よく体験した、乳幼児の「吐写を伴う感胃症状」を起こした方が二人、三人と毎日のように見えはじめました。職員と利用者とが殆んど平行状に発症する数日がつづき、十九日には丸野先生とも御相談し、保健所にも届け出ました。この症状が「ノロウィルス」による感染症と学会で決められたのは二〇〇二年ですが、ウィルスの検出はどうすればよいかわかりませんでした。

二十四日保健所より来園下さった方（三名）の御意見もあり、先ず食中毒の線より検索しました。6種目の食中毒起因菌を検査に出しました。その間にも毎日二、三人ずつ位の発症がありましたが、幸いにも全員が二、三日で全快して下さいました。乳幼児を持つ職員もありますから、病原はどこからでも入ってくるのです。二十七日検査の結果、「食中毒」の線は否定されました。一月二十七日、やっと発症者0の一日がありました。地域配食を中止したのが二十五日、デイサービスは二十六日より一週間、売店・ラウンジも中止し、二十九日三日目に発症した三人の方の検体で「ノロウィルス」の検査を依頼しました。この間の発症者は、利用者27名・職員25名です。発症者の検体の結果、三名共⊕と出たのは三十日です。罹症者は全員回復されました。職員には症状消失後も5日間の出勤停止を指

示しています。「ウィルス」という電子顕微鏡でも発見が難しいと言われる微生物の中「ノロ」は特に小さいと言う意味だそうです。強力ではないのですが、個体の抵抗力、初期手当が大切です。二月一日は職員・利用者共発症0と聞きました。嵐はこのまま止んでくれるよう祈りつつ願っています。この度の感染症の経過と処置・対応は、きちんと記録に残し、保健所及び県出張所、施設間にもオープンに報告いたしましたし、御指導も受けました。住居部の清掃は業者に委託しました。有効な予防消毒剤は「次亜塩素酸ナトリウム」0.5％溶液とされています。但し手や衣服への噴霧に限ります。—（市販あるようです。）治療方針としましては、先ず脱水による脱力を防ぐことに重点を置きました。直接効果はありませんが、潜在的に肺炎など高齢者に多い潜在病原菌の跋扈を圧えるために、三七・五℃以上の発熱のある方には抗生剤を点滴に加え、V.C・V.Bなど少しでも体力を活性化する薬剤を十分使用しましたことも、無事皆様のこのツナミから守れた一因であると考えています。

御面会の皆様、御家族様方にも、よき御理解と御協力を頂きたいとありのままを公表いたしました。面会の部屋も別にしようとか、面会者の皆様に滅菌液での手洗い、御着衣等にも撒布することも考えました。が管理部の意見もあり、もう少し様子を見た上でとなりました。何卒御協力お願いいたします。

日に日に春が近づいています。深い雪の下に芽立ちを備えている緑があるはずです。

庭の梅には蕾が沢山つきました。春は静かに出番を待っています。珍しくきびしい寒さですけれど、必ず訪れる春を待ちましょう。

皆様の御健勝を祈りつつ。

みぎわ会
だより
第169号 2005. 3. 7発行

みぎわ便り

さむいさむい二月でしたが、皆様お元気にお過ごしでしたでしょうか。きっと暖かい春がきますよと、くり返した先月でした。

残念ながら私は、二月十六日より入院患者として病院でお世話になっています。ここにもいろいろ新しい体験があります。一人ベッド上で長い人生をふり返り楽しんでいます。一番大きなことは忘れていたり、余り気にしていなかった小さな自らの足跡を思い出し、一つ一つ神様に感謝したり、殊に心よりおわびしたりさせて頂いていることです。

平安に養生させて頂いています。六十年に余る診療からも解放して頂きました。皆様の診療をお引き受け頂きました先生方に、深く感謝申し上げます。

皆様のこと、利用者も職員にも神様の御導き・御恵みがありますよう毎日お祈りしています。

三月一日

その二　それから

三月二日、急遽退院を許され帰宅いたしました。入院は僅か十八日間でしたのに、園では数名の方が亡くなっていらっしゃいました。ここ一、二ヶ月殆んど変化のない日が続いていましたので、一入深い思いにさせられています。

退院後はわが家の自分のベッドで一週間近く唯々何もしないで休養させて頂きますと、何となく体力

も少しとりもどし、一度皆様に挨拶したい願いを持って今日朝礼に出席させて頂きました。「医療」と「介護」のちがい、「病院」と「ホーム」のちがいなど、沢山のことを体験し考えたのですが、まだくわしく対比・分析は出来ません。眼の方が十分回復せず、書くことはもとより、活字への飢えさえも考えられない有様です。信じて委ねる神様を与えられている事を感謝いたしています。

皆様方からお見舞やお励ましを沢山ありがとうございました。

「奈良の水取り」が終れば暖かくなるでしょう。

昨日は庭の梅の花を側まで車椅子を押して見せてもらい、新しい春にふれさせてもらいました。

来月は新年度となります。若返ったみぎわ園のために皆様の御声援と御指導を祈りつつ。

二〇〇五年六月十四日

松尾周子　召天

みぎわ会
だより
第173号 2005. 7. 1発行

召天

みぎわ園園長　芹生　哲也

過ぐる六月十四日午後九時二十分、みぎわ会理事長松尾周子は主のみ許に召されました。まずは生前のご厚情を関係各位の皆様に深く深くお礼申し上げます。

十六日に前夜式、十七日に葬儀式を法人葬で執り行いました。式は生前から理事長がお願いしておりましたみぎわ教会（元神戸聖愛教会）新里牧師の元、キリスト教葬儀社と旧職員も含め全ての役職員の協力により無事終えることが出来ました。お忙しい中ご列席賜わりました多くの皆様には心より感謝申し上げます。また、多くのご弔電を頂きまして、ありがとうございました。そして、ご案内が不十分でご列席いただけなかった皆様には深くお詫び申し上げます。後の頁に式の様子を簡単ではございますが、掲載させて頂きます。

松尾理事長は九十年の人生を駆け抜けるようにして召天いたしましたが、私から見ると正に天寿を全うされ天に召されたという思いが致します。思い残すことは全くなかったとは言えないかも知れませんが、この事業に全てを掛けて多くのことを成し遂げてきた人生は達成感と充実感で満ちていたのではないかと思います。

失礼ながら、以下私の個人的な理事長への想いを少し述べさせて頂きます。

『松尾先生のみぎわ園への思いは何よりも、誰よりも強く、大きなものでした。それは人生を掛けて、

捧げられたものであり、その思いは　神様へのものであったからだと思います。まさに「奉仕と隣人愛」を実践され、お年寄りを自分のことのように愛され、常に神様に感謝された先生は、「神と人に仕える人」そのものであったと思います。三十六年の歳月に九百人近いお年寄りをみぎわ園から天国に送られたこと、感謝の中に天寿を全うされるお手伝いを第一線でされたこと、私は側でいつも感動していました。松尾先生は常に私たちの憧れであり誇りでした。

しかし、先生の人生九十年は私には想像もつかないほど多くの悲しみや苦しみもあったと思います。「リーダーたるものは孤独なもの、誰にも言えない苦しみや痛みに耐える強さが必要なのよ」とよく話して下さいました。先生が三十六年前に創められ、多くの方々のお力と支えとによって築いてこられたみぎわ園をこれからも変ることなく、守っていくことが先生の願いであり、私たち職員の使命であると思っています。そして、時代が変わっても先生がいつもおっしゃっていた、温かい食事と、清潔なベッド、優しい介護があるみぎわ園であり続けたいと思います。また、ウォームハートとクリーンヘッドのある職員集団がひとつとなってみぎわブランドを守って行きたいと思います。本当にお疲れ様でした。神様の御腕の中で安らかにお眠りください。』

最後になりましたが、皆様のご健康、ご多幸を心よりお祈りいたします。今後は丸野理事長代理のもと、みぎわ会の名を汚さないよう精一杯努めてまいります。どうぞ、変わらぬご指導ご鞭撻を下さいますようお願い申し上げます。

七月一日

みぎわ会
だより
第174号 2005. 8. 1発行

まごころ

みぎわ会監事　藤井　晶浩

暑い毎日が続きます。私この度、みぎわ会だよりに寄稿させて頂くことになりました。この度は、思いもかけず松尾周子理事長の急逝には何と申し上げてよいのか言葉もございません。あの元気だったお方が、なくなられたとは夢の様です。皆んなに慕われ、理事長ならではの采配がこのみぎわ会をここまで立派に仕上げてこられたご功績は、周知の所でございます。今はなき故松尾周子理事長のご冥福を心からお祈り申し上げたいと存じます。

さて、このみぎわ会も設立されてから早くも三十七年余の歳月がすぎて参りました。県下でもいち早く社会福祉法人の施設としてこの地に根づき、故松尾理事長の献身的努力と、この施設に従事された職員の皆さんのたゆまぬ努力が今日のみぎわ会の現実であると思います。北播地域はもちろん、県下でも福祉施設の模範として立派に活躍されています。故松尾理事長のお人柄が、職員の皆んなに浸透し、入居されている方々への温かさ、思いやりが伝わっているのです。

入居されているお年寄りには、認知症をはじめ種々障害をお持ちの方々多勢居られるのです。今この方々はどの様に思って暮らしておられるのか、それを思う時、なんとか一日でも永く、たのしい心のやすまる生活をさせてあげたい、して頂きたいと願うものです。

介護されている職員の皆さん、この会にお勤めになっている皆さん、自分達一人一人幼い時代を思

い浮かべて下さい。背負って寝かせてくれたお母さん、畦道でトンボを追っかけ遊んでくれたお父さん、今ここに居られるお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、皆幼な児の自分達を育ててくれた方々ばかりです。

今度はこの僕が、私が負ぶってあげる、支えて上げる、その心の恩返しが出来る心をもつ事なんです。きっときっと皆さんに伝わって行くのです。

こうしたまごころがみぎわ園をよりよく、前途により美しく輝いて行く事を信じます。

お元気な方々の七夕まつり・夏まつり・運動会・小旅行とたくさんのたのしい会もございます。いずみ寮・ハンナ館の入居されている皆さんも、これ又お花見・園芸・絵画の会・音楽会等たのしい催しも数々ございます。

これからの「みぎわ会」も役職員一丸となって、入居されている皆さんの暮らしが、より一層快適なものになりますようにお願いいたします。入居されている皆さま方のご多幸と、関係役職員の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。

みぎわ会
だより
第175号 2005. 9. 1発行

九月　季節（思うまま）

いずみ寮寮長　津瀬美智子

『あなた方のために天から雨を降らせ　実りの季節を与え、食物と喜びとであなた方の心を満たす』

使徒行伝　十四章十七節

過ぎし八月は暑さばかりに気をとられ、挨拶も「今日は暑いですね」「毎日暑いですね」…などと、つい口から出てしまいました。

ほんとうに、暑さばかりに気をとられている間に、ふと気がつくと、田では稲穂が実りの準備をしっかりとしていました。

気付かぬうちにゆっくりと、しかし確実に季節の移ろいの営みを司り、すべてを大きな懐の中で育んでくださる神様に、畏敬の念をおぼえます。

思えば、四季の移ろいのみならず、人生の歩みすら自分の想いにはよらず、すべて神の手の内で運ばれて行くものですね。

このみぎわ会の職員として導かれたことを感謝しつつ、みぎわ会に身を寄せておられる多くの利用者の方々とのお交わりを、一日一日宝物のように紡ぎながら働かせて頂いております。

そして日々、利用者の方々をお助けしているようで、その実、助けられ、教えられ、潤されていることの如何に多いことでしょう。

『人を潤すものは自分も潤される』　箴言十一章二十五節

九十歳にして天に召された松尾先生は、その年齢まで現役で仕事をされ、利用者と毎日係わりを持たれました。周りの人々を潤しつつ、先生自身も潤されながら生涯現役生活を送られたのだと思います。松尾先生の老人福祉に対する一途な志を、私たちも自分の志として受け継いでいきたいと切に願うものです。

実りの季節を目の前にし、自分自身の心にも〝みのり〟の備えの必要を想わされております。

豊かな秋の実りが、みなさまを潤し、夏の疲れが癒されますようにと祈りつつ…。

みぎわ会
だより
第176号 2005.10. 1発行

理事長就任にあたって

理事長　丸野　貞彦

長く暑かった夏もやっと過ぎ、朝夕はめっきり秋めいてまいりました。皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。

私、先日九月二十二日の役員会で理事、評議員皆様のご推挙により理事長に選ばれました。光栄ではありますが一抹の不安もございます。しかし、故松尾周子先生が築かれたこの「みぎわ村」を立派に育てつづける決意でございます。幸いにも副理事長には藤井良己氏が、理事長職務代理者に南久雄先生が快くお引き受け下さいまして、心強い限りでございます。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

どんな企業も個々の人間も集団も、永久に栄えつづけるものではありません。「みぎわ会」も例外ではないでしょう。組織も三十余歳ともなるとマンネリ化する危険があります。これが高じて、組織疲労に陥らないよう気をつけなければなりません。鋼鉄でさえ金属疲労に陥って破損することもあるのですから。

大役をお受けしたものの、こんな不安の黒い雲が私の心をよぎりました。しかし次の日、介護の現場で忙しく明るく仕事に励んでいる職員の皆さんを見て、この不安の雲は消しとびました。

「今日是好日」毎日皆様と共に新しい朝を迎えたいものです。

みぎわ会
だより
第177号 2005.11. 1発行

おたあさま

事務長　臼井好和

いずみ寮の集会室の壁には、石村正太郎画伯によって描かれた「おたあさま」の、100号程の大きさの絵がかけられています。

おたあは洗礼名をジュリアといい、豊臣秀吉による朝鮮出兵により連れて来られた朝鮮貴族の娘であると伝えられています。「おたあ」という名前は、自分を捕えた武士に名前を聞かれたおりに、「オッタ！」（ない！）と答えたことから、名付けられたと言われています。

キリシタン大名の小西行長に引き取られ、行長の妻ジェスタの庇護のもと、大切に育てられました。小西夫妻に感化され、ご自分も洗礼を受け、信仰の道に入って行かれました。小西行長が関ヶ原の戦いに敗れて、処刑された後は、駿府城に迎えられて、徳川家康に侍女として仕えられました。家康はジュリアの美貌と才知を愛し側室にしようとしましたが、ジュリアは神の教えに背くと拒みとおされました。キリスト教禁令にも棄教を拒み、伊豆大島から新島、さらには神津島へと、罪なくして三度の流刑を受けられました。どの地においても熱心に信仰生活を守り、見捨てられた弱者や病人の保護、自暴自棄になった流人への感化など、島民の日常生活に献身的に尽くしたとされています。そして神津島で、その数奇な人生を閉じられました。

華やかな生活と楽な人生を選ぶ機会は何度もあったにもかかわらず、信仰を守るために、茨の道

を選ばれました。絵には、絶海の孤島の海岸に佇まれ、遥か遠くを望まれている姿が描かれています。その表情はとても晴々としています。信仰を貫くことができたことへの感謝、そして自分を必要としている所に神様がお使わしになるのを受け入れる強い決意とその喜びが伝わってくるように思います。

みぎわ園の事務所にも、故松尾理事長の写真が飾られております。穏やかに微笑んでおられるお顔を見るたびに、信仰心に支えられた故松尾先生の強い行動力と底抜けの明るさ、公私の区分を厳格に守られた強い規範性と優しさを思い出します。そして、先生に使命を与えられ、援助を惜しまれなかった方の偉大さを感じざるを得ません。

「奉仕と隣人愛」というみぎわ会の基本理念を守り、社会福祉法人が持つ社会的責任を果たして行くことは、松尾先生の老人福祉への志を我が志として引き継ぐことでもあると考えております。

丸野先生が理事長に就任され、みぎわ会も新しい船出を迎えることとなりました。

皆様の変わらぬご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

みぎわ会
だより
第179号 2006. 2. 1発行

小さな一歩

みぎわ会理事　矢持美智子

芽吹きには早い樹々の梢が早春の兆しを含んで銀色に光っている。庭の水仙、チューリップが凍りついた土の下から顔を出している。ああ！もうそこまで春が来ているんだなあと温かいものがこみ上げてくる。

神様はこの自然界を通しても愛を与え続けてくださる。このすばらしいみぎわの里にも限りなく神様の深い愛が注がれている。豊かで自然の美しいこの施設は大きな夢の実現を可能にする力がある。素敵なライフスタイルで新しいこの一年を皆様と共に前進できたらと切に祈っております。

私事になりますが、幸いにもこの年になるまで病気もせず健康には自信を持っていました。ところが、たまたま興味半分に血液の検査をしたところ血糖値がかなり高い結果が出て私自身は思ってもみない事で家の者の心配よりか「どうして」と半信半疑でした。

但し年齢的にも生活習慣においても不思議でない事に気付き、自分の健康に対するうぬぼれが根こそぎ砕かれました。

振り返れば、ここ数十年余、近辺の所用さへ車を足がわりに利用し歩くことの何と少ないことだったか・・・日々の雑用でバタバタ家中を動き廻っていることで十分な運動をしていると自己流に解釈していました。この度はっきりと糖尿があるという事で私は一歩を踏み出しました。小さな一歩がと

ても大きな幸せに思える今日この頃なのです。

車から歩いている人の姿をしばしば見ていた私は、あの人達「暇そうでいいなあ」との思いでしかありませんでした。歩きながら水の流れに目を止める、枯草の中にも緑の雑草が生きづいている。身近な所にもきらきらする感動がたくさんある。

神様のなさることには決して無駄な事はなく、なさることはその時によって美しいと・・・あふれる感謝で満たされる。

歩きながらふと空を見上げる。寒々とした冬空、果てしなく澄みきった青い空、この天国の彼方から松尾周子先生の微笑みが浮かんでくる。そうだ！みぎわ園を信頼して集まってくださる多くの方々に心からなる笑顔でお迎えして松尾先生の想いをしっかり受け止め信仰を確実に伝えていかなければならない思いにかられました。

聖句「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにもあなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」

ヨシュア記一章九節

皆々様のますますのご健康を心よりお祈り申し上げます。

みぎわ会
だより
第182号 2006. 5. 1発行

いきいき五月

評議員・第三者委員　丸山智枝子

殊のほかきびしかった今年の寒さの中で、命絶えたかに見えた樹木や草花が命を育み生き生きと芽吹き、山笑う春、やがて淡い緑から濃い緑へと柔らかい新緑が目にも鮮やかな五月です。心地よい風に誘われて鯉のぼりも勢いよく泳ぎ始めました。

美しく晴れ渡ったある日、友人宅と森林浴散策に出かけました。

うぐいすの声に迎えられ、若い緑の木々の中に鮮やかなピンクの彩りを添えるコバノミツバツツジ、今を盛りと咲き誇っている八重桜、足許には可憐なチゴユリ等々、そして樹木の間から洩れる透明な陽射しに心いやされ、日常の悲しい事やつらい事も忘れ、慰められ新しい力を与えられた五月晴れの一日でした。

五月は又、みぎわ会誕生の月でもあります。

前日まで降り続いていた雨もすっかりあがり、爽やかな青空がこの日を祝福するかの様でした。三七年前の五月二六日、県下で民間特養施設第一号としてみぎわ園が白亜の姿を現し、その事業は始まりました。

昨年には創設者である松尾(前)理事長が召天され、深い悲しみの年でしたが、その理念は変わる事なく脈々と受け継がれ、大きく成長したみぎわ村では安心と安全の中で、多くの方が永い歩みの中

での様々な重荷をおろし疲れた心や身体を癒しておられます。そのために職員は目まぐるしく変化する老人福祉制度を適格に把握し、増々厳しくなる道の中でも原点を忘れる事なく、豊かな良質なサービスを提供するために品性を高め、あたたかい心と冷静な判断力で夫々の、様々なニーズに応えられる様研鑽をつみ重ねつつ、ご利用者の不安が少しでも軽くなる様サポートし、今日を健やかに生き生きと過ごしたいものです。

困難に直面したときこそ「ここから始まるのだ」ととらえる賢明さが必要です。発すべき問いは「なぜ、こうなのか」ではなく「さて、どうするか」です。足は「いま」という地点をしっかりと踏みしめ、目はずっと前方を見つめるのです。日野原重明先生の書の中の一節です。かみ締めたい言葉だと思います。

「風薫り、若葉が目にしみる頃」とあいさつによく使われる言葉です。爽やかな五月の日々を生き生きと過ごし、梅雨、酷暑と続くであろうこれからの時を乗り切るための力を貯え、今日生かされている事を感謝し、明日の朝の訪れを希望を持って待ちたいとの祈りをこめて。

みぎわ会
だより
第184号 2006. 7. 1発行

歳々年々人同じからず

みぎわ教会牧師　新里昌平

今年も梅雨の大雨で、各地に大きな被害が報じられています。皆様の所は如何でしょうか。

お蔭様で、みぎわの里は毎年さしたる被害もなく守られておりますこと、感謝に堪えません。

この一年、教会裏手の松尾先生のお庭に咲く花の、四季の移ろいを眺めるたびに、去年の今頃は、との思いに駆られておりました。殊にこの頃は、「歳々年々人同非ず」との思いに耽る日々を過ごしておりました。早くもあの日から一年が経ち、六月一七日、内外から多くの方々にお集まり頂き、第一部・召天一年記念式（礼拝）、第二部・愛餐会（追憶のひと時）、この二つを繋ぐものとして、「足跡」（映像による故人の生涯と事業）が上映され、大そう感銘深く拝見しました。

また、皆様の思いのこもった記念誌は、内外の方々、園利用者、職員並びに職員ＯＢの方々の短い原稿字数にもかかわらず、そこには先生の幅広い方々との交わり、そして今更のように、その見識の高さと情熱に驚嘆いたしました。

故人の「足跡」を見ておりまして、ふと旧約聖書のアダムの子孫たちの名を思い出したのです。

長寿揃いのイスラエルの遠い先祖たちの名前の中に、エノクと云う、他の先祖と比べて最も寿命が

短く、あまりパッとしない人物の名前があります。

しかし彼が他の先祖と異なっているのは、命の量でなく、質的なものだ、と記されている点です。エノクの生涯は、一路神と共に歩んだのです。その彼を、「神が召されたので彼はいなくなった」と記しています。この地上における人生の足跡には、様々なものがあります。ただ巨大なもの、力強さに満ちたもの、浅いもの、深いもの、一直線なもの、または、千鳥足で同じ所をぐるぐる回っているだけで進まないもの。

しかし、「エノクは神と共に歩んだ」との言葉を聞く時、私の心に、ふと、エノクと先生が重なり合うのは、その足跡の一途さ、ひたむきさではないかと思うのです。

「足跡」は一昨年、先生の卒寿を記念して催された祝会で、職員皆さんの自主制作として上映されたものであると聞いています。又、当日、中央祭壇を飾った美事な花は、松尾満子夫人の手によるものでした。

みぎわ会だより
第185号 2006. 8. 1発行

「人間の尊厳」について

みぎわ会監事　藤本　理一

昭和の終わりに介護職員であった小笠原節代さんが「たった2年間ではあったが、切なく、おかしく、嬉しい日々の連続でした」と松尾先生の記念誌に小稿を寄せていらっしゃいます。お一人お一人、様々な心身、年齢によって幾ら尽くしても理解してもらえぬ方、相手をしているうちぎこちない所作で一生懸命に応えようとする、パーティーか何か憩いのひととき、てんでバラバラにでもその笑いの中に溶け込んで、さんざめく人々と共にある喜び、仕甲斐を見出したときの嬉しさ、小笠原さんのそんな想いが伝わって……職員の皆さんの心象と、入所者ひとりひとりへの対応の難しさを思いました。

一九九六・九・五のみぎわ会だよりに松尾先生の「ここへ来られている皆様のそれぞれの道を思います。そのこまごま細々とした内容は知るよしもないが、・・・・ともかく・・よく・・・・・・・・・いらっしゃいました。・・・どうぞ・ご・・・・ゆるりと・・・・なさって・・・・ください。」（傍点は筆者）の一文があります。

ここにはどんないきさつであれ、ご不自由であれ、来所された方々をご自分と同等の立場で、然もお客様を迎える心遣いが溢れてございます。どなたであれ入最初にお逢いした瞬間、それをほぐして差上げる、それからは小笠原さんのような職員が奉仕する、これがみぎわ園の伝統となったのであり

ましょう。

お一人お一人の今日までの環境はおなじではない。同じであったのはわらべ唄に代表される幼少年期だけで、楽しかったり、おかしかったり、嬉しかったりはそんな群れの中だけであったような気がするし、後になって考えれば、子供心に相手の自尊心を傷つけまいとする配慮があったに違いない。私はそう思います。

再び還ることはない！

やがて就職し、夫となり、妻といわれて一家を支え、社会に貢献する。それを義務と呼ぶのかも知れないが、それを果たした人だけが持つ“こころ”が自尊心であろう。入所者の大部分が「義務を了えた」方々である。身についた自尊心は全く失われていない。たとえ動作、表現がご不自由であろうとも、その人の人格は尊重されなければならない。それを思いやりとよんでもいい。

独りぼっちで孤独にならぬよう、幼少期のような群れをつくって欲しいとみんな願っている筈、緊張を解きほぐしてくれるのは、隣の人だったり、やがて身の上話や、愚痴を聞いてくれる友人となる。支え、相談に乗ってくれるのが介護士、看護師たち、共に暮らす相棒たち、同じ園の中で円をつくって、さんざめく、それが食欲を増進させ、健康を維持する。想えばここへ入られたとき、「おつかれさまでした。どうぞごゆっくり」とおっしゃった松尾先生は相手の自尊心を認め、ご自分と対等の立場で接しられた。

歴史と伝統、特に礼儀を強調された土壌は消えないだろうし、故先生のご遺言もだし難く、新理事

長に就任された丸野先生はキリスト教の造詣も深く、鬼手佛心、文化人でもあり、山男（大学の山岳部長）で、統率力あり、加えてご性格は底抜けに明るく素直で、実にやさしいお医者様であります。

松尾周子　召天一年記念式

丸野理事長

新里牧師

來住西脇市長

小笠原先生

石井先生とみぎわ会職員

みぎわ会聖歌隊

愛餐会

社会福祉法人みぎわ会

前理事長　松尾周子　召天一年記念式次第

みぎわ会新理事長紹介　みぎわ園々長　芹生　哲也
ご挨拶　みぎわ会新理事長　丸野　貞彦

記念式　みぎわ園3階講堂　11時より

		司式	（神学生）神原かよ子
		奏楽	株式会社クロダオルガン神戸営業所 所長　所　俊夫
前奏		— 黙　祷 —	
賛美歌	90番（園々歌）		一同
聖書朗読	申命記、ピリピ人への手紙		司式者
祈祷		西脇みぎわ教会代表役員 みぎわ会評議員	丸山　智枝子
故人略歴		みぎわ園副園長	臼井　いさみ
奉唱	“果てしも知れぬ　うき世の海の”		みぎわ会聖歌隊
式辞	「悲しむ日の終わり」	西脇みぎわ教会牧師	新里　昌平
賛美歌	213番		一同
追憶		西脇市長	來住　壽一
		東京有隣会理事長	石井　薫
		中部学院大学教授	小笠原　祐次
賛美歌	167番 1.3.5　われをも救いし		一同
終祷		西脇教会牧師	中川　利行
後奏		— 黙　祷 —	
	「足跡」（映像による故人の生涯と事業）		
		いずみ寮々長	津瀬　美智子

＝ 会　場　移　動 ＝

愛餐会　みぎわ園3階デイルーム　13時より

		進行　みぎわ園々長	芹生　哲也
開会の挨拶		みぎわ会副理事長	藤井　良己
食前の祈り		いずみ寮々長	津瀬　美智子
		— 交わりのひと時 —	
お客様紹介	（各テーブルごとに）	ハンナ館々長	横山　猛
合掌	“われ聞けり彼方には”		
追憶の言葉		兵庫県社会福祉協議会会長	辻　寛
		泉ヶ丘福祉会理事長	赤井　和枝
		元篠山教会牧師	星野　久雄
合掌	賛美歌495番　1.4		
閉会の挨拶		みぎわ会理事	矢持　美智子

― 礼拝説教 ―

「悲しむ日の終わり」

西脇みぎわ教会牧師　新里　昌平

予てよりご案内を差し上げておりました、松尾周子前理事長の召天一年を記念いたしまして、その生涯の足跡を偲びつつ、記念式並びに午餐会のひと時を、皆様と共に致したく存じておりました。

このような時にあたって、しきりに思い起こされるのは、旧約聖書の偉大な預言者であり指導者でありました、モーセの生涯、とりわけ、その最後の姿であります。故人愛唱の賛美歌「主よ水先の標べし給え」、故人もその40年の旅にあたって、度々このような言葉で、祈られたのでありましょう。

かつて流浪の民であったイスラエルは、今や40年の荒野の旅を終えようとしております。それが、この申命記の最終章34章に記されている所であります。荒野の旅は40年という時を長さだけでなく、かつての奴隷の民が今や神の民として、自由と人間としての尊厳、真の命を取り戻す、「栄光への脱出」であったのであります。神はモーセをこの旅の終わりに、ピスガの山の頂きに登らせました。そこでモーセはやがてイスラエルが入っていく所の、約束の地を見渡すことになりました。思えばそれは、モーセの全生涯を貫いて、その心の中に描き続けてきた幻ともいうべきものでありました。幻は今や現実となり、彼の目の前に約束の地が広がっておりました。この情景こそは、彼が片時も忘れた

事のないものであり、砂漠の旅の渇きの苦しさに耐えながら、その心に描き続けてきたものでありました。しかし、神はモーセがその約束の地に入って行く事を許されなかったのであります。

神はモーセを約束の地の前に留め置く事によって、新しい時代の新しいご計画を備えておられたのであります。かくして、波乱に満ちたモーセの生涯は閉じられました。神は彼の亡骸(なきがら)を、すべての人の目から隠された、とあります。偉大な人物の墓というものは、いつの世も人々に飾り立てられ尊敬のあまりこれを偶像のようにする、という愚かしさを私たちもしばしば身近に見るところであります。モーセもまた、神のみ業を担ったひとりの僕(しもべ)に過ぎないという事を示す為に、神はこれを隠されたのでありましょう。申命記の終わりの部分で「イスラエルに、この後モーセのような預言者は起こらなかった」と記されております。

彼は神の人であり、霊に満ち、力のあるまことに偉大な指導者でありました。もちろんその偉大さは、神が選び、神に用いられた偉大さでありますが、それもやはり、人間としてきわめて優れた人物であります。

優れた人物、立派な指導者である条件には、さまざまなことが挙げられるでありましょう。優れた見通しを持つこと、説得力のある言葉を語る、卓越した論理性、そして実行力であります。しかしこれらに加えてモーセに見落としてならない事は、彼がヨシュアという優れた後継者を立てたことにあります。聖書はその事を暗に私たちに指摘しているのであります。

一代で優れた事業を興(おこ)す人は少なからずいらっしゃいます。しかしさらに偉大な事は、後継者が

引き継いだところの業を、さらに発展させることにあるのです。一代で立派な仕事を残すに勝って、次の世代がしっかりとその事業を受け止めていくことが、どれだけ誉れあることでしょうか。しかし同時にそれはいかに困難な事でありましょうか。それは私たちの人生、家庭、そして教会、福祉事業においても同じことが言えるのであります。

往々にしてわが国のクリスチャンは、教会の栄えよりも自分がどれだけ信仰的に深められ、恵まれてきたかということだけに心を用いてきたように思います。「信仰の個人主義化」というものが、見られるのです。今日を栄えるに勝って、明日、次の世代がどれだけ私たちを乗り越えてゆけるか、そこに私たちの誉れがあると言う事を考えなければならないと思います。明日の栄え、その為に、今日生きる私たちの、困難を乗り越える生き方があるのだと思うのです。

モーセは死にあたって、優れた後継者をイスラエルの民に遺して、彼の信仰者としての雄々(おお)しい生涯は、こうして幕を閉じたのでありました。「モーセが死んだとき、120歳であったが、目はかすまず、気力は衰えていなかった。イスラエルの人々はモアブの平野で30日の間モーセの為に泣いた。しかしモーセの為に泣いた悲しみの日はついに終わった」(申命記34章7～8)。

モーセの為に泣き悲しむ日はついに終わった。申命記の中で最も感動的な、最も偉大な、そして、力強い言葉がここに記されております。こうしてイスラエルは悲しみから立ち上がり、新しい歴史形成を目指して、再び信仰の歩みを開始した、というのであります。

亡き人を思い、嘆き悲しむことが供養になるという考え方が、私たちの周りに多く見られます。

しかしそれは、間違いであります。少なくとも、その人生を使命と共に生きた人にとっては、そのように泣き悲しむことが供養になるという考え方を遺された人々がすることは、不本意であると言わなければならないでしょう。松尾先生がお書きになった、『私の歩んだ道』によりますと、あの一老女との出会いは確か昭和40年ごろであったと思われます。あの時から先生の荒野の旅は始まったのではなかったでしょうか。きょう、ここにお集まりの皆様も大なり小なり、その40年の旅の一環に関わって共に歩まれた方々でありましょう。先生もまた、これからの事業の発展、更に心に懸かる幾つかの事柄も、おありになったことでしょう。入院なさる少し前に頂いたお手紙の中に、「もう少しの間生きていたい、私のわがままでしょうか。」と記しておられました。しかし先生の40年の旅は終わりを告げました。ここから新しい40年の時代が始まります。私たちが敬愛する方の姿を振り返って思い出に浸り、ヨルダン川の岸辺に座り込んでいるようであってはならないと思うのです。私たちはヨルダン川を渡るのです。新しい時代に向って歩み出す時、行く手にはさまざまな戸惑いや、困難も待ち受けていることでありましょう。しかし、先達は何もないところからモーセのように、神の示しを受けて一人の人の命と尊厳と、そこに込められている神の愛を、老人福祉という形で表していかれたのであります。そのご苦労に比べれば、今日のみぎわ園は、これだけの多くの働き人に支えられておりますし、これだけ多くのみぎわ園を想う方々の祈りに支えられていることであります。その思いが一つに集められるならば、先生の意思は果たされていくでありましょう。

悲しむ日の終わり、そこに来るべき新しい40年の出発があり、今日私たちが受け継いでいくべきも

のがここにあるのだと思います。ヨシュアに語った主の言葉、「私がモーセと共にいたようにあなたと共におるであろう。私はあなたを見放すことも見捨てることもしない、強くまた雄々しくあれ」との言葉は、みぎわ園全体の励ましであり、約束であります。新しい世代を担う園長はじめ役員の方々を覚えてお支え頂きたいと心から願うものであります。

感謝の祈りを捧げましょう。

とこしえの主なる神よ、今私たちの先を歩んでゆかれたあなたの僕であり、私たちの敬愛する先生を想うとき、「私たちはこのように多くの証人に、雲のように囲まれている」とのみ声を聞く思いがいたします。いつの時代にも信仰なく望みなく愛なき者の如き、私たちの内に信仰と希望と愛を呼び起こし、み業のために用いてくださるあなたの奇しき御導きを深く心に刻みました。つぶやく民を40年の間、忍耐を持って導かれたその御心が、今日も変わらずに私たちの上に共にあることを信じます。私たちがこの地上の馳せ場を走り終えるとき、後に続く世代が「嘆き悲しむ日の終わり」を心に定め、力強く、希望と共に立ち上がっていく恵みを見させて下さい。

これからの新しい日々も、みぎわの里の年老いたすべての方々を覚えてください。働き人をお支えください。ここに集うすべての方々の上に、主の慰めと平安が豊かにありますように。主のみ名によって願い祈ります。アーメン。

― 記念式 ―

松尾周子先生をお偲びして

西脇市長　来住　壽一

松尾周子先生と初めてお会いしたのは、いつだったかはっきりと覚えておりません。二十数年前だったようにも思えます。役所で部長会の世話をしていた頃でした、松尾先生にトップセミナーの講師をお願いにあがった時初めてお話をさせていただきました。松尾先生のお姿は、それまでにも少し離れた所から何度もお見かけしておりました。いつも背筋をすっと伸ばしてスマートなお方でした。お顔はいつも笑っておられました。清潔で気品を感じていました。緊張しながらトップセミナーの講師をお願いする私に「本当に私でいいの」とおっしゃりながら快く引き受けて下さった時、気さくな方なのだなと思いました。

ちょうどみぎわ園を建て替えられる時、私は福祉部長に就任した時で、みぎわ会の評議員を仰せつかりました。理事会、評議員会の合同の会議で福祉部長とはいえ、就任間近の素人の私にも気を使っていただきよく声をかけていただきました。「あなたは大変ですねと言ってくれるけど、私は皆さんのお世話をしているだけなのよ、あなたも福祉の仕事に携われる事をありがたく思い、誇りを持たないとだめよ」と、いまでもそんな先生のお声が聞こえてくる様な気がいたします。

私だけではなく母も大変お世話になりました。みぎわ園開設当初から理事でいらっしゃった、岡澤薫郎さん、藤原一郎さんから声が掛かったのだろうと思いますが、母は理事をさせていただきました。母は洋裁をしておりましたのでいずみ寮の方と洋裁を楽しむ事に専念をし、理事としての役割を果たしたのかどうかは私には疑問であります。それでも理事会には必ず出席をし、帰ってくると「松尾先生ほど偉い人はどこ捜してもおってない」いつもそう言っておりました。

昭和43年12月に県下初めての社会福祉法人みぎわ会を設立され、翌44年5月に特別養護老人ホームを開設されたのは長年の患者であった身寄りのない一人の老女との関わりで、医者としての限界をお感じになり老人福祉施設の開設を決断されたと伺っております。それ以後、みぎわ園診療所、軽費老人ホームいずみ寮、デイサービスセンターナオミ館を次々と開設され、みぎわ会の歩みは常にその時代の先駆けとなって高齢社会の在り方を追い求められて来られました。これも松尾先生の先導的なお考えがあってこその輝かしい歩みであろうと思います。そして生涯を老人福祉の向上に捧げられました。

日本は世界一の長寿国となりました。少子高齢化が急速に進み、同時に核家族化が進み、地域の絆が飛躍化していっておる中、私たちは真に豊かな高齢社会を築いていかなければなりません。先生のご遺徳を偲び、先生のやさしいお姿を思い出しながら先生のお心や温かい思いを大切にして微力ながら頑張ってまいります。今頃先生は「みんながんばるのよ、もう任せるから」と、天国で藤原一郎さん達と好きだった麻雀を楽しんでおられるように思えて仕方ありません。松尾先生、本当にご苦労様でございました。どうか皆さんと一緒にゆっくりと麻雀を楽しんで下さい。

追憶

東京有隣会　理事長　石井　薫

今ここに立たされまして、もう胸が一杯で何を申し上げても本当にただただ先生が全部貫き通して、私共の心の中を全部ご覧になっていて下さるなという感じで、本当に先生ご苦労様でした、有難うございましただけで引っ込ませていただきたいという、そんな気持ちが私の中にはございます。

この地上で、松尾先生とお交わりができたという事がどんなに私の人間性を豊かにして下さったか、本当にその事を考えますと不思議な御縁だと思います。まず、私の兄嫁が女医で松尾先生と一緒に医者の学校で勉強していたという事、そして今日も姪が来ておりますが、姪が子供の時に一緒に気楽に松尾先生の所にお邪魔をしていたという事もあり、我が家は松尾先生にみんな関係しているような、何か遠い親戚のような気持でございました。また、老人福祉の仕事が段々難しくなる頃で、私も東京で色々な役を仰せつかったりしている時に、兄嫁が「なんといってもね、松尾先生は関西で一番早くからいいお仕事をなさっているから、おばさんもまず松尾先生の所にいらっしゃいよ」と、兄嫁から松尾先生の事を紹介されており、姪がまだ小さい時に兄嫁が早くから松尾先生の施設を知っていたという不思議な御縁でございました。

そして私は東京で老人福祉の仕事を始めました。昭和22年に主人が亡くなりましてからの私の仕事は子供でございました。例えば、小さな罪を犯した子供、何か物をとる子供、よそに忍び寄る子供、

結核の子供、そういう子供をたくさん預かって保護をし、何を食べさせていいのか、食べさせる物がないという、そういう感じの仕事の時代を過ごしておりました。
そんな時、兄嫁が「松尾先生はとてもいい老人福祉をなさっているから、おばさんも老人福祉をなさるのだったら松尾先生がいいわよ」と申しますし、そうかそういうことかという事もあり、我が家との関わりができたのでございます。

それ以降も、松尾先生は全国のキャップでございましたから東京にはよく出ていらっしゃる、東京では私も老人福祉の仕事がありましたからよくお目にかかるという事でした。ある日、朝早く電話がかかってきて「松尾周子です」、「先生どうかなさった?」、「あのな、東京へ出て来てホテルに一人で泊っているんや、せやけどなさみしいて、さみしいて、あかんね、先生すぐ来て、一緒に御飯食べてな」、そのようなお電話がかかってくることもあり、本当に姉妹のような他に言えない事も言えました。また、松尾先生が「これ欲しいな、買いたいな、せやけどやっぱり我慢せんといかんかなー」なんて、私が言いたい事を松尾先生が先に言われて、「私ねやっぱりこれ欲しいねん、あんたも欲しいか、私もそれ欲しいと思ったんや」という風な、女同士の話てそんなつまらない話もあるのです。今、松尾先生の写真を見て「なんて素敵、なんて素敵、そのお洋服どこで買ったの?」と、私がそんなお話をしたいような気持ですし、近くに寄って来て下さるような感じです。

そしてこんな鮮やかな、こんな素敵な大きな土地に、こんなりっぱな建物を建てて、そしてお一人お一人の心と体とを癒やす、みぎわな所でお一人お一人のお年寄りの姿をどんな満足の思いで見てい

らっしゃるのかなと、先ほどから席で覗かせていただきました。そしてこういう席に呼んでいただき本当にありがとう、「松尾先生、大変なことがあったら夢にでも出て来てね」なんて、そこの席で考えたりしていました。

よく東京から朝早く電話があって、「夕べから来てまんねん、せやけど寂しいてあかんわ」、そういう風なお電話をよく下さいました。松尾先生に「いらっしゃる前に連絡下さい」と言うと、「そんなことしていられないがな、思ったらすぐ立って出られへんで」と言われました。もうこの関西の言葉を覚えました。そんな風な、間柄でございました。

そして、松尾先生のこういう式にお呼びいただいて、こんなに医療と福祉とすべての事が全部整った、天国への道すがらも全部整えられているこのりっぱなみぎわ園を今日は拝見させていただいて、本当に私はもう豊かです。それに今日持ってきたこの帽子も、松尾先生に頂いたもので、その時のお手紙に「きれいな帽子を見つけました。私より四年も後から生まれた石井先生にはロイヤルブルーが似合うと思います、一番似合うと思いますからそれをプレゼントできる今日はとってもうれしい日です」「私にこの帽子をプレゼントできる今日はとってもうれしい日です」、これを読むとやっぱり涙があふれてきます。

この地上でこういう交わりを許されたということは、私には大きなお力をいただきました。ここにきてみて職員お一人お一人、役員の方々お一人お一人が、本当に福祉に徹した心でご自分を神様に捧げた所でこの仕事に関与していらっしゃるということがジンジン響いてまいります。

とても素敵なうれしい事にお招きいただいて、よく天にも昇る気持ちと言いますけれども私も今日は喜び一杯満たされております。また、東京で嫌な気持ちになったら新幹線に乗って、お邪魔させていただきます。

皆さんお一人お一人のお体にお気をつけになって、先生がじっと見つめていらして「ようやりよるな」と、「あんたは偉いで」と、先生は必ずお声をかけて下さっていると思いますので、どうぞお体をお大事になさって、またお目にかかれる日を楽しみに、そして私も有隣で困ったことがあったら目をつぶってこちらの様子を思い出して、そこからまた勇気をいただいて、元気をいただいて頑張ります。

私も、八十八歳になりました。主人が亡くなってから六十九年にもなりまして、もう九十近くもなって、仕事六十年も続けてきて、主人も亡くなり、息子も亡くなったものですから仕方なく老体に鞭打っているのです。遊びに行く時はとても元気なのですが、仕事になるといやだなとこの頃思う事があります。でも、お年寄り一人一人が今日先生に診ていただきました、どこも悪くないと言われました、どこも悪くないといって家に帰っても誰もいません。今日は先生に会いに来たのは、どこも悪くなくてもこの老人病院において下さいとか、あなたどこも悪くないのだから病院じゃなくて、どこか老人ホームへ行きなさいと言われるから、私の老人ホームに入れて下さいと、あの手この手で困った事を色々と言ってまいります。皆さんも健康管理をなさり、お年寄りが沢山増えてまいりましたけれども、お年寄りお一人お一人の、また弱い人のために自分の道を捧げるとか、その人にちょっと何か温かい心をかけてあげるとかして下さい。

私の所は「有隣」といい、隣に有るんです。職員が少し変な事をすると、「有隣でないわね」、「あの人は有隣と思ってここにいらしたのですよ、あの人がそう思っていてもあなたが彼女の本当の隣人でなければ有隣の看板は嘘になるのよ」と、年寄りの癖に相変わらず必要で言っています。今日は松尾先生ごめんなさいね、「体に気をつけてな、がんばってな」と声が聞こえました。たくさんの元気をいただいて帰らせていただきます。

追憶

中部学院大学教授　小笠原　祐次

私は中部学院大学教授と紹介されましたが、むしろ元職員という立場で追憶を語るということなのかなと、しかしそれにしては僅か二年の仕事、僅か四十分の二という短い期間ですのでどういう立場で思い出を語ればいいのか戸惑っております。そんな事を依頼された時に簡単に乗ってしまう、その軽薄さが私の大きな弱点なのかもしれません。でも私は松尾先生との思い出をお話する事となりますと、本当に一杯ありすぎてどう言えばいいのかわからなくなってしまいます。先程、石井先生がお話しになったような心温まる思い出という事ではありませんし、そういう点ではどうすればいいのか迷っています。

私が松尾先生に初めてお出会いしたのが全国の老人ホームの大きな集まり、大会の時だったのです。今から約二十五年前に私も全国の老人ホーム、老施協のお手伝いをしておりまして、研修には時々引っ張り出されておりました。その場で、松尾先生にお目にかかりました。松尾先生は看護婦さんに対する話、施設でお年寄りに向き合う看護婦がどうあらねばならないかということについて大変具体的でわかりやすく、病院看護婦とは違うという所について、本当に懇切丁寧に話をしていただきました。今の老人ホームの看護のありようの、言ってみれば原点を日本の看護婦たちに話をしてこられた、そういう場で私はお目にかかっております。その後、「老人ホームの百年の歩み」という仕事を老施協

からするようにということでお手伝いをし、それがまとまった頃、ちょうどいずみ寮ができた直後だと思いますけれども初めてお邪魔させていただいて、この建物の向こう側にありました診療所側の建物の部屋で一晩泊めていただいた時に、色々なお話を聞いて本当に松尾先生のすばらしさ、それと何よりも情熱です、つまり医師でありながら老人福祉をやっておられる松尾先生の話の中身がいってみれば社会事業家そのもの、私は社会福祉の専門の大学を出ましたけれども私たちが忘れてしまったような情熱を持っておられて、私はこういうことをしたいのだ、ああいうことをしたいのだということ、それから制度の挟間の中で救われない人たちがいるのだ、それを私はなんとかしたいのだという話を昏々とされまして、本当にその情熱の素晴らしさにうたれました。

そんな出会いから約十年経ってからです、ちょうど私が大学で教えておりました時に一つの壁にぶつかっていて、もう少し現場で学び直さなければいけないのではと思っていた時に、松尾先生に食事をしながらそのお話をしたら、「そしたらうちに来なはれ」ということになって、なんて先生なのだろう、つまり決まってもいないのに「来なはれ」と言って下さる松尾先生の胸の広さといいましょうか、一方では無謀といいますか、人柄も何にもわからない人間を捕まえて「どうぞ」と言われました。でもそういうきっかけで、みぎわ園で仕事をさせていただきました。その時の一つの思い出は、その頃の全国の老人ホームは大変増えておりました。千五百を超えておりました。その中で、松尾先生は大変中心的な役割を果たさなければいけないという事で全国を飛び回っておられました。しかし、松尾先生が施設におられれば、施設にお見えになれば、必ずお部屋を回られるのです。お一人お一人みん

な声をかけていかれるのです。先ほど石井先生も言われましたけれども本当に一人一人まわりながら具合の悪い人だと肩に手をおいたり、手を握ったりしながら声をかけていかれる、そうするとお年寄りが本当にそれで幸せそうな笑顔になられるのです。あの時の医者の凄さというのを教えていただきました。それからもうひとつ凄いというのが、やはりお一人お一人を大切にして一人一人の名前も顔もしっかり覚えておられるということ、当たり前といえば当たり前ですけれども、そういう事ができない施設長が少なからずありまして、そういう点でわたしは施設長の鏡のように思っておりますけれども、ちょうどその頃から個別処遇とか一人一人を大切にするサービスをしなければいけないと言われていたのですが、みぎわ園の場合にはもうそういうのを率先しており、特に一人一人を大切にするということで本当に感動的だったのが　ちょうど私がおりました時にみぎわ会の二十周年のお祝いをしました。その時に、これもまた松尾先生の特徴ですがとてもこだわりがあって、永年勤続の人にどんな物を贈ろうかということで贈る物を選ぶのに私は二日ぐらい松尾先生とお付き合いをしました。これがいいのかな、あれがいいのかなと、私はさっぱりしている方ですからもうそれでいいじゃないかと思うのですけれども、松尾先生は粘り強くというのか、頑固にというのか選ばれて、そして皆さんにプレゼントする物を決めていかれるのです。その時に松尾先生の一つのこだわりは一人一人を大切にする、これはお年寄りの一人一人を大切にするということだけではないのです。永年勤続の職員に賞状を渡すわけですが、その賞状を受け取った職員は憶えていると思いますけれども、一人一人全部文書が違うのです。ありきたりの二十年勤続して本当にご苦労様という文書ではなくて、その一人

一人の持っている特徴だとかそれから一人一人との出会いの場だとか、いつ就職したとかいうことまで含めてみんな先生は憶えておられ、それを一人一人の文書を書いて、いったい何人分の表彰状を書かれたのだろうと思いました。そういう一人一人、つまり人間一人がやっぱり私なのだということ、その事をそういう場で示して下さった、だから表彰状を受け取った職員たちは本当に感激していました。おそらくあんな表彰状は福祉の分野でもほとんどないと思っています。そういう所に本当に松尾先生の素晴らしさがありました。もちろんそういう素晴らしさだけではありません、厳しくてある場合には怖い思いをするということもありました。しかし、本当に一つ一つのそういう場面の素晴らしいリーダーシップや、一人一人に対する思いやりの中で、その厳しさが優しさに変わっていく。そういう中での私の大きな思い出は、研修の時に一分間スピーチというのを職員にされるのです。今各施設では研修に力を入れるようにという事を言われているのですけれども、みぎわ園ではもう開設の当初からされていて、全員がしゃべり全員が発言するという事をきっちりしていくために、ある課題を与えて一分間にまとめる、職員はもう大変苦労しました。でも一分間である事柄を自分の思いを語っていくという事をさせていく、その事によって職員を鍛えていく、つまり一人一人なのだという、そこを本当に強調されました。

もちろんそれだけではありません。例えばターミナルケアと今盛んに言われていますけれどもみぎわ園ではお亡くなりになるまでしっかり看取らせていただくというのがケアの基本です。それから当時、全国でほとんどなかったラウンジというのがありました。つまりお年寄りの皆さん方が少しホッとし

たい、コーヒーを飲みたい、お芋を食べたいという時にラウンジがありました。つまり、そういう事を含めて松尾先生は一人一人がいかに暮らしやすい生活をしていけるような条件を整えるか、そのために一人一人職員を育て、そしてお年寄りの生活しやすい場を作る、もちろん場を作ると言っても限られた条件の中で作っていくわけですから、今から見れば粗末かもしれません。しかし、そんな粗末な条件の中でも工夫してされて本当に職員の皆さんも、それからお年寄りの皆さんもそういうホッとできる場を作っていく、そういう事をされました。しかし、その後の私の学びの中で思えば確かに不十分だった所があるかもしれません、けれども当時としては私は最も優れたケアを実践していた施設だと思っています。誇りに思っていいと思っています。ただし事由にのるというやり方でのケアのやり方ではありませんでした、松尾先生流のみぎわ園流の独自のやり方ではあるけれども本当にお年寄りの皆さん方が安らかにここで時を過ごし、そして最後の時まで過ごしていただけるようにというようなケアを進めていくという点で、本当にきっちりとした物を造っていかれたそういう物が先ほど言ったような一つ一つのところで生かされていたのだろうと思っています。

最後ですけれども、今ここにおられるかどうかわかりませんが、西脇市立病院の脳外科で手術を受けた方がみぎわ園に来られました。頭蓋骨の一部を取られた状態でネットを張って入所されて来られましたけれどもその時にはもう植物人間で、もう元にもどることはできないというお話でしたけれども松尾先生の懇切な治療や、援助、そしてなによりも寮母職みんなの大きな力で担当の寮母がしっかり脇について本当に毎食のようにしっかり食事を差し上げていました。出来るだけそばにいるように

という事でいてあげました。その結果、表情がもどり、笑顔がもどり、言葉がもどったのです。もっとも優れた脳外科のお医者さん達がもう人間にもどることが無理かもしれないと診断された人をこのみぎわ園は人間にもどしたのです。こういう場面に出会う事ができた私は本当に幸せだったと思っています。そういうものを支えあった職員の皆さん、そしてお年寄りの皆さん、わずか二年の間に本当に語りつくせないそういう一つ一つの思い出、追憶もいっぱいありますけれどもそういうことを私に与えて下さった、その幸せを本当に感謝しています。

― 愛餐会 ―

追憶の言葉

兵庫県社会福祉協議会々長　辻　寛

ご紹介を頂きました社会福祉協議会の辻でございます。ここに来てから挨拶をという事なんで嫌そうにしますけど、気分を変えていきたいと思いますので宜しくお願い致します。私と先生との出会いは今から22年程前になります。私が老人福祉課長をしていた時に先生が県の老人福祉施設長会の会長と、今日もお見えですけれども、女性施設長の会というのを作っておられまして、これが非常に熱心に勉強しておられまして、私はまだ40代後半の課長でしたので「辻さんも女性施設長の会について来なさい」というわけですね。勉強しに来いというわけです。「ありがとうございます。」と勉強させてもらったのが始まりでして、その後20数年来ずっとお付合いさせて頂いております。

色んな思い出がありますが、2～3申し上げまして、一つは、心安く、私が一時福祉の仕事と他の仕事をしていました頃によく寄って頂いたのですが、神戸に来たら寄って頂きました。だいぶ若い時の話です。私早くに後家になりまして、当時美人やったんですけれども、今でも美人ですけど、西脇も田舎ですから、美人で若後家というのですから話の種にされて、してないのかもしれませんが私はそう思ったようです。町に出て行ってもキョロキョロキョロキョロ見つめられるよう。この仕事を始

めようとした時に役所の付き合いはなかったものですから県会議員に色々お世話になりました。ある時に神戸からの帰り、当時姫路からバスが出ていたんですか？「姫路のバス停で先生がちょっとお手洗いに行くとおっしゃるから、私が先生のかばんを持って控え室で待っていたら、翌日西脇中の噂で松尾さんが誰々先生のかばん持って姫路におったでと。そんな事がありましたので私はなるべく外へ出ないように致しました」しかも「私も90になりますと同年代の人が居られない」という事と「同年代の人が居られても付き合いをしておりませんでしたので、あまり地域で相談する人がないんですよ」というのが晩年のお話ですね。

私がお慕い申し上げておりましたのは、社会福祉法人の持続的発展という理念を持った松尾さんでした。その理念を、今後共万全の体制で引き継いでいってくれるかということに大変気遣っておられました。私未だに解決出来ない宿題を頂いております。ある時そういう心配の中で「辻さん、社会福祉法人を株式会社にする方法を研究してくれませんか」先生のおっしゃるのは普通の株式会社じゃないのです、新しい、要するに、こういう法人をさせてくれる、私もその理念に賛成しますという人だったら株を、新しい株主さんに入って頂いて公開された法人、松尾の施設じゃなくて地域の資源としてそういう制度はできないのでしょうかと。そしてまだ解決のしていない社会福祉法人のあり方について、今また藤本監事さんのほうから新しい宿題を頂きましたので私は西脇に来るたびに宿題を抱えて帰るということです。

追憶の言葉

泉ヶ丘福祉会理事長　赤井　和枝

今日も神戸の方から高谷先生もお見えになっているのですが、今年フォーラムの当番が大阪で、一応私が今年度の会長ということになっておりますので、一言僭越（せんえつ）ではございますが、松尾先生のご紹介とフォーラムの事をご紹介させて頂きます。

6月6～7日と大阪が当番で、リーガロイヤルにて、ちょうど20周年ということで大会をやらせて頂きました。介護保険が始まり、どこの法人も大変な時ですので、多分参加者が少ないだろうなと私共は予想しておりましたが、予想を上回る出席者で、本当に皆様に喜んで頂いた大会をさせて頂いた事を、まず松尾先生に報告申し上げます。

昨年の6月の時は、まだ先生がおいでになったのになぁというようなところで、私ご挨拶させて頂いたのですが、この20周年の松尾先生の思い出のアルバムを見せて頂いて思いましたのは、「ああ、あの時期に私は松尾先生と出会ったんだな」という事を思いながら画面を見させて頂いたのですが、先生はまだ今でも仕事の上ではどうしても女性の経営者というのと、男性の経営者というのでは何かちょっと日本社会では違いがあるという事をずっとおっしゃっていました。20年前にお付き合いが始まってから、先生より「近畿で女性の経営者の会をしようよ」という呼びかけがありまして、一番最初、滋賀県から始まって今年が20年という事で大阪で大会をさせて頂いたのですが、小笠原先生の

ご挨拶の所で私は、今日は研修に寄せてもらったぐらいで、ご立派なご挨拶がございましたのですが、小笠原先生のお話の中にありましたように、松尾先生は昔から看護婦さんの質を上げるために「病院の看護婦さんと施設の看護婦は違うんやで」という事をずっとおっしゃっていました。先生はお医者さんですから相当思い切った事を言われるのですが、どうしても私たちは医師法にかかるのではないかという事で、看護職員と介護職員の医療の所で踏み込めない所があったのですが、ご承知のように、今ターミナルという事で看取りの指針というのが出ていまして、これから医師法も変わりますから、もっともっと介護職員に医療の場所まで踏み込まそうと国は思っているようですが、松尾先生はもう20数年前から、看護婦さんの研修会で、今厚生省が言っているような事を毎回言っておられました。私たちはやっぱり怖いからできなかったのですが、これからは松尾先生がおっしゃって私たちを導いてくれたような形が、ずっと出てくるのではないかなと思っています。先生とお付き合いさせて頂いて私は本当にたくさんの事を先生から教えて頂いたのですが、私は今日、寄せて頂いてこの何時間かの間でも覚えた事と又、6月6～7日の2日間の大会の中で講師の先生方皆さん4人おられたのですが、4人共宗旨は違うんですが皆さん信仰を持っておられまして、3人まではキリスト教の関係の方で、一人はお父さんが高校の教師か何かで道徳を小さい頃からしっかり子供に教えてきたということを言われていました。私は無信党者で宗教というのを持っていないのですが、松尾先生とのお付き合いの中で思ったことは、先生が一つの信念を持っているというのはやっぱり信仰を持っているからやなと、ふと思いました。

今日10時過ぎからここへ寄せてもらって思ったのですが、先生が残された職員さん皆さんに先生の信仰がずっと伝わっているような、理事長さん始め、園長さん皆さん先生の意思を継いで本当に立派になさっているというか、本当に身内のような気持ちで感謝をさせて頂きました。私は、先生にいつも叱られる事もあったのですが、時には私は嫁みたいだなと先生の息子の嫁みたいだなと思って叱られているのだなと先生を本当に義理の母親みたいに慕っていたのですが、ここ西脇の方に先生が亡くなったら来る事もなくなったなと思っていたのですが、満子さん始め園長さん、またこの前のフォーラムに2名の先生方がお見えになられたのですが、これからも私たちはお付き合いさせて頂きたいという風に思います。

最後になりましたが、また6～7日の話になるのですが、コシノジュンコさんを、たまたま20周年ということで、記念講演でお願いしましたら、コシノジュンコさんはご承知のようにお願いしてからお母様が亡くなられまして題を変えて「母を思う」というテーマでお話なさいました。私も最初ですので、本人と一対一でお話させてもらったのですが「そうやなぁ、私は保育園もやってて子供の教育にも携わってきたのになぁ、やっぱりこういう子供を育てなあかんのやなぁ」と思ったのは、世界に通用する何か華があるのです。やっぱり松尾先生がみぎわ園の色とか匂いとかみぎわ園はよそと違うような特色のある施設ということをずっとおっしゃっていたのですが、人間そうじゃないかなという風な事を、コシノジュンコさんを傍で見て、私、大阪のセンスにもこんな立派な人がいてたんやなと、テレビでは見ていたのですが、傍で見させてもらって本当に「偉い人やなぁ」とお話をちょっとした

だけで、私たちをファンに引き入れるというかそういう魅力がコシノジュンコさんにはあったのだなぁと、それで松尾先生も私たちが先生を慕って、松尾ロジックやと言って私も慕っているのですが、そういう事を松尾先生も持ってたんやなぁと、共通する所があったなぁという事を思いました。

今日私急にお話をという事を言われましたので、取り留めのない話をさせて頂きましたが、先生の亡くなりました6月14日というのは、私の次男が生まれた日で、次男が結婚したのが先生が亡くなられた6月14日なんです。次男の夫婦も両方とも6月14日という何か先生とご縁ができてしまったような気がして、先生の亡くなられた6月14日は私も生きている限り忘れない日になってしまったと思っているのですが、どうぞ、これからもみぎわ園の皆さん、私たちをフォーラム共々見捨てないように、これからもどうぞ仲良くして頂きますことをお願い申し上げて、先生とのお付き合いのご挨拶にさせて頂きます。本当にどうもありがとうございました。

追憶の言葉

元篠山教会牧師　星野　久雄

三田から参りました星野久雄です。牧会を辞めましてから丸三年です。ただの氏に戻りました。ここへ入って来るときに芹生さんに「何か一つ話して下さい。」と言われ、とたんに食事の時に食欲が落ちてしまいました。

松尾先生とは、礼拝で16年間お世話になり、大変色んな事を教えられました。先程お話なさったご長男の奥様の満子さん、この方が一番身近に松尾先生をお世話した方なのです。その事で実は今日凡平さんが来られたら一言言おうと思っていたのです。残念ながらこの場所におられないので言えないのですが、後を継いでほしい。松尾先生の気持ちを本当によく理解しているのは次男の凡平さんだと私は思うのです。色々な事情で離れて生活しておられますけれども、松尾先生が生涯かけて引き継いできたこの施設をもっとよく盛り上げてほしい。これが私の実は30年前からの希望だったのです。説教の中でもその事を話しますと、松尾先生に叱られました。今頃から何を言うかと言うわけです。ですけれども、これは本当に私の願いであって牧会の中で私が呼び出された一つの結論でございました。

ご長男の三平さんですが、この方は途中から大変体が不自由になられまして、なんと10年程、私の礼拝の司会をして下さいました。だんだん言葉が回らなくなりました。でも讃美歌を大変楽しく歌われた方であります。大変松尾先生も気に掛けておられたのですが、他界され、この世を離れられて、

召されるような状態になられたのですが、本当に三平さんは想いを残しながら召されていったと思うのです。ですから、松尾先生のお気持ちも十分その時に分かると思います。ある礼拝のときに、私三人の方を見送りするお別れの式を教会で致しました。教会堂に行きましたら松尾先生が晴着の様な着物を着ていらしたのです。「先生何でそんな綺麗な着物を着て来られたのですか?」と聞いたら「これは、天国に行く門口がこの教会なのだから、喜びの印だ」と言うわけですね。私びっくり致しました。ある時に私讃美歌を選んだのですけれども、この讃美歌が結婚式の歌でした。その時に「先生、これ今日の讃美歌にふさわしくありませんね」と言うわけですね。私言い返してやりました。「礼拝は喜びの時で、結婚式と同じなのだから。そういう意味でこれを選んだのです。」「そうですか。」と言うわけです。まぁ、そういうことで、先生とは色々なやりとりもありましたが、色んなことで教えられました。やはり福祉関係では私たちも篠山、三田にも何箇所か施設がございますが、ここの施設はそういう意味では生きた施設、あるいは温かい施設という面では私共は大変誉れ高い施設だと思っております。その事を私は願っております。そういう事で、あんまり長くなりますと、コーヒーが出ましたのでコーヒーがまずくなりますので、ここで終わらせて頂きます。

あとがき

「わたしの小さなたより」第一集は一九九五年三月、第二集は二〇〇二年五月に松尾先生が自費で発刊されました。

これは一九七七年から毎月、松尾先生がみぎわ会だよりの巻頭言に書き続けられてきたことを小冊子にされたものですが、このみぎわ会だよりは現在、第二〇六号に至っています。先生が書かれた約三十年はみぎわ会の歴史そのものです。

この毎月のたよりを楽しみにされていた方はどれほど多くおられたことでしょう。私もその一人です。園の様子をただ伝えるだけでなく、エッセイ的な豊かな表現、情緒あふれる行間は、読む人を一瞬に惹きつける魅力があります。

そんな、松尾先生のたよりを最後までまとめたいと想い、この度の召天三年式に合わせ編集しました。そして、一年記念式の記録と共にここに完成いたしました。小さな冊子ですが、松尾先生の魅力とみぎわ会の歴史が改めて多くの方に届くことを願いつつ、ここにお贈り致します。

二〇〇八年六月　みぎわ園　芹生哲也

わたしの小さなたより　第三集

2008年6月14日
著者　　社会福祉法人 みぎわ会
印刷　　ケーツー企画